

# 緑谷夫妻のやり直し

伊乃

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

巨悪は斃れ、英雄もまた死す。

ヴィラン連合との抗争の果て、首魁を討つも代償として  
僕、緑谷出久は己と己の最愛の命を失った。

…はずだった。



原作準拠で話を進める予定ですが、敢えて原作の読み返しは行いません。

その為、台詞や言い回し、展開に差異が生じると思いますが、目を瞑っていただきます。  
と思います。

誤字や展開の違和感等は感想等を使い、ドシドシお送りください。

2019/09/07

原作情報による一部変更のお知らせ（対象ページ：14話）

後書きに変更点を記載しました。

楽しんでみるみなさまにはご迷惑をおかけして申し訳ございません。

# 目次

Re :

1. The end of Her

o (英雄の最期) ————— 1

2. Retrograde (逆行)

8

3. Confirmation,

Reunion, Partner (確

認、再会、相棒) ————— 18

4. Talking about :

(話すことは…) ————— 28

5. Check my status

(能力確認) ————— 36

6. Hang up after

you (君の後に切る電話) ————— 44

7. How to reach t

he best (最高に至る筋書き)

53

8. The end of hero

ine (彼女の最期) ————— 61

9. Three family c

onference (三家族会議)

72

10. My decision || Ou

r decision (僕の決意 || 僕ら

の決意) ————— 81

11.	Naked relation	16.	Alittleste
ns hip (裸の付き合い) 【暴走回】		p, Maximum change (小	
90		さな一歩、最大の変化)	132
Turn: past		17. Old maid (ババ抜き)	
12.	Master teacher	142	
r (師匠の師匠)	98	18. Slap with you	
13.	Past Master v	r hand (平手打ち)	151
s Future Discipline		19. Adversity Bui	
(過去の師匠 vs 未来の弟子)	107	lds Character (雨降つて	
14.	Heroes like b	地固まる)	160
one (骨のようなヒーロー)	115	20. Red Riot (烈怒頼雄斗)	
15.	10th success o		169
r (第10代継承者)	122	21. Faceless (無貌)	

221	asee!! (ダンス&amp;チエイイス!!)	221
212	26. Dance & amp; ; Ch creasees (『一緒』が増える)	212
	25. " Together" in	203
	Friend (VS幼馴染)	203
	24. VS Childhood	195
	se (限定免許)	195
	23. Limited licen	186
	(平穏な一幕)	186
	22. Peaceful act	178
	27. Training / Da	
	rk clouds (トレーニング / 暗	
	雲)	230
	28. Darkness / Growt	239
	h (暗闇 / 成長)	239
	29. Blood Madness	247
	Muscular (血狂いマスキュラー)	247
	30. Rescue operat	256
	ion (救出作戦)	256

Re :

1. The end of Hero (英雄の最期)

その日は、夏の暑さの残る処暑だと朝のニュースで言っていた。

およそ十年間続いた連合との戦いに終止符を打つべく作戦会議を行った後にほんの数分見た天気予報が思い出され、どうでもいいと頭を振る。

諸悪の根源は打倒した。

奴の力の源の両の手のひらは上腕中程で折れており、右腕に至っては関節の数を数えるのが億劫になるほど、ぐしやぐしやにしてしまったほどだ。

今は打撃による脳震盪と痛みによるショックで青天の様相で昏倒している。

勝利の余韻よりも喪失感の方が大きい。

勝ちの代償としては失うものが大き過ぎた。

僕だけに限って言うてもまず間違いなく助からない。

右目の喪失と左足首の切断。

左脇腹もボロボロに崩壊してしまっていて止め処なく出血している。

その為か、夏の暑さは感じず、逆に震えるほど寒い。

適当に拾い上げた、半ばで崩れ落ちた標識を杖に、痛む身体を推し、血の足跡を残しながら進む。

最愛の人が斃れた場所を目指して。

まるで神野の悪夢の再現だ。

どこもかしこも崩れ、壊れ、いびつな更地になっている。歩みにくい足元を霞む目で確認しながら歩く。

途中で転がることなく、歩む僕は存外器用だったのかも知れない。

亀にも劣る歩みで進むと子供の押し殺した鳴き声が遠退く聴覚を叩いた。

もう少しだと一踏ん張り。

瓦礫の小山を這って登り、その一番上から幼い女の子と最愛の人が居るのが見えた。

「…ッ!? デクううううう!!」

僕に気付いた女の子は擦り剥いて流れる血を気にせず僕に駆け寄ってきた。

「もう大丈夫だよ。悪い敵（ヴィラン）はやっつけたから」

痛みも疲れも何もかもを置き去りに笑顔を浮かべてみせた。

この子は不安だったんだ。

心配ない、と安心させてあげなきゃいけない。



僕はヒーローなんだ。

だから、これはやらなきゃいけない。

ヒーローとしての義務なんだ。

痛みも疲れも感じさせない笑みを浮かべる。

それ以外に拘っている暇は今はない。

「でも……っ！ウラビティがっ！あたしを庇って……っ!!」

「大丈夫。インゲニウムがこつちに向かつてるって。君はもちろん僕らも必ず助かるさ」

元気を繕い、声を張って彼女に応えた。

「ここは瓦礫の陰になって見つかりにくいかもしれないから君は瓦礫の向こうにまっすぐ歩いて行ってくれるかな？もう危険はないから大丈夫だからね？」

「本当なら彼女を連れて行くべきなんだが、如何せんこれ以上どこも動かさそうになり。」

一人前のヒーローとして、情けない限りだ。

「で、でも……っ！」

「大丈夫だから。僕はウラビティの応急処置をするから先に行つて？ね？」

愚図る彼女を奮い立たせ、何とか助けを呼びに行つてもらった。

それを横目に確認しながら再度標識を握った。

少女が追った十数歩があまりに遠い。

残り五歩程度の距離で握力を無くし、ベシヤリと倒れ臥す。

「遅くなつてごめんね、お茶子さん。」

不恰好な匍匐前進で残りの五歩を埋めた後、割れたバイザーを除けながらそう声を掛けた。

「…あー…デクくん…おつかれさまあ…。」

寝起きのような半目でこちらを見る彼女の髪を左手で撫でつけながら「ただいま」と言う。

「…あー、髪。僕の血で汚しちゃった。落とすの大変かも…ゴメンね…」

「…いー…よー…。お互いボロボロだし…仕方ない…よ…。」

息も絶え絶えの様相なのにそう感じさせないような、ふにやりとした麗らかな笑みを浮かべる。

「その表情。ずっと好きだったんだよなあ、僕…。もつと早く言えば良かったね…」

「そんなん…今更やん。私だって…デクくんの笑顔ずーっと…好きやったよ…」

お互いに血塗れ、死の手前だと言うのにそう感じさせない雰囲気を出してる。

「デクくん…今インゲニウムが…オーバーキユア連れて…こつちに走ってる…って…。」

「飯田君とエリちゃんが……。間に合う……。ゴポツ……。かなあ……。」

不意に訪れた吐血に身体を動かすこと叶わず、手で抑えるのみに止まった為、数滴彼女の頬を濡らした。

「ゴメンね、汚しちゃったね……。」

「大……じよーぶ……。デク君のなら……。へーき……。へーき……。」

えへへ……と力無く、されど力強い笑みを浮かべる彼女。

そんな笑顔を見てこちらも笑顔になる。

「長い戦いも……。終わったし……。これから平和な時代になる……。よね……。」

「そーだよ……。私たちが頑張ったんだ……。って……。きつと教科書にも載つちやうよ……。」

『斯くして……。ヴィラン連合の首魁はヒーロー……。ウラビティとヒーローデクの奮戦に……。より……。討たれたのである』って感じ……。かな……。？』

「……えー……。私の方が……。先……。なの？』」

「僕はそうが……。いいなあ……。」

「じゃあ……。そう出版社の人に……。お願いしないと……。だね……。」

「まずは無事に……。生きて戻らなきゃ……。だね……。」

「そー……。だね……。」

取り留めもない会話を続けるもの呼吸が段々浅くなっていく。

繋いだ手の力が抜けて行くのを互いに感じていた。

「なんだか…寒いねー…」

「僕も寒いや…なんだか…眠くなってきたよ…」

「ダメだよー…『寝たら死ぬぞー』…って言うじゃない…」

彼女は冗談めかして言い、状況にピツタリなものだった為に、お互い小さく声に出して笑い合った。

「デク君…『次』って…あるのかなあ…」

「どうだろう…あつたら…ゲフツ！ゴポツ…いい…なあ…」

先程吐いてから抑えていた血が気道から逆流し、我慢しきれず再度吐く。

「お互い…間に合いそうに…ないねえ…」

「そー…だねえ…」

コンクリート地の窪地に倒れていたこともあって僕らの血は瓦礫に染み込むこともなく混ざり合い、小さく浅い池となりヒタヒタと水面を揺らしていた。

「次も…君を好きになるよ…」

「あたし…もー…」

互いに笑い合い、そしてそのまま目を閉じた。

眠る時のように意識が浮上する感覚。

手に握ったままの彼女の手の感覚がある気がする。  
こうして。

デクこと緑谷出久とウラビティこと緑谷お茶子はその生涯に幕を下ろした。

…はずだった。

## 2. R e t r o g r a d e (逆行)

……………て……………

……………く……………

遠くから声が聞こえた気がした。

真つ暗闇。

僕は確か死柄木との戦いで重傷を受け、出血多量で死んでもおかしくない状況だったはずだ。

飯田君が間に合ったのかなあ…？

だとしたら早いうちにお礼を言わなきゃ、だね。

重傷と疲労によつてから瞼を開けるのも気怠く、億劫に感じるが、呼ばれているのなら起きなくては、と奮起するも睡眠の心地良さに抗いきれない。

……………おき……………ず……………

今度は身体を揺さ振られる感覚。

重傷者を揺さぶるとは何たる愚行か。

早く目を開けて一言言つて聞かせなくては。

億劫を押し退けてゆつくりと瞼を持ち上げて光を取り込む。

「やつと起きた出久。全く、お寝坊さんね?」

「かあ…:さん?」

視界に入つてきたのは若かりし頃の母さんだった。

いや、おかしい、あり得ない。

だつて母さんは二年前に死柄杓木たちに捕らえられ、首だけを送り返された筈だ。

それにいくらなんでも若過ぎる。

「今日の【個性】診断が楽しみで夜更かしでもしてたのー?それで寝坊してちや本末転倒よー?」

【個性】診断!?

全国で行われる【個性】の有無を確認するあの検査?

つまりは…今日は二十年前のあの日…なのか…？

「母さん、今日って何月何日？」

「…？おかしな子ね？今日は9月2日でしょ？」

「…何年？」

「2x19年でしょ？」

僕の記憶が確かなら今日は2x39年の9月2日だ。

と言うことは…

「…戻った…？」

早く着替えてご飯食べる準備しなさいねー、と言葉を残して部屋から出て行く母さん。

その言葉が耳を通り過ぎて反対から抜けて行くようだった。

ぐるりと周囲を見渡すと母さんに誕生日にもらったオールマイトの1/10スケールフィギュアがサイドチェストの上に鎮座していた。

その他にフィギュアやポスターが所狭しと置いてあった筈だが、そんなもの影も形もない。

視線を下ろしてみれば、傷ひとつない小さな右手。

布団を捲れば、失ったはずの左足首が小さくなったものの付いていた。



あまりの事態に理解が追いつかない。

僕とお茶子さんは命を落としたと思ったら、20年前に戻ってきた。

事態はあまりにシンプルだが、シンプルな為に受け止められない。

布団を吹き飛ばし、リビングに走るとテレビのリモコンを引ったくりテレビを付けた。

どのチャンネルも以前行っていた番組ばかりだ。

どれもこれも既に終了した番組ばかりでこんな事を仕込むことなんてきつと出来ない…。

「20年の時間を巻き戻った」としか思えない。

夢や幻ではないかと疑い、右手で頬をつまみ上げグイグイ引っ張っても確かな痛みを残すのみに終わった。

「出久！早く着替えてきなさい！ご飯も早く食べてちょうだい！」

「は、はい！」

起きて部屋から出てきたと思えば寝間着のままだった僕を見てキッチンから怒声を飛ばす母さん。

出掛ける用事も有るし、急いで準備することにする。

「出久にもきつとすぐに【個性】が出るわよ。何たって私と久さんの子供ですもの」  
右手を母さんに引かれながら過去に【個性】診断を受けた病院へと進んで行く。

『ヒーローになるのは諦めた方がいい』と伝えられたあの病院だ。

【個性】を持つ人間が人口の八割。

残りの二割の【無個性】で有ると、烙印を押されたその日その場所であった。  
どうやら二十年前に巻き戻ったらしい。

しかし、巻き戻ったらしいのだが、どうやら違うらしかった。

しゃけの塩焼きと漬け物、味噌汁とご飯と言う和の朝食を食べながら母の目を盗んで  
【個性】を使おうと右人差し指に力を入れた。

僕の【個性】は力を発現させると緑色のスパークが走る。

その現象が間違いなく起こったのだった。

どうやらワン・フォー・オールは持ったまま過去に戻ってきているらしい。

なんで？ どうして？ 何が原因？

脳裏に浮かぶ疑問は尽きない。

なんで僕だけ？

こう疑問が浮かんだ時、本当に僕だけか？と連鎖的に浮かび上がった。

もしかしたらお茶子さんも戻ってきてるかもしれない！

そう思うと確認したくてたまらなかつたが、今は母さんの目もあるし、難しい。

どうにか公衆電話で電話する術を考えなくては…。

「母さん、お願いがあるんだけど…」

「どうしたの久々？いつもなら『お母さん』って言うのに今日は朝から『母さん』って呼んで？あ、もしかして今日から大人の仲間入りだからって背伸びしてるのかな？」

いつの頃から呼び方を変えたから今にしては思い出せないが、確かに幼い頃は『お母さん』と呼んでいた。

些事であつた為、慣れた呼び方をしていたのは失念だった。

「そ、そんなことより、お願いがあるんだけど、診断が終わつたら電話したいんだ！二百円くらいちょうだい！」

出来るだけ幼い口調を心掛けながら、考えた作戦の通りのおねだりをしてみる。

「公衆電話の使い方覚えてる？テレフォンカードの方がいいかしら」

「どっちでも大丈夫！けど、テレフォンカードの方が楽でいいかもしれない」

「それじゃあ、このカードあげるわ？しつかりオールマイトのお財布に入れておくのよ」  
背負わされたリュックサックの中に入っていたオールマイトを模したポシェットの  
ような財布にしまってくれた。

これでいつでも電話は出来る。

あとは隙を見て公衆電話で連絡するだけ…。

僕はいくつかの電話番号を諳で覚えていた。

自宅、実家、自分の携帯、相棒の携帯、そして彼女の携帯と実家だ。

戦闘の影響で何度携帯電話を壊したか分からないが、その為にその数件に関しては必  
要に駆られて覚えたのだった。

【総合カウンター】と書かれた表札が見える。

母さんが受付をしに、そちらに向かう途中病院の見取り図を横目で確認した。

公衆電話はトイレの少し奥だ。

「出久、少ししたら骨の写真を撮るからしばらくここで待ってましようね」  
「うん」

トイレに行きたいと言えば行かせてもらえるだろうが、ここは我慢だ。

—————  
「結論から言うと、諦めた方がいいね」

その台詞は昔に聞いたものと一言一句変わらなかつた。

「この足のレントゲンを見れば分かるのだが、小指の末端の骨は非常に小さく、使われることのほとんどない関節がある。故にこの関節が退化し、関節が一つしかない者が進化した人類という事になる。彼の関節が二つあるのは隔世遺伝だろうが、このタイプに【個性】が発現した例は滅多にない。だから、【個性】が芽生えることは諦めた方が賢明だよ。」

母さんが隣で口元に手を当て、ワナワナ震えているのが横目で見えた。

きつと僕がショックを受けていると思つているのだろう。

「そうなんですか。分かりました」

なので、アツサリと飲み込んだティを取る。

左から驚愕の雰囲気伝わってくるが、それに取り合わず、すぐに立ち上がり部屋から退室する。

「失礼しました」

母さんを待たずに先に出た。

「ありがとうございます」

そう言いつつ遅れて母さんも退出。

何と声をかければ良いか迷っているようだ。

「母さん、僕トイレ行ってくるね。ついでに電話もしてくるからさつきいたところで待ってて」

その場から歩き出し、後ろを見ながら軽く手を振って僕はトイレに向かった。

止めようか迷い、宙空を彷徨う母さんの右手を目にしながらも前を向いて歩き続けた。

角を曲がり、トイレに着くも通り過ぎ、目的の公衆電話へ。

逸る気持ちを抑えながら前後の通路の人の有無を確認。

気配を探るも誰もいないことを確認して受話器に手をかけた。

口で諄んじながらプッシュキーを押すこと十桁分。

呼び出しコールが鳴り出し、4回目。

繋がった。

『もしもし、麗日です』

お茶子さんのお母さんの声だ。

「もしもし、僕緑谷って言います。お茶子さんいらっしやいますか？」

出来る限り子供らしく、かつ出来るだけ丁寧。

『緑谷くん？お茶子のお友達かしら？』

「デクと言えば分かってくれると思います。代わってもらえますか？」

ちよつと待つてね、と軽く前置きの後に保留音。  
数秒間が長く感じる。

どちらに転ぶか、どちらに転んで欲しいのか。

この時代に戻ってきたのは僕だけなのか…それとも…。  
ガチャッ

保留音が途切れ、再び通話状態になった。

ゴクリ、と無意識に唾を飲み込んでいた。

「デクくんツ?!?!」

記憶よりも幾分か高い声音。

されど聞き間違うはずもない愛する人の声。

自然と涙が溢れてきたのを歪む視界で気付いた。

### 3. Partner (確認、再会、相棒)

『デクくんツ?!?!』

耳元に届く心地よい声。

聞き慣れた少し訛ったイントネーション。

「お茶子さん、君も昨日の記憶があるんだね？」

『うんーうんー!』

お互いが涙声である事はバレているだろう。

無事と言えればいいのか、過去の世界に一人で来てしまった訳ではなかったと言えればいいのか考えがまとまらない。

「お茶子さん、メモできる？ウチの電話番号教えるから。今は病院の公衆電話からかけてる。現状を伝えると今日は二十年前の9月2日みたい。」

『うん、それはこつちでも把握しとる。しかも、個性の成長は変わってないみたい。』

「それはまだ確認出来てなかった。僕の方は検査では無個性って診断されたけど、ワン・フォー・オールがある事は確認した。」



『ホントに!? 制御の方は大丈夫なの?』

「まだフルカウルは試してないけど、部分制御は出来た。20%まで流したところで辞めたんだ。【黒鞭】とか【操作】は折を見て確認するつもり。」

『無茶しちやあかんよ。それだけは約束して』

「エリちゃんも居ないし、リカバリーガールとの伝手も無い内に無理はできないなあ……」  
と言うかする勇氣もない。

互いに分かっていることを共有しあい、話が進む。

進むにつれて話題は脱線するも会話は途切れなかった。  
が、ふとした瞬間互いの思いが小さく爆発した。

『……会いたい……』

全く同じタイミング。

正しく以心伝心。

異口同音、の言葉を成した。

回線による遅れを考慮しても100%合致のシンクロ具合である。

その後、どちらからかの我慢の限界を示唆する破裂音の後、お互いに笑い声が上がった。

数十秒間笑い続けた二人は、どちらの顔も見えていないのに、きつと涙でぐしゃぐ

しやにした、いびつな笑顔になっていいるだろう、とアタリを付け、正しくそれで当たっていた。

頬を伝う涙をオールマイトプリントのTシャツの肩口で適当に拭うと自然な笑みへと変わる。

「お茶子さん、それはまた後で詰めよう。とりあえず、家からまた掛けるからね。」

『分かった、待ってるね?』

顔の横で開いた手のひらを小さく振る姿を幻視し、受話器を耳から離す。

ふと、思い立ち再び耳に当てると

「お茶子さん?」

『ん?なーに?』

「愛してる」

『ん。ウチも愛しとーよ』

自然と口に出た言葉は相手に渡り、帰ってきた言葉に自然と口が綻ぶ。

「またね」

『バイバイ』

ガチャン。

虚しさを象徴する音ともに通話が終了した。

だが、大きく状況が変わった。

僕は一人じゃなかった。

—————

「ただいま、母さん。」

「お帰り。誰に電話してたの?」

待合室に向かうとソファに腰を下ろした母さんが迎えてくれた。

迎え入れの言葉の後に続くのは、当然の疑問だった。

「それに関してなんだけど、後で聞いて欲しいことがあるんだ。家に帰ったら話すから」

「そーなの? どんなお話?」

「色々だよ。【個性】の事とか未来の事とか」

一瞬、母さんの顔に影が差すもすぐに取り繕い、「何なのかしら、気になるわ」と何でもない風を装っていた。

その後、母さんは小さくよいしょ、と声に出しながら自然に僕の手を取り、そのまま外へと向かう。

「どこかで買い物してお家でお昼食べる? それとも外食にする?」

「家で良いよ、母さん。母さんのカツ丼が食べたいな」

よーし、腕によりを掛けて作っちゃうわよー!と右腕に力こぶを作るようにする母さん。

ああ、幼い頃はこんな感じだったな、と眩しいものを見るかのように目を細めてしまった。

「あ、いずくー!」

記憶の彼方の声。

彼にこう呼ばれるのは、ちょうど今くらいの時期までだったように思える。

「かつちゃん…?」

記憶のままの姿、呼び方、態度。

道の反対側、横断歩道の先に彼がいた。

おーい、と手を高く掲げ、パチパチと破裂音をその手から鳴らしている。

爆豪勝己、僕の幼馴染。

幼稚園で仲良くなり、以後高校卒業後のヒーロー活動で影に日向に支えてくれた相棒。

約十年間関係が拗れていたが、高校二年中頃に復旧。

以後八年もの間、良好な関係を築いていたものの、敵連合の手引きで脱獄したオール・

フオー・ワンと相打ちとなる形でその命を落とした。

姿、声は幼くともそれらは2年振りに感じる爆豪勝己の存在だった。

自然と潤む視界を目頭ごと抑えつけ、大きく手を振り返す。

「かつちゃん！」

横断歩道の信号が青に変わったことを確認し、左右の安全確認をしてから、駆け足でこちらに寄ってくる。

「こんにちは！いずくのおばさん！」

「こんにちは、勝己くん。一人なの？」

「そーだよ！母ちゃんには内緒なんだ！」

「光己さんが心配するわよ？ちゃんと出掛けるのなら言わないと。」

「へーきだよ！母ちゃん、ずぶといから！」

どこでそんな言葉を覚えてくるのかしら…と困り顔の母さん。

「かつちゃん、お昼もう食べた？」

二人の掛け合いが止まったところで僕も話題を振る。

「朝ごはん食べてすぐに出たからまだだぜ！」

「そつか。ねえ母さん。かつちゃん家に呼んでも良い？」

「放つとくよりも家にいてもらった方が光己さんも安心でしょうね…勝己くん、ウチで

「ご飯食べてきなさい？」

「ごちそうになります！」

「あら、礼儀がすっかり出来てるわね。」

今日は出久にカツ井作つておねだりされたから、腕によりを掛けるわ！と先程と同じポーズを取りながら再度宣言。

その宣言にかつちゃんもわーい、と続く。

その二人の数歩後ろを続ける僕は左目から溢れた一滴の涙の跡を拳で拭った。

ふと、示し合わせたかのように振り返る二人。

二人とも同じようなことを口にする。

曰く、置いてくぞ、と。

「待ってよー！」

慌てたそぶりを作つて見せ、小さな歩幅で駆け出した。

僕が死んだはずの時代ではどちらも失ってしまった。

それを再び目に出ることが出来て僕は二人に隠れてコツソリと涙した。

—————

「出来たわよー」

調理完了を告げる母さんの声。

僕とかつちゃんはやっていったレーシングゲームを投げ出して、食卓へ走る。

「ほら、食べる前は手を洗いなさい。はい、洗面所までダッシュユー！」

椅子を引こうとしていた僕とかつちゃんは母さんの柏手に反応して目標ルートを食べ卓から洗面所に変えた。

先に戻った方には大きいお肉の方を上げる、と言われてしまったのは俄然やる気が出るというもの。

長くもない廊下を駆け、脱衣所と共用の洗面所に駆け込む。

ほぼ同着だが、僅差でかつちゃんの優勢。

「おつきい方は俺がいただきー！」

コック式の蛇口を開放して、水を出す。

その一瞬の動作の差で勝つ！

「ポンプは僕が先！」

「あー！ずっこいぞ、いずくー！」

ハンドソープを片手に、もう片方の手を水に濡らす。

わしゃわしゃと適当に泡だて、サツと流す。

そして、壁に掛かったタオルも一本。

先にタオルを取り、手を拭く。

「おっ先ー！」

「あー待てー！」

タオルを受け取り、手を拭いたかつちゃんが猛追。

しかし、猛追虚しく

「僕、いちばーん！」

精神的には25歳の大人なのだが、これはこれで面白いものだ。

「くっそー！いづくに負けるなんてー！」

目を強く瞑り、歯をイーツと剥き出しにしている。

これはなんて言えば良いのかな：満面の悔しみ？

「白熱したデットヒートを制した出久選手には賞品として肉の大きいカツ丼を進呈。惜

しくも敗れた勝己選手。副賞として卵の多いカツ丼を贈呈いたします。おめでとうござ

いませーす！」

お玉をマイク代わりにレース大会の司会のような振る舞いをする母さん。

何となく様になってしまっているから、新たな一面を見た気分になる。

思い出す過去の風景としては勝負事は全てかつちゃんに負けてきた僕。



こんな展開になったのは幼い時分では初めてだったのかもしれない。  
少し良い気分かも知れない。

だから、こんな余興もやる気分である。

「えー！かつちゃんのが卵多いの!?!そっちのが良いなあ!!」

潜入調査の過程で培った演技力は健在。

あたかも隣の芝生は青いと宣う。

「いづくはお肉大きいから良いだろー！あーげなーいよー！」

いーな、いーな！と繰り返す。

童心に帰るというのも悪くないが、こんな場面お茶子さんには見せられないな。

恥ずかしくて。

「どーしてもって言うなら交換してやっても良いぞー！」

「どーしてもー！」

そう言うと、母さんは耐え切れず、遂に吹き出した。

それに伴いかつちゃん、僕の順に笑いが広がる。

こんな幼少期も有り得たのだ、と溢れる涙を拭いながら思う。

コレは笑い過ぎて出てきたものだ。

僕は自分自身にそう言い訳をした。

## 4. Talking about… (話すことは…)

「じゃーな、いづく。また遊ぼーな！おばさん、お邪魔しましたー！」

玄関で母さんと二人かつちゃんを見送り閉まった扉に鍵をかける。

「それじゃ、先お風呂はいっちゃいなさい。」

はーい、と気負いなく返事を返す。

着替えを用意して風呂へと向かった。

—————

「ふう…。」

身体を洗い、湯船に身体を沈めるに依じて肺から空気が押し出される。

夢や幻でないかと断言は出来ない。

しかし、これが現実だとして…。

「またやり直せる。失った人々を救うことが出来る。」

水面に映る自分の顔。

その先に映るトレーニングとはまだ無縁の矮躯。

文字通りの幼児体型。

腕に目を向けてもかつてよりも三回り、いや四回りは細い腕に小さな拳。

「体作りが急務…と言っても成長が必要だから、あまり激しくはやれないか…」

上げていた拳を再度湯船に浸け、拳を解く。

そのまま両手で腕を作り、顔に湯をブチまけた。

「ふう。これから行うべき行動に順位付けしよう」

頭で考えていることを口にするのは僕の生来からの悪癖だ。

例え誰に注意されどもその悪癖は抑止もままならない。

「第一前提、敵連合の組織阻止。方法としてはオールマイトによるオール・フォー・ワンの打倒完遂及びオールマイトの重傷回避。そのためには、早い所オールマイトとの接触が急務。接触ルートの有効候補はグラントリノ。連絡先及び住所を僕が知っていて且つオールマイトへの説明の信憑性ある証人として利用可能。第二前提、自己の研鑽。雄英入学前約10ヶ月間という短期間で成したあのトレーニングを自己の体型に合わせるアレンジ。目標はオール・フォー・ワンとオールマイトが接触する10歳までにかつてと同様80%フルカウルを無理なく使用出来る程度を目指す。そもそも、現状の使用可能許容量がいくつか把握出来ないから、現状の完全掌握を最優先とする。第三前提、お茶子さんの再会。これはまだ四歳児という親の保護下から抜けられない現状であるため協力が絶対に必要。協力を得る最短ルートは…」ブツブツ…

気付けば既に十分。

湯船に浸かりすぎ、且つ考えるために頭を回転させていたためオーバーヒートを起こしかけていた。

よもや、頭から煙どころか火を噴いてしまう恐れもあつたかもしれない…。

しかし、おかげで考えも纏まつた。

「お茶子さんとの再会、現況完全掌握、オールマイトとの接触、自己の研鑽の順とする。」

そのためには…

「協力者を得なければならぬ、ね。」

ザバン、と湯船で波打つ。

その勢いそのまま個室を後にした。

—————

「母さん。今少し良いかな?」

「どうしたの? 改まって」

ソファに座つてニュース番組を見ていた母さん。

きつと僕の湯上がりを待っていただろう。

おもむろにリモコンを手にとると個性的な角のキャスターが占める画面がブラック

アウトした。

「ありがとう、母さん。」

「真剣な顔ですもの。話半分になんて出来ないわ」

身体ごとこちらを向いて話を聞く姿勢、スタンバイ、OK.

「今日僕に聞いたよね? 『お母さんじゃなく母さん』って。理由があるんだ。」

母さんは僕の目を見て話を聞くもその内容でなく、原因に心当たりがなくて、目線が左上へと向いていた。

「そうよね、たしかに昨日まで『お母さん』って呼んでたのに、今日は朝から『母さん』って…」

疑問をぶつけたのに的を射た回答ではなかったために内心疑問が燻っていた様子。

それはそうだ。

人間、好奇心が突き動かす衝動には耐え難いものだ。

「実は、僕ね。未来から帰ってきた僕なんだ」

そのとんでもない告白にはいくら大らかな母さんでも取り乱し、混乱のあまり何もかもがフリーズした。

鳩が豆鉄砲を食ったよう、とはまさに母さんのこの表情を言うのだろう。

数十秒に渡るフリーズの後、母さんはコテンと首を落とすように傾げた。

「出久…熱でもあるの…?」

その線の方がまだ信じやすいけど、かわいそうな目で見るのはやめて。

確かに未来から帰ってきました、なんて言われりや頭のネジやヒューズが飛んだとか思えない。

「変な心配させてごめんね。でも、事実なんだ。僕もまだ現状を把握しきれてないんだけど。」

朝の問答を例に挙げた。

今年が何年か。

「僕の意識では2X39年なんだ。目が覚めたら、昔住んでいた部屋だと気付いてビツクリしたよ」

一番ビツクリしたのは、2度と会えないはずの母に会えたことだが、それは曖昧な笑みの裡に隠す。

自分が死んだであろうことも含め、伝えるわけにはいかない。

「電話した相手は僕のお嫁さん、母さんも初めて紹介した時は三人でテンパってたのをよく覚えてるなあ…」

雄英高校が全寮制になって程なくしてからお茶子さんが口を滑らせたことから、僕もテンパり互いに告白し合うという意味わからない状況に陥つたのを覚えている。

両思いであると知って舞い上がり、何を口走ったかなんてまるで覚えていないが、とにかく「僕も好きだ、付き合ってください」と要約出来る内容を伝えたことだけは確かだ。

寮の共用スペースでブチまけたものだから、クラスメイト全員を巻き込んで大騒ぎになったんだよね。

かつちゃんにも「女から告白させるとかダセエことしてんな、クソがつ！」って言われたっけ？

その翌日には週末という事も相まって、外出届を出し、母さんに二人で報告しに行ったのだ。

今思えば順序も計画性も破茶滅茶で、あの頃は若かったと頬が綻ぶ。

母さんに未来の出久であることとなぜか戻ってきたことを順を追って説明するも相槌のほか、何の反応も見せないものだからつい捲し立ててしまった。

「勢いに任せて、捲し立ててごめんささい。こんな事、いきなり言われても飲み込めないかもしれない。けど、荒唐無稽な話したのはお願いしたいことがあるからなんだ」

ソファに腰掛ける母さんのとなりに腰を下ろし、目線を合わせて「お願い」を伝える。

「この時代にお茶子さんも帰ってきてるんだ。だから、どうしても会いに行きたい。」

子供の座高ゆえ見上げる形にはなったが、誠心誠意お願いする。

どんな回答をされても食い下がる心算で視線に力を込めて、唇を引き結んだ。  
「…ねえ、出久。」

瞬きすら忘れていた母さんが再起動。

そのまま、口から零すように僕の名前を呼んだ。

ん？と小さく返事を返せば母さんは続けて、口から言葉をポツリポツリと零した。

「私は出久にとつて良い母親で居られたかしら…？」

その言葉に思わず、答えを失う。

どういう意味なのだろうか？

「当たり前じゃないか。僕にとつては最高で自慢の母親だったよ。」

薄っすらと笑みを浮かべてそう返す。

「…そっか…よし。」

持ったままだったリモコンをリビングテーブルに置き、中腰になってこちらに視線を合わせた。

「私は信じるよ、出久。可愛い息子ですもの。少し先の未来から帰ってきたって私の息子には変わりないわ。」

大好きだった懐かしい笑みを浮かべる母さんが眩しく見え、思わず目を細めてしま  
う。



「話に一貫性があったし、難しい言葉もちやんと意味を理解しながら使ってるし。教えてないはずの言葉だって知ってるしね。」

毛の流れに沿うように数度僕の髪を撫で付けてから、母さんは立ち上がる。

「大人だったら一人で行けるかもしれないけど、見てくれはまだ子供ですもの。私が連れて行ってあげるわね？」

そう言いながら浮かべた笑みはいつもの包み込むような微笑みではなく、歯を見せながら笑う、まるでオールマイトのような頼りになる笑みだった。

## 5. Check my status (能力確認)

母さんの協力を取り付けられた翌日。

日の出と共に目を覚ました僕は、7時半までに帰る、と書き置きをした後家を出た。

「ココは片付ける前のまんまだなー…。」

都立多古場海浜公園。

その波打ち際。

海流の影響で海からゴミが打ち上げられ、それらが堆積している。

更に輪をかけて、ゴミを増やしているのは不法投棄。

元々ゴミだらけなんだから少しくらい増えたって良いよね、と大衆の心の内の何処かで囁く――所謂『割れ窓理論』のモデルケースだ。

当時中学三年。

オールマイイトからの課題により、この海浜公園の清掃を行った。

小さなものは割れたビン。

大きくなれば家電製品や果ては軽自動車まで捨てられていた。

現状をざっと見回しても、ボロボロのトラックタイヤが数本転がっているのが見え

た。

自己研鑽に励む一環として、ここの片付けも並行して行おう。

以前は十ヶ月と言う縛りがあったが、今度は年単位で時間が取れる。

成長に合わせて行うこととする。

「さて。周りを見ても早朝と言うこともあり、誰もいないし…現状の確認をしよう」

お茶子さんは個性の成長は変わってない、と言っていた。

操作に関してはそうなのかもしれない。

受け継いだ当初は全身に0か100しか出来なかったが、昨日試した時は右人差し指のみを強化することが出来た。

ただ許容上限に関してはどうなのだろうか？

出来ることと出来ないことの線引きの為に来た。

「フルカウル」

全身常時強化を起動。

1%で全身を強化し、親指で押さえ付け、引き絞った人差し指を弾き出す。

技として2番目に習得した”デラウエアスマッシュ”

まだ強化が低いからか特に反動はない。

今回の検証方法としてフルカウルで全身に纏い、デラウエアスマッシュで問題がない

かを確認する。

フルカウルの上限では纏うだけで全身に負担が掛かり、デラウエアスマツシユは最悪の腱が切れ、内出血を起こすだろう。

そのギリギリを見極める為に1%ずつ強化度合いを上げて行く。痛みが走れば、その場で終了。

…なのだが。

「SMASHッ!!」

海面が左右に割れ、白波が飛沫を立たせる。

渦巻く風が水平線を目指して直進し、遙か彼方の雲に風穴を開けた。

「…100」

僕は唾然としていた。

今の僕は何の鍛錬もしていない子供の体のはずだ。

死柄木との戦闘直前に確認した上限はフルカウル80%だ。

瞬間的には100%も扱えるようにはなっていたが、それでも痺れや突き指の覚悟を持って扱っていたのだ。

それが幼いはずの今の自分はいとも容易く上回る結果となっていた。  
フルカウルによる痛みはない。

デラウェアスマッシュでの骨折も起きていない。

ならばと今度は拳を握った。

「テキサスSMASHッ!!」

小さな拳が空気の壁を叩き壊す音が聞こえた。

その快音は衝撃波を伴って水上を突き進み、水平線の向こう側へと消えていった。

ゾクリ、と僕の身体震える。

オールマイトの後継者として選ばれて以来この領域に至るべくずっと鍛えてきたのだ。

『筋肉が増せばそれだけ扱える領域が増える』とオールマイトは言っていたが、筋肉が無い状態の今の僕が100%を扱えた。

「…今までよりも使えてる…これならば、もっと助けることができる…もしかしたら、鍛えれば更に出力が上がるんじゃないか…ならば、筋トレは当然として、身体の扱いが下手と言う僕の弱点の克服のために何か訓練すべきだな…リズム感の形成にダンス、可動域拡張の為にヨガ、それに我流の戦闘術よりも何かを習うべきか…? 時間はある、取捨選択の幅は広い…以前の弱点克服と幼少期ならではのバランス感覚や戦闘勘などのセ

ンスの形成：幼い頃、鈍臭く運動が苦手だった僕はそれをひっくり返すチャンスを得たんだ：下地の発育は急務だ：戦闘勘はグラントリノに稽古つけてもらえないかな：オールマイトとの接触を含めて一石二鳥だ：」

ブツブツと口に出して頭の中を整理する。

誰にも見られていないのだし、気にせずブツブツ続け、自らの成長に必要な要素を列挙する。

「筋トレやヨガによる身体作り、ダンスによるリズム感育成と体幹形成、我流でなくキチンとしたセオリーを習い移動術や捕縛術の習得、力を正しく振るう為に拳法などの技術鍛錬：幸いワン・フォー・オールの運用技術に問題はない。けれどただの力押しでは過剰な攻撃で相手を殺してしまう可能性だって大いにあるんだ。その可能性の排除の為にそう言った適切な力の振るい方を学ぶ必要がある。」

打ち寄せる波に目を向けながら自らの課題を口にする。

「まだ時間はある。ヴィラン連合が組織される前にオールマイトに協力して決着を着けるんだ：」

海上にその全貌を露わにした太陽を翳した手の隙間から覗き見ながら、最終目標を口にした。

—————

一通り確認を終えた僕は手ぶらで帰路を駆ける。

フルカウルでの移動は試していなかったもので、試験も兼ねて100%で路地裏などの悪路を走る。

踏み込みで足元を壊さないように走り、壁や柱を足場に立体的に駆け、商店街の路地裏から壁蹴りの要領で上に上がり、そのまま屋上を飛び跳ねながら家を目指した。

「パルクールの技術指導してくれる人って誰かいたかな……」

基礎訓練だけでも構わないから、我流移動術の穴埋めをしたい。

家の近くまで来て見覚えのある一軒家の屋根から飛び上がり、マンションの三階へ向け、飛び出す。

そのまま、欄干を掴んで強化した臂力で引き上げ、自宅の前の廊下に着地した。

「出来ていたことはそのまま出来る……と言うことでいいんだろうか……? それにしても全力疾走で帰ってきたのに息が上がるどころかじんわり汗をかく程度しか変わりがないや。強化なしだとの程度の運動能力なんだろう?」

そんな疑問を口にしながら、右手でポケットを漁って家の鍵を取り出す。

左手首に付けた子供用の腕時計(オールマイト仕様)の時間を確認する。

7時25分。書き置きに書いた五分前だ。

「ただいまー」

遠くからお帰り、と声が聞こえた。

焼ける魚の匂いがする。

シャワー浴びるね、と靴を脱ぎながら母さんに伝え、自室の扉を開いた。

着替えを用意して風呂場に直行。

数分で潮風を浴びてベタベタになった体を汗と一緒に洗い流す。

風呂から出て、髪を乾かしながらリビングに向かうと食卓には既に料理が並んでいた。

「手伝わなくてごめんね、母さん。今の自分にできることの確認をしてきたんだ」

席に着きながらそう言い、母が差し出す茶碗を受け取る。

「いただきます」

シヤケの塩焼きに手を付けると母さんから疑問が投げかけられた。

「自分の【個性】のこと？未来ではヒーローになってたつて言つてたけど、どんな【個性】なの？」

「二応、突然変異型（ミューテーション）らしいんだけど、オールマイトみたいな超パワーだよ」

継承云々は言うわけにはいかないから、言い訳は嘘で誤魔化す。

その後、僕は茶碗を置いてデモンストレーションを見せる。



パリツと緑光が迸り、隣のダイニングチェアを親指と人差し指の二本だけでつまみ上げた。

本来子供の力で持ち上げるのが難しいだろう重さの椅子を持ち上げてみせた。

デモンストレーションの結果、母さんは目を開いたまま固まり、箸に乗っていたご飯がテーブルに転げ落とした。

「母さんや父さんみたいな【個性】だと思って物を引き寄せようとしたり、火を吹いたりする練習をしてたんだよね。確か、無個性だつて言われた後だから今時期か。懐かしいな」

ゆっくりつまみ上げた椅子を下ろし、僕は食事を続ける。

母さんが思考停止から戻る頃には僕の前には空の食器しかなかった。

それらをつつにまとめ流しに持っていく。

しかし、流しに入れようにも手が届かなかった。

幼く低い身長が恨めしい。

## 6. Hang up after you (君の後に切る電話)

『おはよーデクくん。昨日電話くれるかと思って電話の前で待つてたんだよ?』

食後お茶子さんに電話をすると僅か2コールで繋がった。

後で、と言ったのに連絡しなかったのは僕の落ち度だ。

素直に忘れてしまったことを謝るほかない。

「お茶子さんごめんなさい。かつちゃんに会ったり、母さんに現況伝えたりして忘れてしまいました。」

『せめて顔を見て謝ってほしいなー』

電話越しでも分かる不機嫌な声音。

ツンツンとした刺々しい言い草。

きつと丸く大きな目は半分ほどに細められているだろう。

「そうだね、会いに行ったら直接謝るね。」

『つて、爆豪くん? あ、昔に戻つてるから生きてるはずだね。懐かしいなー。それにお義母さんに話したん? 全部?』

「未来から戻ってきた事だけだよ。【個性】のことは……まあ、言える範囲だけ。あとは、な  
んで戻ってきたかとか未来では誰が何してるとかは話してないよ」

『そーやね。それが賢明かも。』

「母さんに未来の奥さんもこっちに戻ってきてるから会いに行きたいってお願いしたん  
だ。その為に話さざるを得なかったんだよね」

どうしてその選択に至ったか説明すれば、理解してくれる。

理解したなら、その考えを支持してくれるんだ。

そして、出来るだけの事をして支えてくれる。

初めて会った時と変わらない。

お茶子さんの特に良いところだ。

『それなら私も父ちゃんとお母ちゃんに説明しておいたほうがいい?』

「出来れば一緒に説明したいって言うのは、僕のワガママかな」

『んー? どうして?』

その心は、結婚する際に麗日家に挨拶しに行った時、あまりの緊張でガチガチになっ  
て醜態を晒した。

そのリベンジを果たしたいのだ。

『なるほどね。ええよ? 今度はカッコいいデクくん見せてね!』

受話器から聞こえる彼女の声が僕の鼓膜を揺らす度に僕は少しずつ天に召さ  
れると思う。

「お茶子さん。」

『なーに?』

「可愛すぎて反則です」

『か、かわつ?!』

電話口であたふたする様子が聞こえてくる。

きつと頬を真っ赤にしているに違いない。

「出来るだけ早くそっちに行くから。日程決まり次第また連絡するね」

『むー…(イキナリ可愛いとか反則はそっちやん…。)]』

少し遠くからボソボソと何か言うのが聞こえたが、内容までは聞き取れなかつた。

僕の言葉に反応がなかったの、何度か「もしもし?」と呼び掛ければすぐに

『あ、ゴメンね。聞こえてたよ。連絡、待ってるね』

「うん、お茶子さんも何かあつたら連絡ちょうだい」

『うん!』

声音から僕の好きな麗かな微笑みを浮かべているだろう事は察しがついた。

僕もその声に感化され、自分でも分かるほどの笑みを浮かべた。

『大好き』

「大好きだ。またね」

相手が着るのを待つてから僕は受話器を下ろした。

通話を終えて振り返れば、廊下とリビングを隔てる扉から母さんが覗いていた。

「…いい、出久がオトナな表情をして女の子にラブコール…」

「ラブコールつてもうあんまり聞かないね…。一応、精神的には大人だし、未来の奥さんだよ？愛を囁くくらいするでしょう？」

出久が!? 大人になった!? っで大声で叫びながら大号泣を始める母さん。

…しまった。子供の成長を一足飛びにってしまったから、母親の感性の成長に追いついてない。

ケアを怠ったなあ…と右手を後頭部に回し、指先で数度掻く。

そりゃあ、数日前まで母親にベツタリな甘えん坊だったはずなのに急に凛々しく他の女の子に愛を囁いているのだ。

こんな反応も頷ける。

ましてや、僕については殊更にオーバーな母さんなのだから、こうなつて当然だったのに考えが至らなかつたな。

どうすべきかと、考えを巡らせているうちに母さんが泣き止み立ち上がる。

「そうよね、愛する奥さんに会いに行くんだもの。出来る限り早く会いに行くべきね。出久、先方に連絡なさい。お父様とお母様が揃ってご在宅なのはいつか確認してアポを取るのよ。」

大泣きしながら決心が決まったのだろう。

いつも見せる大らかで少し内向的な性分は鳴りを潜めていた。

その目には決意の炎がメラメラ燃えており、曰く「お母さん、頑張っちゃおう」  
親子歴22年だったが、その様は初めて見る。

息子の僕をして、「お、おう…」としか反応できなかったのは致し方あるまい。

『もしもし、デクくん?』

「あー、お茶子さん。お義父さんとお義母さんっていつスケジュール空いてる?」

『えっと、父ちゃんは休みないからお昼の時間で会えると思うよ?母ちゃんも事務で一緒だから家にいるはずやし。どうかしたの?』

「えっと会いに行くのにアポを取りたいんだけど、時間作ってもらえないかな?」

母さんが燃えちゃって、と言う言葉をすんでのところで飲み込んだ。

『そうしたら、聞いてく。家に来てもらうより会社に来てもらうと思うから、来客のアポ  
イントで取っとく』

「ありがとう。こっちは母さんが張り切ってもう荷造り始めてるんだ…」

『最短だと明後日とかに会えるかな、デクくん…』

「そうかもね。待ちきれないよ、お茶子さん」

『私も待ちきれへんよ、デクくん…』

淀みなく続いた会話がプツリと途切れた。

お互い予期せぬ沈黙。

されど悪い心地はしない。

数秒の間を僕は惜しみながら破った。

「それじゃ、よろしくね。今度はそつちから連絡ちようだい」

『うん。分かった。バイバイデクくん。』

「じゃあね、お茶子さん」

そうしてまた切るのを待つ。

待つ

待つ

切られない？

『もしもし？デクくん？』

また受話器からお茶子さんの声が聞こえた。

「どうしたの？」

『なんでデクくんいつも自分から切らないん？』

「こうやって何かあった時にすぐに話を続けられるようにするためだよ」

『そう言うコトはつきり言えるのホンマずるい…』

うう…と喉の奥から捻り出すような唸り声が聞こえ、思わず僕は苦笑した。

「ハハ…それじゃ、僕から切るね。またね？」

『うん。またね』

会話が途切れたところで受話器を置いた。

先に切るのは新鮮だ。

いつも僕は後から切るようにしてたからだ。

あんな風に言われたつてことは何か煩わしかったのかな…？

「出久…紳士的な振る舞いなね…」

振り返れば荷造りを始めていたはずの母さんが先ほどと全く同じ姿勢で扉から覗き



見ていた。

「母さん、そんな覗くみたいじゃなく堂々と見てくれていいよ?」

そんな陰から涙を流しながら覗かれてるとストーカーや幽霊の類と勘違いして驚くから本当にやめて欲しい。

あとその涙はどう言う意味の涙なの?

子供の成長?それとも整理しきれない親心?

僕は続けて苦笑いした。

—————

それから数時間後、昼食を摂った後にけたたましい呼出音が鳴る。

表示された番号は先ほど電話した時と同じだった。

「はい、緑谷です」

『デクくん、こんにちは。』

相手はお茶子さん。

話の内容は先ほどの回答だろうけれど、テンプレートだが、一応問い掛ける。

「お茶子さん、こんにちは。どうかした?」

『さっきのアポの件なんやけど、明後日時間作ってもらったから、十三時くらいに会社ま

で来て』

「うん、分かった。わざわざありがとう。」

会社の住所は分かるよね？と問われるも、以前に何度も伺ってるから問題はない。

「それじゃあ、明後日十三時に麗日建設ね」

『来るの楽しみにしとるよ！』

「僕も会えるの楽しみだよ。それじゃあね」

そう言つて今回も先に切つた。

—————

Side : Ochako Uraraka

「じゃあね」

そう言つて二秒ほどで切断を示す音が鳴る。

さつきなんで後から切るのか確認したから先に切つてくれたのだろう。

私も受話器を置いて自室へと戻つた。

「デクくん来るのは明後日か……楽しみだなあ」

そう言いながら私は、思わずニヤける口角を押さえつけるように両頬を両手で挟み込んだ。

# 7. How to reach the best (最高に至る筋書き)

「出久。最終確認よ」

予定を決めた日から2日。

約束した9月5日。

張り切る母さんを前に僕はポストンバッグの口を開く。

「2日分の着替え!」

「小分けにして袋詰め」

「アメニティセット!」

「オールインワンのセットが二人分」

「歯ブラシ!」

「アメニティセットと一緒。僕はこれで十分だよ、母さん?」

2日前から連れて行くことを決めてすぐさま用意して、昨日の寝る前も確認していたのに、起きてからもまた確認しているとはさすが母さん。心配性ここに極まれり、と言ったところか。

「長い時間電車と新幹線に乗るけど、大丈夫？暇にならない？」

「こんな見た目だけど、中身は大人だよ？そんなに気にしなくても大丈夫だって」

昨日のうちに買ったノートと鉛筆をリュックの中に入れて出かける準備は万端だ。

ハンカチとポケットティッシュも入れてある。

「途中でお菓子買う？」

「要らないよ。もう出ないと新幹線の時間に間に合わなくなっちゃうし、早く行こう？」

土壇場でワタワタ慌てるのは僕ら親子の悪い癖だ。

その様をみてやっぱり親子だなあと思う。

ボストンバッグを今度は母さん自身で確認してからその口を閉じた。

その直後、自らが部屋着から着替えていないのを忘れていたため、大慌てで着替え出す母さん。

その様を、横目に僕は部屋を出て、水回り・ガスの元栓・戸締りを確認した。

「母さん、戸締り確認出来たよ。もう出れる？」

部屋に入らずに声をかければ、あとちよつとー！と言う声が扉越し聞こえたので、僕はそのまま玄関へと足を向けた。

「ふう。やっと座れたね」

予定していた新幹線に乗り込み、持っていたポストンバッグを母さんに預け、飛び乗る様に席に着く。

「バッグ、重かったでしょ？私に任せてくれてよかったのに」

「このくらいなら問題ないよ。いい筋トレだと思えば、へっちゃらだよ」

そう言つて母さんに顔を向けると、「久さんそつくりになつてるう…」と口を押さえながら涙を流し始めた。

涙腺弱いのは知つてるけど、一昨日から感涙しすぎじゃないかな…。

「名古屋乗り換えだから大体一時間半くらいかしら？」

「そうだね、そこから近鉄に乗り換えて一時間半くらいだから、十二時には最寄りにつけると思う。だから、電車の中でお昼取つておいた方が合理的だと思うんだ」

そう言つていると体全体に軽やかな衝撃を感じる。

僕らに乗せた車両は西へ向けて滑る様に走り出した。

窓の外へ目を向ければ後ろに景色が早まりながら流れていく。

スマホを取り出した母さんに目を向けると凄い勢いで何かを打ち込んでいた。

横目で確認すれば、「ウチの息子が立派になって…」と言う報告を父さんに送ろうとしていたところだった。

母さんの親バカだつて疑われちゃうから、ほどほどにお願いね、と音にせず独り言ち

た。

リュックからノートと鉛筆を取り出す僕。

前の座席のテーブルを取り出そうとして漸く気付いた。

しまった、高さが足りない…。

座席テーブルを使って書くのを諦め、開いたノートを表紙同士を重ねて持つことで書いてる途中で曲がったりしないように書くことにした。

小さい体って実は凄く面倒なんだなあ…。

僕は過去に思いもなかった苦勞と未来の同級生の苦勞を偲んで涙を一滴零した。

峰田くん…頑張れ…。

僕はノートに今後の予定、トレーニングメニュー等をつらつらと書き連ねて行く。

母さんがその様を見ながら呆然としていたことに気付かずに新幹線は走る。

—————

お茶子さんの実家の最寄りに到着。

時刻は十二時丁度。

約束の時間にはやや早いが見るものもあまり無いので、やや小腹も空いてきたのもあって、駅近くのファーストフード店に入ることにした。

「半ごろにタクシーに乗れば十分前には現着出来ると思う」

「ホント、大人な出久は頼もしいわね…」

母さんのリアクションは、この三日間でもう驚きよりも呆れの割合が大きくなっている様に感じる。

見た目が幼いが故に、未だに感覚が追いつかないのだろうかなあ…。

「ねえ、出久。これから行く麗日さんのお宅って建設会社なのよね？会社でお会いするって聞いているけど、行ったことあるの？」

「うん、全部で4回かな？学生時代にお付き合いの報告と夏の帰省、卒業前に結婚する旨を伝えて、それから…」

母さんの葬式の後に一週間お世話になったんだ。

首だけが収まった棺桶を見つめる僕をお義父さんは肩を掴んで無言で慰めてくれたんだっただな。

頭に当時の状況が過ぎるも、表情を微塵も変えない。

昔、オールマイトに教わった。

笑顔の仮面で本心を隠せ、と。

「仕事が安定してから一週間くらい遊びに行つたんだよね。資材置場も兼ねてるから敷地が広くて、訓練にはもってこいだっただんだよね」

懐かしいなあ、と眩きあたかも当時の様子を思い出しているように演じる。

考えるな。

考えるな。

今は母さんも居るんだから、何も悲しいことは無い。

だから、考えるな。

「ねえ、出久。」

ふと、穏やかでありながら緊張を孕んだ声が掛かる。

「何か…あつたの？」

その瞬間、僕の表情筋が文字通り凍り付いたと思う。

しかし、何とか不自然になる前に立て直せたので、「何でもないよ？」と誤魔化した。

「そう、それならいいわ」

そう言いつつ、母さんは笑顔を見せる。

が、それは取り繕いきれていない心配を滲ませた笑みだった。

「細かい話はまた今度話すよ。久し振りに来たし、ナゲットとオレンジジュースが飲みたいな」

あからさまな話題のすり替えだが、母さんも話題を流してくれたので、危機は脱した。未来に起こる不幸は未然に防ぐ…。



僕らの知り得る不幸は必ず…。

大元を辿れば今より五年後のオールマイトとオール・フォー・ワンの衝突。

そこで悪の帝王を仕留めきれなかったのが、その後が続く不幸の始まりだった。

死柄木…志村軋弧の墮落、ヴィラン連合の結成、雄英高校の失墜、多くのヒーローの殉職、友人たちの死…。

僕らプロヒーローは後手に回りながらも最善を尽くし、それらの不幸に立ち向かった。

ヴィラン連合の最初の事件から関わり、教師オールマイトの一期生となった僕ら154期ヒーロー科はプロヒーローになってすぐに世間から『次代の「象徴」』と称された。

そして、ヴィラン連合との抗争が激化し、約半数の友人たちがその命を落とした。

そんな未来は認められない。

いくら、死柄木を、連合の首魁を倒し平和を齎したとしても、欠けたピースが埋まることはない。

僕らが過ごした世界は最善ではあったが、最高ではなかった…。

「…コレはチャンスだ…最高を目指すチャンス…」

隣でコーヒーを啜る母さんに聞こえないよう、口の中で言葉を噛み砕く。

雰囲気は努めて明るく、まるで心配などないように。

ディップしたナゲツトを口に放り込んでから、母さんに向くといつもの穏やかな笑みがあつた。

先ほどの心配と緊張は拭えたようだ。

話の流れとはいえ、危なかつた。

まだ現実になつていない不幸を口にして心労をかけるつもりは毛頭ない。

コレは僕と僕の彼女が最善の未来を最高の未来にするためのやり直しなのだから。

その覚悟をジュースと一緒に飲みくだし、蓋を開けて氷も纏めて嘔み碎いた。

## 8. The end of heroine (彼女の最期)

Side : Ochako Uraraka

ヴィラン連合との決戦。

それは私とデクくんで死柄杓を抑え、その間に黒霧を捕らえる作戦であった。

付随する作戦として、私とセメントス先生でコンクリート塊の投下による新造脳無のチャンパー同時破壊を先行して行い、黒霧の取れる択を削る。

その後の捕物は黒霧に対する波状同時攻撃による人海戦術を予定していた。

神野の悪夢の時にオールマイトたちが取った作戦と奇しくもほとんど同じで、「ワーブ」という個性の対策法としてこれ以上ない対処法であった。

しかし、その手法は八年前の作戦で既に手の内が割れている。

ヴィラン連合の対策としては単純。

脳無が足りなきや増やせばいいじゃない。

一つで足りなきや増やせば良いじゃない。  
と。

神野区の時は一箇所だったためにそんな単純な策が思いつかなかつた、と作戦を立て指揮していたヒーロー：センチピーダーが無線越しに吠えていたのを聞こえた。

私の役割はコンクリート塊の指定ポイントへの投下だけだったので、その結果については死柄木の真ん前で聞く羽目になる。

「全ヒーローに告ぐ。狼狽えるな。黒霧を抑えれば、被害を極小まで抑えられる。脳無が出た場合のプランに切り替える。好き放題させるな、僕らが来たことを教えてやれ  
!!」

死柄木を睨みつけながら、オープンチャンネルで大声を張り上げるデクくん。

”勝ちたいてって気持ちが強くなると言葉遣いが荒くなる”

爆豪くんのお葬式で寝顔の彼に言っていた。

一生言えないと思つてたって言葉を添えて。

”勝ち”のイメージ。

”勝利の権化”

ヒーロー爆心地は粗暴で粗野な口ぶりが目立つもその鮮烈な闘いぶりて人気を博し

た。

その彼が後押しするかの様に、死柄木と言葉を交わすデクくんの語調は荒れて行く。私もサポートとして戦いながらその言葉に奮い立たされて、いつも以上の動きが出来ていたと思っている。

その均衡が破れたのは、デクくと死柄木の最初の衝突から凡そ三時間ほどしてから。

誰かから無線に黒霧を見失ったとの報告が入る。

脳無が暴れた隙に相澤先生の：イレイザーヘッドの抹消を逃れた、と。

そこからは早かった。

数秒前まで飛び跳ねながら瓦礫を無重力にして吹き飛ばし解除して、を繰り返していた私に突如何かに触れる：生暖かく不気味な感触を。

感じた時には全てが遅かった。

まず、視界が傾いていくのを感じた。

右足で踏み込んでバランスを取ろうとするも一向に改善出来ない。

慌てて受け身を取ろうと両手を出すも左手が肘から下がなかった。

パツと後ろを振り向けば、黒い靄から覗く病的な青白さの両手が見覚えのある足と手を左右の手に持っていた。

(…やられた…?!?)

死柄木の崩壊によつて瓦礫だらけの街に変貌して、真面に足場と呼べる箇所がなくなつていたのが災いした。

右の太腿から下が無くなつたがために受け身が取れず、瓦礫の山を疾走の勢いそのままに転げ落ちた。

右手だけで抑えきれず顔面を打ち付け、バイザーが粉々に砕けた。

打ち付けた際に頭も切つたようで心臓の鼓動のたびに全身あちこちから血が出てることを薄つすらと知覚した。

狭まる視界を無理に巡らせると、驚いたことに女の子がいた。

怪我は擦り傷程度で大したことがなくて本当に良かった。

崩壊と超パワールと言ふ二人の個性の組み合わせ上、周りに甚大な被害が出ることは予想出来ていたため、全ての住人を予め避難させたはずだった。

「……ちら、ウラビディ。」会場”にて…要救助者一名を…発見。…至急、保護願います  
…」

無線越しに誰かが誰かに指示を出している。

その無線の中で一番大きな声が響く。

『ウラビディ、自分の負傷の報告は!?大丈夫か!?』

デクくんだ。

物凄い風切り音が無線越しに聞こえる。

彼は駆けながら、居なくなった私を心配したのだろう。

『こちら、ドミナント。黒霧をこちらで捕らえた。イレイザーによって抹消されているので、逃亡の恐れなし。【個性拘束薬】を注入。無力化完了』

ドミナント…心操くん…。

遅いねん、と私は心の中で毒づく。

そもそも、なんでこんなに時間掛かってん。

死柄木と交戦始めてからもう結構経つとるんよ？

脳無を無力化するのにそんなに手間取ってたんやろか…。

「こちら、ウラビディ…。左上腕…右大腿部を喪失…それと頭部出血…。程度は…不明。現在、身動き取れません…」

無線の向こうで誰かが誰かに何かを伝えてると言うことは分かっても、誰が誰に何を

言っているのか理解出来ない。

ガヤガヤとした雑音にしか聞こえない。

少しの間意識が飛んでいたようだ。

遠くにいたはずの女の子が私に縋り付いて泣いていた。

決して声を出さないように片手で口を押さえながら。

されどその嗚咽は殺しきれず、小さくしゃくりを上げていた。

「アクううううう!!」

突如少女が叫ぶ。

次の瞬間には暖かな手の感触が背中から消えていた。

首を動かす余力もない。

倒れた時のまま右を向いてうつ伏せる。

視界の端に見覚えのある緑の服が映った気がした。

先程の少女が言っていたように彼が来てくれたのか。

「遅くなってごめんね…お茶子さん…」

やはり来てくれていた。



私の心は喜びでいっぱいになり、痛みがどこかへと飛んでいくのを感じた。

「あー…デクくん…。おつかれさまあ…」

しかし、血を流しすぎたのだろう。

普通に受け応えしようにも、どうにも間延びして、途切れ途切れになってしまう。気絶して休んで落ち着いたからか、頭が少し回り始める。

私の救援要請を聞いて、飯田くんがエリちゃんを連れて走っているようだ。

…正直に言えばデクくんはともかく私は無理っぽい…。

そう考えていたら、デクくんがヤバめの吐血をした。

呼吸器系と消化器官のいくつかをまとめてダメにされてるみたい。

「お互い…間に合いそうに…ないねえ…」

「そー…だねえ…」

その後私たちは、二人分の血溜まりに溺れた…。

…はずでした。

—————

まだ真つ暗だったのに目が覚めた。

今のが夢だった？

いや、それにしても随分と鮮明な夢を見たものだ。

体を起こし、ベッドの脇のチェストに手を伸ばす。

いつもそこに携帯電話を充電クレイドルに入れておいているのだ。

寝惚け眼を擦りながら、手探りで取ろうとするも：違和感を感じた。

手に触れる感触は畳。

うちはベッドのはずだからまだ空を搔いてる高さのはずなのに、確かな硬さを伝えてくる。

慌てて体を起こしてみれば、仕事による生傷の痛みなどまるでない。

手を翳せば、両手がセットで付いており、見慣れた肉球も十本一セットで付いていた。

ホツとするのも束の間、先ほどを上回る強烈な違和感。

吹き出る冷や汗を無視して、明かりを付けようと布団から出ようとす。

立ち上がり、その第一歩が引つかかり、：強烈に隣に眠る人を蹴りつけた。

「ぐぼおっ!？」

何かに引つ掛けた、と咄嗟に両の手のひらを指先で触れ、壁に足から着地した。

「い、ゴメンねー!」

「…な、何すんねん…お茶子お…」

「ゴメンね、デクく…ん？今の声…父ちゃん…？」

今度は引つ掛けないように、ゆっくりと移動し、明かりをつける。

「……実家やん…？」

「凄い声が聞こえてきたけど、何してんの？」

襖の開く音に振り返ればエプロンをつけた母。

その見た目は幼い頃のままのよう…。

そこでようやく自分の異常が何なのか気付いた。

「…コレ、タイムリープってやつとちやう…？」

—————

「それで、カレンダーやら自分の個性のこととか色々確認してるうちにデクくんから連絡来たんよね」

時は流れ、麗日建設会議室。

僕と母さんは一足先にお茶子さんと再会出来た。

お義父さんが打ち合わせの関係で十五分ほど遅れるとのこと。

お互いにもう既に慣れたが、出会ってすぐはお互いに三分ほど固まってたと思う。

僕も彼女も上から下まで舐めるように視線を動かす。

だって、あんな可愛い子見たことないよ？その服装も精一杯背伸びしたオシャレをしているように見え、輪をかけて可愛く見える。それに加速度的に染め上がるその頬の丸みもまた可愛らしい。

たっぷり時間を溜めたのちに、僕らは奇遇にも同じセリフを吐いた。

「…天使か…」

それを聞いた瞬間、二人して声を上げて笑った。

その後はお茶子さんが認識している限りの情報を聞かせてもらって、ようやく現在に戻る。

母さんは気付いたら部屋から居なくなっていたが、しばらくすると麗日夫妻と共に部屋へと入ってきた。

「こんにちは、初めまして。僕は緑谷出久です。未来から戻ってきました」  
まず挨拶のストレート。

挨拶と目的を簡便かつ強烈にイメージさせる文句。

様子見のジャブじゃ余計に時間かかるので効率化。

ぶっちゃけ、頭が悪いと思うけど現状をありのまま伝えれば、このようになるので仕

方ない。

「こんにちは、麗日お茶子です。未来のデクくんのお嫁さんです」  
隣で母さんに挨拶するお茶子さん。

更なる協力者を得る為に必要な説明会が始まった。

## 9. Three family conference es (三家族会議)

「まず、状況を掻い摘んでご説明させていただきます」

そうやって僕は話し合いの口火を切る。

「先ほども言ったように僕とお茶子さんは未来から戻ってきました。ちょうど2X39年の9月1日に就寝したところ、2X19年9月2日にお互いの実家にて目を覚ました、というのが僕らが認識している状況です。現在のところ何が理由で戻ってきたのか不明ですが、僕はこの状況を喜ばしく思います。」

そう言ってお茶子さんの目を見ると、僕の言いたいことを汲んでくれたようだ。

「私とデクくん：出久くんは二人ともトップヒーローとして仕事をして充実した毎日を送っていました。まだ、子供は出来てなかったけど、それでも幸せな毎日でした。そんな幸せな日々を過ごしていても、望まない結末つてのはいくらでもあると思います。」

少しずつ、伏し目がちになるお茶子さん。

続いて目を向けるのは母さんにだ。

「インコさん。もう出久くんからお聞きになって、その事を信じていると思います。本

来私たちが高校生で出会うはずが、12年も先んじて会っているのは、私たちのタイムリープの証明になると思いますが、信じてもらえますか？」

母さんは言葉は出さず、首肯だけで答える。

「父ちゃん、母ちゃん。信じてもらええると思えなかつたから、デクくんと相談してこの場を設けさせてもらつたんよ。出来る限り、説明するから私のお願ひ聞いてもらえんかな……？」

母さんに対する話し方と違つて、幾分砕けた話し方。

僕と話す時とそう変りない。

あまりに突飛すぎる話である。

お義母さんは目に見えて慌て、お義父さんをチラチラと見ている。

逆にお義父さんは両腕を組み、背凭れに体全体を預け、瞑目していた。

「緑谷……出久くん、と言つたかね。」

「はい。」

「ウチの娘が君のことを『デク』と呼んでいるがその経緯について説明してもらえるか？」

僕はその質問に思わず首を傾げてしまう。

何故今その質問なのだろうか？

「…もともとは僕の幼馴染がいつまでも個性が出なかった僕に対して名前の読みと何もできない『木偶の坊』を振った蔑称もじでした。」

机の下で指遊びをする。

遠回りに、コレは馴れ初めを聞かれているのだと、答えながらようやく気付く。

「まだ自己紹介もしていなかったので幼馴染が叫んだデクが僕の本名だと勘違いした彼女に初めてそう呼ばれたんです。その時、彼女がこう言いました。『デクって頑張れって感じがして好きだ』と。その時嫌いな蔑称が好きなあだ名になりました。」

あれは入学日、二度目の邂逅。

僕らA組は式やガイダンスをすっ飛ばして個性の把握テストを行ったあの日。

まだ0か100かしか調整できなかった僕は、人差し指の痛みとともに覚えている。

気づかぬ間に机に落ちていた視線を持ち上げ、お義父さんと目を合わせる。

「そうして、自らに付けたヒーロー名がデク。いつの日か役立たずになるための名前です。」

目を開け、聞いていたお義父さんは再度目を瞑り、姿勢は変わらず不動のまま。

一呼吸吸って吐き、そこに微かに納得を思わせる唸りが混じった。

「20年後と言ったね。高校を卒業してプロとして働き始めてそこその頃合いだろう



「若手注目とかで取り上げられたりとかしていないのか？」

「これまたひよんな質問だ。」

意図が分からず、聞き返そうかと思つたが、お茶子さんに機先を制される。

「ウチらの代は『次代の象徴』って呼ばれてるんだから。デクくんだって、師匠に恥じない人気がぶりだよ？」

「何たつて三強の一角ですから、と腰に手を当て胸を張るお茶子さん。」

見たまま幼いなりなので、思わず「可愛すぎか!？」と叫びそうになるのをぐつとこらえる。

「…名門出で、稼ぎよし、性格も良く、夫婦仲も良好…。」

…顎に手をやり、呟くお義父さん…なんだか不穩だが、よく僕がやるポーズだと対岸から指摘を受ける。

「よろしい。ならば、俺は全てを信じよう」

結論、お義父さんが出した答えは全肯定だった。

「いいの、父ちゃん？自分で言うのもなんだけど、相当荒唐無稽だよ、私たちが言ってるハナシ。」

「構わんさ。会話の端々で分かる知力と堂々たる様、目に映る覇気。どれを取つても年齢よわい4つの子供に出るもんじゃない。未来から戻つてきた、なるほど十分納得出来る。」

そう言ってお義父さんは初めて見慣れた笑みを顔に浮かべた。

「母さんは質問大丈夫か？慌てる間に俺が仕切つていくつか聞いたけどよ」

「私はええよ？お茶子とあなたが納得してるならそれで」

お義父さんの隣でお義母さんが、お茶子さんの麗らかな微笑みよりもいくらかおつとりさせた笑みを浮かべる。

本当に気持ちのいいご両親だ。

2年ぶりに会った義父母は最後に会った時よりもはるかに若い姿だった。

「それで、お茶子？お願いっちゅーのは何なんや？」

「あ、それなんやけど。」

言われて思い出したかのようなそぶり。

一瞬のタメの後、彼女は言う。

「父ちゃん、母ちゃん。私、デクくん一緒に暮らしたい！」

空気が瞬間凍結する。

凄いや、お茶子さん。

いつのまに轟くん張りの冷却が出来るようになったんだ？

椅子の上に立ち上がり、机に両手を叩きつけたお茶子さんは気炎を上げながら、尚も息を巻く。

視線で彼女を追うと、僕の口からは意図せず「へ」と「あ」の中間音が出ていた。

「私たちは未来から戻ってきてるから、助けられなかった命が助けられるかもしれないよ。先手先手で、対処出来るから、対策も取りやすいし、更に一緒に居れば互いにトレーニングもできるし、支え合うこともできる。それに何よりも好きな人と一緒になったのに10年単位で別居とかやったらんないし、幼い見た目の好きな人とかむしろ近くで見ない方が無理っていうか、つまりはそう言うことなの！」

…沈黙が更にもう一枚降り掛かる…。

でも、言われてみればその通りだ。

今まで手を出せなかった事件もオールマイトやサーに協力を頼んで、手を回してもらうことだって十分に可能なはずだ。

僕の求める最高へのステップとして中核になるオール・フォー・ワン征伐戦を前回よりも少ない被害で終わらせ、オールマイトの現役を維持させ、平和の象徴を存続させる。それから、トレーニングの件もそうだ。

同世代のヒーロー科の仲間にも出来るだけ早くコンタクトを取っておこう。

出来ることは沢山ある。

失わずに済む未来を勝ち取るために…。

それにお茶子さんと離れて暮らすのは、好きになつてから別居の期間がなかったから

か出来るだけ一緒にいたい…。

あつても一月程度の出張のすれ違いくらいだったので、この数日間とてもモヤモヤしてた。

そして、好きな人の幼い頃を写真でなく生で見れるんだ。

この天使を収められるなら同居、ナイスな提案だ！

「異議な…」「認められるわけあるかボケえ!?!」ですよねえ…」

冷静、沈着だったお義父さんはその態度をガラリと変えて、椅子を蹴飛ばして机に両手を叩きつける。

僕は賛同して挙げかけた右腕をおもむろに下ろす。

お義父さんの言うことはもつともだ。

どうにかこの無茶な要求を通すことは出来ないのか…。

「アホ拔かせ、お茶子!?!お前中身は大人でもナリはまだ子供やぞ!?!」

「なら、父ちゃんは母ちゃんと別居してても平気だつて言うんやね!?!」

「それとこれとは話が…っ!?!」

「いーや…!?!」

会議テーブルの対岸でオロオロ慌てるお義母さんを挟みながら、二人は喧々囂々と声を上げてゐる。

隣に座る母さんを覗き見ると困っているのに笑っているような不思議な表情をしていた。

「ねえ、母さんはどう思う…?」

母さんにだけ聞こえるように小さく問い掛ける。

母さんはすぐに視線をこちらに向け、片手メガホンの要領で、耳元で呟いた。

「…ウチでお茶子ちゃんと一緒に暮らせるのが一番よねー?」

キョトンとした。

驚きのあまり母さんと目を合わせる。

ハト豆状態で目を合わせると数秒しないうちに母さんが嘔き出した。

ややあつて、笑いを抑え込むと、咳払いを一つ。

「ねえ、麗日さん。」

母さんが声を掛けると、お義父さんもお茶子さんもパタリと言ひ合うのをやめた。

「娘さんをウチに預けるだけで構いません。特に問題が無ければ、夏休みとかの期間で帰省することも出来ますし、この子たちも思考の上では大人なので出来るだけ、自ら動

けるようにしてあげたいんです。先程言つてた先手先手の対応をするにも必要ですし。親として出来る限りの譲歩を私はしてあげようと思うのですが、ご協力していただけませんか？」

母さんの静かなのに芯の通つた声は、決して広いとは言えない会議室の中に転がった。

「そりゃあ、娘たちの言い分を信じるつて言つた手前、出来る限り手伝つてやりたいつて思うに決まつてるじゃないですか。でも…それとこれとは別でしょう？」

勢いそのままお義父さんはお茶子さんの両脇を抱えて持ち上げる。

「可愛い盛りの娘を手放す親がどこにおりますか!!」

今日で一番熱の入つた言葉だつた。

たしかに…同じ立場なら僕でも手が出るかも。

10. My decision || Our decision  
on (僕の決意 || 僕らの決意)

お義父さんが号泣しながら、自分の意見を叫ぶ。

ここは無理を言ってはいけない場面。

当初の目的はお茶子さんと会うこと。

それが満たされ、今後も定期的に会えるよう理解してもらえたのは、望ましい結果だ。

お義父さんの言い分は十二分理解できる。

娘を何処の馬の骨とも知らぬ子供に連れ去られるのと同じだ。

同じ状況になったら、例え大人であっても僕は取り乱す自信があるぞ。

「時たま、ウチに帰ってくるんやからそれで妥協してよ、父ちゃん。一生帰ってこんん言うてるわけとちやうんやし」

椅子に立ったまま、腕組み、頬を膨らませてご立腹ポーズ。

学校にいる間は天真爛漫な彼女しか見てこなかったし、幼い見目もあって、僕とお義父さんに大ダメージ。

「…んん…。それでもダメだ。親には子供の成長を見守る権利と義務がある。例え、好

き同士で将来を誓い合った仲だとしてもその権利は主張させてもらう」

先ほどもであらう剛健な態度を示していたために、そのカツコつけながら弱気な発言をする姿はどこか滑稽だった。

どちらも攻勢を崩さず、にらみ合いが続く。

「ほんなら、出久くんをウチで預かるんはどうや、父さん？」

動かぬ情勢に一石を投じたのはお義母さん。

確かにそれならば、お義父さんとお茶子さんの意見に食い違いは出ないが、あちらを立てればこちらが立たぬ…。

母さん的にはどうなのだろうか…？

「ええ、いいじゃないですか。そうしましょう。」

え。

どうしてそんなアツサリ？

「デクくんと居れるんなら私はウチでも構わんよ？」

お茶子さんもその提案に同意する。

…あー…状況が読めてきた。

母さんとお義母さん、お茶子さんの女性陣が巧みなアイコンタクトを交わしているのに今気が付いた。



とどのつまりは心理学的セールの応用のなんと云ったか…?

「無茶な大きな頼み事の後に本命の通したい頼み事をする断りにくい」と言う人間的心理を巧妙に突いた二段構えの「オネダリ」だったようだ。

僕は気付けたが、術中にハマっているお義父さんは「それなら…」と見事に要求を飲まされている。

「ウチで一緒に暮らすんやけど、東京方面には何度か行く必要があるし、相手方が捕まらなければ日を跨ぐこともあるから、毎日家に帰って来れるとは約束出来ないけど、それは仕方ないよね?」

「まあ、そう言うこともあるだろう。」

「その時はデクさんとインコさんのところにお泊りするからいくらか向こうに着替えを送つとした方が都合がいいと思うんよ?」

「いちいちお借りするよりも自分のがあればそれが使えるし、合理的だな。」

「じゃあ、何日か分の着替えとお泊りセットをデクくんたちが帰るときに持つて行くね」

お義父さんは話の流れに沿って首を縦に振っていき続けたが、突然出掛けるよ、と言われギョツとする。

「いやいや、待ちなさい。なぜそのまま向こうに行くような話になつてゐるんだ?」

「今後はデクくんと共に行動しようと思つて。今回別れたら、また会う時に二度手間に

なつちやうんよ？移動するときも常に一緒なら合理的よねー？」

ハイ、論破。と言いたげなお茶子さん。

お義父さん、目に見えて萎れている。

「大丈夫よ、父ちゃん。あくまで拠点はここやから。急に居なくなったりせんよ？」

「お、お茶子お…」

潤みきつた両目から滂沱の如く涙が溢れる。

…ちなみに。

彼女が通した「オネダリ」は以下の通り。

- ・同居の許可
- ・長期外出の許可
- ・長短期の外泊許可
- ・合理的判断の優先

僕を除くお義父さん以外のみんなが敵の状態で説得と言う名の悪徳セールスに僕は発言していいにもかかわらず居た堪れない気分になった。

お義父さん、なんかすみません…。

—————

「それじゃあ、今夜はここをお使いください。後で布団を用意してお持ちしますんで」  
部屋へ案内してくれたお義母さんに会釈を返し、母さんの中に入る。

特に荷解きする意味もないので、母さんに先ほどの話し合いの件を聞いてみることにした。

「結局、母さんも保護者として常に同行。ここに半同棲の状態なんだけど、それで良かったの？」

母さんはボストンバッグを開けて、中をみて足りないものの有無を再度(4回目?)確認しながら僕に目を向けて答える。

「だって、旦那さん。折れるはずもないもの。奥さんもそれが分かってたから、ああ言う助け船を出したのよ」

まあ、その後のお茶子ちゃんの詰め方はお上手だったわね、とやや呑気なコトをおっしゃる母さん。

「途中でアイコンタクトに気付いて、三人で結託してやってるのに気付いたけど、女性陣の絆が怖いと思つたよ…。」

あの後も何だかんだで小学校はお茶子さんの地元、中学校は折寺中に通う事を確かさせられていた。

勢いに飲まれて「男に二言はねえ」なんて言ってしまうものだから、もう引くに引け

なくなってしまった。

お義父さんは漢だった。

しかも、漢を見せれば損をするタイプの漢…。

烈怒頼雄斗…切島くんもそうだったな…。

ふと、トンガリ赤髪がトレードマークだった同級生を思い出し、口角が弛む。

最後に見たのはかつちゃんより前だったから3年前かな…。

デトラネット社強襲の際に情報リークによるカウンタートラップをうけた。

地下フロアを丸ごと水に沈める大雑把かつ大胆、そしてこれ以上ない策で、僕ら強襲部隊を大混乱に陥れた。

何とか水の出入りは轟くんの氷結で事を収めたものの、スケプティックの機械人形が至る所から現れ、階段へ殺到する僕らの後ろから急迫してきた。

その時に殿を務めたのが切島くんだった。

ここは俺が食い止めるから先に行け、と階段入口の両端を両手で穿ち硬化させた彼は叫んでいた。

問答は覚えていない。

ただ、かつちゃんが待つてやるからすぐに来いと、言っていたのだけは覚えている。

その数十秒後に見慣れた光と音を伴って下階に振動。

その後すぐ様階段の踊り場までが暗く淀んだ水で埋まった。

施設破壊用にと全員に配給していたかっちゃん製の手榴弾だ、と誰もが皆すぐに分かった。

それが故意になのか敵によるものなのかは判断が付かなかつたが、彼の最期である事は皆理解していた。

殿には彼でなく、僕やかっちゃんが回っていれば…。

「デクくん？」

思考の海から引き揚げられる。

顔を上げれば数ミリ先に彼女の鼻先が有って、思わず飛び跳ねた。

「お、おちゃあ!?!ちかあつ!?!」

唐突にやられると心臓に悪い。

いくら、慣れがあるとは言え、覚悟なく急にド至近距離に異性の顔があつて驚かない人間がいるだろうか、いやいない…こともない…?

「もう。四回は呼んだよー? 後一回呼んで答えなかつたらチューしてやるとこだったのにー」

むう、と焼けた餅の如く頬が膨れる。

かわいい。

周囲を見渡せば、考えているうちに母さんはどこかに行ったらしい。

それを確認してから膨れた彼女の頬を指で突いてやれば溜まった空気が強制的に排出される。

お付き合いを始めてからお約束的一幕。

こうすることにより、お互い自然と笑みを浮かべられるからだ。

「誰のこと考えてたか当てよっか？」

微笑みのまま彼女は僕に問う。

「誰だと思おう？」

「切島くん」

僕が問い返せば、間髪入れずに正解を口にする。

「なんでそう思ったの？」

「父ちゃんの態度がなんか似てるなあって私もそう思ってたね。デクくんなら、昔のことを思い出してたんじやないかなーって。」

すこいや。

「ピンポン。大正解」

「わーい！賞品はデクくんからのチューが良いな！」

はしやぐ彼女を見ると未来の彼女よりも幼い身なので、見た目に沿う態度を取ろうと

いう姿勢が見て取れた。

彼女のリクエストに応じ、柔らかな頬に唇を一つ落とす。  
数秒、和気藹々とした空気が流れるも次第に鎮静。

「…頑張ろうね…」

「うん。」

文法的に色々欠如した会話。

通じているので関係はない。

僕の決意はその時、僕らの決意であると再確認したのだ。

## 11. Naked relationship (裸の付き合い) 【暴走回】

あれから、数時間後。

麗日家の皆さんと夕飯を食べ、1番にお風呂に入る権利をいただいた。

一通り身体を洗い、少し高い縁をよじ登りお湯の中に身を投じる。

移動続きで多少凝り固まつてる身体をほぐしながら、肩まで浸かる。

座高が小さいため、足を伸ばして座ると頭まで湯船にカブる羽目になるとは…。

小さい頃はこんなだったかな、と思い返すも遠い記憶なので思い出しようもない。

「は…。思ったよりもすんなりことが進んでくれてよかった…。最悪、説明に説明を重ねるか、説得の粘り勝ちを狙うかの二択かと思ってたし…。」

手の腕の中を覗き、自分の目と視線を合わせる。

そのまま、顔に叩けっけ暗く曇った考えを押し流す。

「お茶子さんと母さんたちには感謝だな…すこくゾツとしたけど…」

女性に多数決を挑むのは出来るだけ避けるべきだと、心の掟に一条付け加えることに



した。

もしも、紙や情報媒体に残して漏洩でもしてみろ…余計怖い目が待っているに決まってる…。

自分の想像に掻き立てられて、温かな湯船の中にいるのに身を震わせた。

そろそろ次も支えているし、上がろうかとした時。

第六感、虫の知らせ、妖怪センサー…なんでもいい。

それらのいずれかが反応したような気がした…。

そのため立ち上がる途中で動作が止まったまま、ものすごい勢いで開いた扉に目が向いたまま…僕は固まった。

「デククーん…一緒に入ろー!!」

そこには産まれたままの姿のお茶子さん。

突撃してくるそれを見た瞬間、僕はこの後の展開を128通りほど刹那のうちに脳内を巡らせて…僕の意識は遠のき掛けた。

そのまま手放すところだった意識がつかぬぎとめられたのは、次の言葉によつてだ。

「お茶子お!!父ちゃんがダメでなぜ出久くんは良いんだあ!!」

「父ちゃん。さつきも言ったけど、私中身はオトナの人妻なんよ?旦那と一緒に風呂入ったつてええやん!」

「大人なら恥じらいや常識、分別を持ってえい!」

「そこはほら、幼い幼馴染同士が一緒にお風呂入る…みたいな流れに出来るやん、今まさに子供やし」

あー…いけない。

こうなつたら止まらない。

何が何でも自分の望みを通す、いつも何も言わずに我慢するお茶子さんのパーサーカーモード…。

初めてこうなつた時は、帰りたくないってなつて寮則破る羽目になつたんだつたな…。

「あー…すいません、お義父さん…。今日だけお願いします…。明日からはきつと大丈夫なんです…」

僕が恐縮しきりに願い出るのを見てお義父さんは何かを納得したようだ。

「む…そ、そうか。なら、君からもちゃんと言うように頼む…。お茶子、今日だけだからな?」

「えー、今日からだよー!」

荒ぶる駄々っ子、お茶子さん。

ぐっ…駄々のこね方からして可愛い…。

「何か事故が起きてからじゃ遅いからな、男女別れて入るべきだ」

「何か事故って私たちまだ子供出来ないよ？」

「お茶子!」さん!」

「て言うか、ちっちゃいデクくんほんま可愛いな：昼あつた時、天使かと思ったもん：手エ小ちやいな：肌もプニプニ、筋肉全然ないな！あのバツキバキの身体どこいったん！髪もまだ柔らかくないな、典型的なお子様へアーやん。未来の私にキューティクル分けて欲しいくらいやわ：」ブツブツ

なんだか、お偉いさんに会う時のボディチェックを受けている気分になってきたが、それ以外の高揚もまた感じている。

「お：デクくんのデクくんもこの頃はこんなんやつたんね？夜は猛々しいモンスターやったのにー」

その言葉を最後に僕は逆上せ上がり記憶を飛ばした。

飛ぶ寸前にお義父さんがお茶子さんを怒鳴りつけているのが、聞こえた気がした。

—————

次に気を取り戻した時は、縁側。

目を開けた瞬間、中庭が目に入る。

「あ、デクくん起きた？」

上から掛かる声はお茶子さん。

どのくらいの間か分からないが、膝枕をしてくれたみたい。

団扇で緩く風を送って、熱を冷ましてくれていたみたいだ。

「あー、逆上せたのか…迷惑かけてごめんね。」

「んーん、私こそ…調子に乗り過ぎてた…ごめんなさい。」

二人で謝り合う。

許しの言葉はあえて口にしなかった。

お互い喋り出さない数十秒。

僕はこの間は嫌いじゃない。

停滞した空気に穴を開けたのはお茶子さんだった。

「昔ね、父ちゃんも母ちゃんも優しいし、私も怒られるようなことってしてなかったから、殴られるほど怒られるようなことって無かったんだけど…父ちゃんに初めて頭ブン殴られたわ…ほぼ手加減なしだったみたいで、今おつきなタンコブが居るんよ」

中庭に向けたままだった顔をお茶子さんに向けてみると、苦笑を浮かべるその頭にはオレンジ色の氷嚢とタンコブ、頭の鏡餅が出来上がっていた。

「まあ、仕方ないよ…最後にマトモにイチヤイチャ出来たのって作戦決行の…三ヶ月前だっけ？」

「もう四ヶ月前だよ、デクくん。結婚記念日に祝えないから、サプライズで前祝いしてくれたんじゃない」

お互いに多忙が続き、家庭内でも仕事上でもすれ違いが長く続き、どうにか互いに時間を取ろうとして、ようやく愛を睦み合うことが許された。

その分で溜まっていたフラストレーションが、今日爆発してしまった、と言うわけだ。「いやあ、溜まっていたとはいえ、今更ながら何の恥じらいも無く、裸見せるわ、あちこち触るわ…今になってなにやってんだ…って思つとるよ…」

後頭部に手を回すお茶子さん。

彼女が照れた時のクセだ。

後ろ髪をかき回す内に氷嚢に触れてしまい、タンコブの表面を軽く削った。

「アイタタタ…今夜寝れるかな…」

氷嚢を押さえ付け、落ちないよう確認する。

結構な痛みがあるようで、毗が潤み始める。

その溜まった潤みが瞬きとともに決壊して一滴頬を伝った。

それを見て僕は腹筋の力のみを使って体を跳ね上げ、その雫を舌で掬い取る。

その瞬間、呆けたお茶子さん。

次の瞬間は視線だけが交錯した。

「不満が溜まつてたのはなにもお茶子さんだけじゃないんだから、そのところは忘れないでね？」

お茶子さん顔が下から順に赤くなる。

それが天辺に到達した時、頭の氷嚢が漫画的にピョンと跳ねた。

「…あかん、キュンときた」

…キュンと来たなら、抑えるのは左胸じゃないかな…？

何でお腹押さえてんのかな…？

「…ウチの嫁さんは意外とエロ可愛いなあ…」

「エロ可愛いって何なん!？」

怒ったフリで声を上げて、キスには応じてくれた。

—————

「それじゃ母さん、お休みー」

客間に戻り、寝支度をしていた母さんに声を掛けて布団に潜り込んだ。

声をかけた時、後ろを向いていた母さんを枕から見るとこちらを見てキョトンとして

いた。

「出久、アンタお茶子ちゃんと一緒に寝ないの？」

「え」

とりあえず、そういった諸々はお義父さんとも相談して決めよう…そうじゃないとあちこちから針のむしろにされてしまう…お義父さんによって…。

「うん、一応今日のところは」

「美茶（ミサ）さんは、お風呂も布団も一緒にいいって言ってたんだけどねえ？」

…なんでもお見通しかな、女の勘。

恐れ入る。

「まあ、実際結婚してたつて言うんだし、本人同士に好きにさせるべきつてのが、母親ズの認識だから。照仁（テルヒト）さんは断固反対みたいだけど、アレは娘を持つ父親が罹る特有の病だから気にしなくていいつて。ウチのおじいちゃんと一緒。」

あー…母さんラブのおじいちゃんか…。

確か寿命で10歳の時に亡くなったけど、この頃はまだ生きてるのか…。

「タイミング見て会いに行こう」

きつと会つたらめちやくちや可愛がつてくれるんだろう…記憶の中の彼がそうしてくれていた。

Turn : past

12. Master teacher (師匠の師匠)

Side : ???

私が日本に戻ってから既に数年の時が経つ。

当時はヒーローの本場アメリカで経験を成し、頼れる相棒と別れを決めて、夢を達成するべく満を持して帰国したのだ。

帰国したその日にビル一棟丸々焼ける大災害に直面したりして、私の日本デビューは鮮烈な物となった。

一昨年、総キャリアも十年に満たないものの誰もが憧れるビルボードチャートNO.1ヒーローに選出され、名実ともに私の夢であるヒーローの化身『平和の象徴』になれたと思う。

そんな私の毎日は朝のランニング兼パトロールから始まる。

朝早くは都市部では窃盗、強盗の類。

地方部では暴走やひき逃げなど車に関する事件が起こりやすいものだ。

誰かを呼ぶ声あれば、そこへ急行し、さっと片付ける。



笑いとともに現れ、笑いを残してその場を去る。

ヒーローとは時間との勝負。

然れどもファンサービスを怠ってはならない。

私のコースである一都三県を巡り終わり、六本木のメインに使用している事務所兼我が家へと戻る。

なお、ランニングは決めた時間で行うものだ。

「おはよう、オールナイト。本日も時間厳守で何よりだ。」

「おはよう、サー。今日はちよつぱり寝坊してしまつてな。いつもより巻きで走つたが、いつも通りにこれで良かったよ。H A H A H A H A!!!」

ヒーローたるものスマイル上等。

いついかなる時も自らさえ騙して笑顔の仮面を貼り付けるのさ!

「なるほど、いつもよりも脈拍が高いのはそのせいですか。」

毎度思うが、サーの目の付け所が怖いんだよ。

何でぱつと見で脈が分かるんだい?

「それはそうとオールナイト。本日もまた緑の封筒が届いていましたよ」

既に開封済みのファンレターを私のデスクへと投げて寄越す。

やれやれ、何度も言うが手渡しで渡してくれてもいいじゃないか…。

「んん！熱烈なファンも歓迎だがね……こう何度も会いたいと言われてしまうとこちらの気がそがれてしまうね。」

鉛筆で書いたと思しきその手紙は幼げな筆圧と相反して教養の高さを伺わせる内容だ。

これは幼く扮した大人が子供なら相手してもらえろと思つて書いているのだろうと思つていたが、内容は『顔を合わせてお話ししたいことがあるのでお会いしたい』の一点張り。

空欄の目立つファンレターはいつも緑の封筒に包まれていた。

「差出人は緑谷出久……聞き覚えのない名前だ。」

「二度、サインでも送つて会う気は無いとハッキリ伝えてやればいいんじゃないですか？……ここまでしつこいとこちらが見なくなる可能性だってあるはずなのに……既に1日1通、15通目ですよ？」

「逆にここまで話したいことが何なのか気になるけれどね。とりあえず、いつものように保留にしておこうか。」

「はい。それでは、先日神奈川県警から委託された件の裏取りの話からですが……」

「<デンワガ……キタアー！……デンワガ……キタアー！……」

「すまない、先に出ていいかな？」

「構いません。今日は時間がある方ですから」

「もしもし、オールマイトですが」

『おお、俊典。連絡も寄越さんと随分ぶりじやな!』

「そ、そのお声は先生ですか!?!ご無沙汰しております!!」

『う、全く…昔から声のデカいやつじやな…』

「も、申し訳ございません…。音信不通の非礼も重ね重ね…」

『良い良い。便りが無いのは元気の印と云うが、お前さんの場合テレビを付ければ嫌でも知れるからの。最近も手を抜かず頑張っているようで感心だ』

「ご存知ただけて恐縮です。…それで、先生のご用件は何でしょうか…?」

『おお、それなんだがな…』

『お前に客が来とるんだ。今日明日で都合付けて来れないか?』

は?

先生から言われた言葉の意味を図りかねて私は敵前では晒すことのない硬直に見舞

われたのだった。

S i d e o u t

「今、俊典…オールマイトに連絡してやった。一応、今日これからなら都合がつくらしい。すぐに向かうと。」

「急な訪問の上、ご丁寧に対応していただきありがとうございます、グラントリノ」

僕とお茶子さん、そして母さんの三人は甲府にあるグラントリノの事務所にお邪魔している。

麗日邸で2日過ごした後に僕の家へと帰り、ここ何日かは遊びという名のデートやかつちやんたちを交えたトレーニングをしたりして過ごしていた。

爆豪ヒーロー事務所V S デク・ウラビティコンビで行った模擬試合の数はここ数日だけで五十を超えた。

既に数えるのが億劫だが、当たり前なことに未だ黒星無し。

幼いかつちやんを合法的にイジれるとお茶子さんがガンヘッド仕込みの無重力柔術で反抗するたびにコテンパンにしていたり、僕は僕でデラウエアスマッシュ（1%）でいなしているのかかつちやんの競争心がうなぎ登りの様相だ。

この折れない心は、昔かっちゃんから教わったんだよなあと懐かしくなるもの、同時に子供相手に何をしているんだ、と虚しさと切なさを覚える。

そんな日々を過ごしつつ、オールマイトにコンタクトを取ろうと共通の緑の封筒を使つて連絡していたが、応答を得ることかなわず、母さんをお願いしてグラントリノの事務所へとやってきた。

まさか固定電話が無いとは思わず、ノーアポの突撃訪問になつてしまったのは、申し訳ないの一言だ。

そして、扉を開けた開口一番に懐かしのセリフを聞けると思わずちよつと涙が出そうになつたのは内緒だ。

「それで、緑谷出久。お前さんの先ほどの与太話を信じるとして、お前さんはどの程度扱えるんだ？」

現在、母には席を外してもらつている。

この場にいるのは、僕とお茶子さんとヒーロースーツを着ていないグラントリノの三人だけだ。

応接テーブルの上で湯気を上げるお茶を手を取つて啜りながら、僕が差し入れたたい焼きを口にしつつグラントリノは続ける。

「お前さんが未来から戻つてきたつて話を信じるなら、俊典の後継つてことも分から

なくはない。だが、戻ってきて早々に俊典にコンタクトを取って伝えたいことと  
言うのがイマイチピンと来ない」

「宿敵との決戦についてとその手伝いをさせていただきたいと思っております」

ブフウツツ  
!?!?

グラントリノが飲み込み損ねたお茶が僕の顔面目掛けて吹き放たれた。

「何をバカなことを言ってる!?!ガキにそんなことをさせられると思ってるのか!?!」

「見た目はガキでも中身はプロです。その為に先手を取るべくオールマイトに、そしてあなたにコンタクトを取ったんです」

「話にならない。帰れ。俊典にもキャンセルしといてやる」

「グラントリノ」

話を中断して、電話へと向かうグラントリノの背中に僕は出来得る限りの低い声で呼び止める。

「一手、お相手願えませんか?どれほど扱えているか、お分かりになると思いますよ?」  
僕はその場で立ち上がり、両手を軽く握り構える。

隣のお茶子さんはお茶を啜ってこちらを覗いていた。

「なるほど、どいつに仕込まれたかは知らんが、合理的だ。部屋の損害は気にせんではない。全力で打ってこい」

パウッ!

小さな破裂音とともにグラントリノの姿が掻き消える。

否、掻き消えるような速度で動き出したのだ。

壁を天井を時には空中さえも足場として、高速で跳ね回る、師匠の師。

職場体験の時も早いと思っていたが、今の方がまた更に早い。

だが、追えなくはない。

おもむろに出した右手で空を握る。

そこには滑り込んできたグラントリノの細い足首があつた。

勢いのまま体を回転させ、回転軸を九十度回す。

そうすることでグラントリノは受け身も取れず、飛び込んだ勢いのまま、地面へと叩きつけられることとなる。

「先生!今の音は何の音ですか!?!」

…そこに筋骨隆々の黄色地の鮮やかなスーツの紳士が現れたことで現場の状況は悪

化する。



# 13. Past Master vs Future Disciple (過去の師匠 vs 未来の弟子)

「…どういふことが、説明してもらえるね、少年少女?」

彼が扉を開け放ったところでその目で見たのは、床を蜘蛛の巣に割り、倒れ伏す師とそれを成したであろう少年が恩師の足を握っている。

かと思えば、我関せずとばかり、茶碗を煽り、悠長にその中身を飲み下す少女。

そりゃあ、如何なヒーローであつても現場だけを見れば知り合いのヒーローを打ち倒す見知らぬヴィランの図である。

ただし、それを成したであろう存在が、腰に届くかも怪しい幼子であつた。

うん、意味がわからないよね。

僕もオールマイトの立場なら理解することすら放棄すると思う。

ましてや恩師が打ち倒されているのを見て、冷静でいられるはずもない。

…とりあえず、制圧してから考えよう。

No. 1ヒーローと言えど人の子であるがために、その怒りに身を任せて握つたま

まだったドアノブを思わず握り潰した。

「DETROIT SMASH!!」

本気の右拳。

恩師のピンチに籠が外れたのだろう。

振り向いたままでいた僕の右頬に突き刺さるコース。

振り下ろす形で放たれるそれを首を戻す勢いを使って打ち出された方向に合わせて回転。

それだけで直撃を躲した。

オールマイトが瞠目するも僕はそれで終わりにしない。

伸びきった右腕を左上腕で受け、右腕を右脇へと伸ばす。

飛び上がる勢いに合わせて左手を引き下ろせば、あら不思議。

274kgの巨体が簡単に宙を舞った。

ドスン、とおよそ人が地に叩き付けられる音とは思えない音が響き、オールマイトはその腹を天へと晒す。

視線はこちらに向けたまま瞬きすらせず、僕を見つめる。

「随分早く到着したね、デクくん。オールマイトの事務所って六本木じゃなかったっけ

？」

「多分、全力疾走したんじゃないかな？周りの被害を顧みずに済むようになるべく高いところでNEW HAMPSHIRE SMASHを使ってぶっ飛んできたんだと思うよ。」

空になった茶碗を応接テーブルに戻して、お茶請けの封を切っているお茶子さん。世紀の頂上決戦をお茶の間で楽しんでいるかのようにくつろいでいらつしやる。

「君たち…初犯でこれは覚悟しなさいよ！」

ネックスプリングに捻りを加えて、ワンアクションで僕に向き直るオールマイト。

なるほど、復帰動作もそう言う工夫ありきか。

手合わせだけでも勉強になるなあ…。

「少年、さっきのは君の個性かい？」

一分の油断もせず、構えたまま問うオールマイト。

「ご冗談を。さっきのはカビが生えるほどに古いただの技術ですよ？」

表情に変化はない。

しかし、身体機能は嘘をつけず、そのコメカミに一筋、キラリと光る汗が見えた。

「遠いところからご足労いただきありがとうございます。ちよつと予定とは違います  
が、このまま一手、御指南ください」

自然体から半身に構える僕。

右手は拳は握らず、平手。

その甲を差し出す形で指を伸ばす。

動かぬ巨像に対して、僕は指を数度曲げ伸ばし、挑発する。

曰く、「来いよ」と。

すぐさま変化は訪れた。

オールライトが地を蹴って、グラントリノ以上の速度で肉迫してくる。

踏み込みを載せた右、右を引く力を押す力に加えて載せる左、再度右。

秒間何十合と言うデタラメな速度で繰り返されるラッシュ。

僕は紙一重を見極めて、避け、流し、合わせ、打つ。

怒りに満ちていたオールライトの顔は、最初の一回で驚きが混じり、回数を重ねてい

くうちにその割合を逆転させていった。

余裕が一切なく、笑みすら浮かばない。

自身の出し得る最速のコンボを呼吸を乱すことなく捌き続ける幼子を見て、驚きを超

えて恐れさえ抱いているようだ。

やや大きく右拳を弾くと、僕から打って出る。

小さな体軀を生かして股抜け、その腰へと飛び付いた。

オールライトは背に回られた為に打ち出す直前だった左手を咄嗟に引き剥がそうと

背に回してしまった。

右を弾き、左手を後ろに回したためその巨体の重心が大きく右へと流れてしまう。体が流れるに任せ、僕はさらに体を振って崩しにかかる。

たたらを踏むことも無く、そのままオールマイトはバランスを崩し、倒れてしまった。今度は、キチンとマウントポジションを取り、太く頑強な首に貫手を添える。

「僕の勝ち、でよろしいですね？」

くっ、と喉の奥から音が漏れる。

まだ抗えると力を入れたのだろう。

体が跳ね上がるのを感じた。

「参ったなあ……体重が軽いつても大問題だ……。でも、こればかりは成長に身を任せるしかないよね……」

次の瞬間には両足を片手で掴まれ、さながらタロットの「吊られた男」の様に拘束されてしまった。

握り込んだ左拳を添えて。

両手を挙げ……この場合は両手を下げ？て降参の意を示す。

「そこまでだ、俊典」

その声にハツとしたのか、首から上だけを巡らせ、発声源へと視線を向ける。

「ご無事でしたか、先生」

「無事も無事よ。全く、たったの一合で意識を持つてかれるとか何年ぶりだ？とんでもないな、小僧」

「恐縮です、グラントリノ」

グラントリノと普通に言葉を交わす僕に理解が追いつかないのか、僕と恩師を交互に見ているオールマイト。

普段の凛々しい姿からは思いも寄らぬ茶目っ気。

僕の知ってるオールマイトと変わりが無い。

「改めまして、緑谷出久です。よろしくお願いします」

僕は、吊られて逆さまのままに頭を下げた。

「ほれ、いい加減離してやれ。さっきの電話の客つてのは、このチビたちだ」

そう聞くとオールマイトの顎が外れたかの様にストンと下に落ちた。

空間全体が一瞬の硬直。

その様を見ていた僕の背後で小さな破裂音が鳴る。

「ぶっ…ブフーっ!!も、もう無理、笑うの我慢できない…ツッ!!」

口元を押さえるもお茶子さんは笑いを吹き出した。

アハハハハ、と響く幼女ならではの高い声。

この上手い具合に勘違いが呼び起こした掛け合いが一昔前のお笑いのようなものに見えたのだろう。

僕も傍観者ならきつと笑つてると思う。

二重三重の驚きのために硬直したオールマイトは未だ、僕の両足を持つたままだ。

—————

「全く、屋内だつてのに無茶苦茶しやがる。見ろ、この眺めのいい風景を」

一発目の DETROIT SMASH で僕の背後にあつた壁は見事にぶち抜かれ、外の私道がよく見える。

体を入れ替えて行われたラツシユの影響で、扉は原型も残らず木屑と成り果て、その壁は中にある鉄筋が顔を出している始末であつた。

また部屋の中にあつたロツカーや応接セットはお茶子さんが座つていた三人掛けソファとテーブルを残し、あちらこちらへと飛び散つていた。

「も、申し訳ありません。先生がやられておられると思ひ、頭に血が上つてしまいました。当然、補修費用等は全額負担させていただきます…」

僕らは少し片付けをしたのちに、本題を話そうと顔を付き合わせたところだ。

一人掛けソファ二つの内、一つは大穴の空いた窓から外に飛び出しており、それは後

ほど入れるということとなって、本来それが鎮座する位置にオールマイトが正座して縮こまっている。

一人だけ違う画風の人が床に正座をして、縮こまっているのが、面白いのかお茶子さんは必死に見まいと目を逸らしながら、口元を押さえてプルプルと震えていた。

「当たり前だ、全く…。その上、子供にいいように遊ばれたとか俺もお前も恥ずかしいもんだ。今度みっちり鍛え直してやる…」

「ど、どうぞお手柔らかに…っ！」

正座して頭を下げた彼はさらに縮こまり、その身をブルブルと震わせる。

うーん、床が震えるほどに怖いのか…。

「それで？もう一度聞こう。誰だ君は？」

玄関を潜る際に聞かれた言葉。

職場体験以来聞かれなかった懐かしいフレーズ。

「ヒーロー名テク、こちらはウラビティ。僕らは二十年後の世界から戻ってきた、未来のヒーローです」

一度、グラントリノには話していたが、初耳であるオールマイトは見たこともないほど真ん丸に見開き、首を傾げた。



## 14. Heroes like bone (骨のようなヒーロー)

「未来から…？君か彼女の個性の力によって戻ってきたと？」

正座のままのオールマイト。

しかし、ソファに座る僕らと視線の高さが同じとは、成長の差を感じて苦笑が漏れる。「いえ、彼女の個性は『ゼログラビティ』五指で触れたものの重力を無くすものです。また、僕にそう言った力があるのも否定は出来ませんが、確証はありません」

「随分と曖昧な物言いだが、君は君の個性を把握出来ていないのかい、少年？」  
「ごもつともなご指摘だ。」

普通であれば、自らの個性を把握してしかるべきである。

「僕の個性は、その全てが明らかになっっていないんです…でも、その名称は分かっています」

この場でただ一人、そのことを聞いていないオールマイトが首を傾げる。

顎に添えられた右手が意外なほどチャームिंगだ。

「随分とおかしな説明をするね…。その個性の名前は…？」

「その前にオールマイトもそろそろお辛いでしょう？少々お待ちください。」

右手を壁の大穴へ向け、僕の指先に黒いモヤが現れる。

それが指先から勢いよく外へ飛び出して行き、数秒後にはソファを絡め取って、それを部屋へと引き込んだ。

「どうぞ、お掛けください」

ソファをオールマイトの側に寄せ、受け取ったのを確認してから個性を解除する。

「それが君の個性かい？」

「いいえ。これは僕の個性の一部の【遠隔視】と【黒鞭】を使った合わせ技です。ここからじゃソファが見えなかったので、デモンストレーションがてらに使いました。」

個性の名前を二つ上げるとオールマイトの目が尖りを見せる。

「さて、今二つの個性を見せましたが、思い当たるものはございませんか？」

「…まさか君の個性は…オール・フォー・ワン…と言うものでは…」

「まあ、オールマイトが間違っているのは分かっていますが、予想通りの間違いでなんか話の進め方が下手なんじゃないかと、僕自身疑ってしまいそうです…」

「デクくんは昔から突発的なもの以外の話の進め方は下手くそだよ？」

隣からトドメの一撃が飛来するも、なんとかその場で耐え抜いた。

「お茶子さん、ホント手厳しい…高校時代の優しいあなたが恋しいよ…」

ほろりと涙が溢れそうになるのも許してくれるよね…。

「話運びの下手さを彼女に駄目押しされたので、回りくどいのは無しでいかせていただきます…。僕の個性はワン・フォー・オール：第9代継承者です」

オールマイトの驚愕ランキングをまたも更新した。

そろそろ、トップ10が僕で埋まるんじゃないだろうか？

「先ほどの黒鞭は4代継承者、四辻 藍道の元々持っていた個性。遠隔視は3代継承者、紅 御代のもの。ワン・フォー・オールの歴代継承者の個性を使うことが出来る…：それが僕の個性、とすることになるでしょうか？」

そこで言葉を止めると、今まで口を開かなかつたグラントリノが、唸り声を上げて会話に乗る。

「志村のヤツもそんな話はしてなかったが…：今のを見させられりや信じる他ねーな…」

「…ええ、もしかしたら私も更に力を使えるかもしれません…」

何か希望を持ったかのようなオールマイト。

絶望に変わる希望は持たせてはいけない。

「いえ、多分オールマイトには出来ないと思います」

そう、僕はバツサリと切り捨てる。

そう言った瞬間に怒り、悲しみ、絶望が緋い交ぜになった表情をこちらに向ける。

「…何故だい、少年？どうしてそう言い切れる…？」

「僕は個性の中にある歴代継承者の残滓と会話することが出来ました。その際に、この個性の力を蓄える者としてオールマイトが培い、僕に継承する段で初めてそう言う能力として開花した…と。なので力を蓄えているオールマイトがこの力を使うのは難しいかと…」

握りしめた拳がギチギチと異音を奏でている。

対オールフオーワンに有効な手立てが出来たと糠喜びすればそうもなる。

「未来の話をします。オールフオーワンが黒幕となって様々な悪事を働いてきた通称ヴィラン連合との戦いが終わったその日に命を落とした僕らは、何故か二十年前の九月二日に戻ってきました。今からオールフオーワンを叩けば、未来まで波及する悲劇を食い止められる可能性があります。どうか力を貸してください」

僕が改まってソファの上で正座をし、土下座の姿勢でお願いすると、隣のお茶子さんも僕に倣って頭を下げた。

「…ああ、勿論だ。この先の悲劇を全て纏めて救ってみせよう！」

すぐさま快諾してくれるオールマイト。

しかし、それは僕らが望まぬもの。

「オールマイト、僕らは情報を渡すだけではありません。身体は幼いままですが、力は依

然変わらずプロのままです。オールフォーワンとの最終決戦では、僕らも戦います」

先ほどの戦いで如何に強いかは分かってくれたと思う。

「承服しかねる。見た目のまま子供なのだから、大人の私たちに任せたまえ」

当然、断ってくるオールマイト。

そりゃあ、見てくれだけなら守るべき対象だ。

戦わせるわけにもいきまい。

「オールマイト、あなたは五年後にオールフォーワンとの全面戦争で左肺全損、胃袋全摘の重傷を負います。そのせいでその後の数年は落ちて行く体力と狭まる活動限界時間の中を縫ってヒーロー活動をを行います。しかし、後に復活したオールフォーワンに対し、僅かに残ったワン・フォー・オールを振り絞って、打倒するもヒーロー生命が絶たれる。それが今から約十一年後の夏の話です」

出来るだけ声を荒げずに紡ぐ。

一度制御を誤れば何を口走るか分かったもんじゃない。

「今は万全の体調で、力も漲っているでしょうが、あなたはたった五年で見ても無惨なほどに痩せてしまう。筋肉などみる影もなく、骨と皮ばかりの骸骨のような姿。そうなつて血を吐きながらも歯を食いしばってヒーロー活動をし、その果てには：『平和の象徴』の瓦解による世の混乱：分かりますか：？ 貴方が倒れては元も子もないんです。それ

を防ぐ手立てがある。僕らが救える、戦えるんだ。今後、大怪我をして引退するのが分かっていて助けに行かないほど、僕も彼女も利口ではない。承服してくれなければ、どんな手を使ったって……」

「少年」

徐々に早く捲し立ててしまふ僕を止めたのは、小さく呟くような彼の声だった。

「ありがとう。君を選んだ未来の私は間違っていないかったようだ」

そう言つて腰を納めていたソファから立ち上がり、僕の目を見据える。

「緑谷少年。私の不義で連絡を取れず申し訳ない。改めて私からお願ひする。かの帝王を倒すため、その力と知識を貸してくれ」

そう言つて深々と頭を下げた。

話がまとまつたとホツとするのも束の間。

隣でガラスにヒビが入るかのような異音がした。

「ねえ、オールマイト？ 私は？」

にこやかな顔で威圧する僕の嫁がいる。

あー、背中に般若が見える……。

「えー……と、お茶子少女、で良いのかな？ 緑谷少年にお願ひするのも心苦しいのに、君にまでお願ひするなんて、とてもとても……」

「デクくんはさっきの手合わせで力を見せたからいいんや…？なら、私とも手合わせ、お願い出来ませんか…？」

「お茶子さん…？笑顔がいつもの麗らかな笑顔じゃないよ？そんなに凄まなくとも、きつと認めてくれるから大丈夫だって…」

「デクくん、黙って。舐められたら、終わりなんや…」

「どうしよう…なんだか、某幼馴染の後ろ姿に滅茶苦茶似てるんだけど…。  
来ないんですね？なら、こちらから行きます！」

そう言って戦いの火蓋は切って落とされた。

## 15. 10th successor (第10代継承者)

距離にして二歩分。

相対するお茶子さんとオールマイト。

最初の一回は飛び出したお茶子さんを片手で往なすことで終わる。

危なげなく着地し、再びオールマイトに向き合う彼女。

地を這うような低い姿勢で構え、両手は指先を床に当てている。

「お茶子少女、落ち着きなさい！何もここで手合わせしなくとも……！」

「いいえ、やりませぬ。私が戦力外でデクくんだけ連れていくとか承知しません。」

再び駆け出し、その土手つ腹に向けて掌底を繰り出す彼女。

先ほどの話があつてか、オールマイトはその手を注意深く払う。

「触れれば、終わりか……単純ながら怖い個性だ！」

「まだまだあ!!」

着地し、振り返り、突撃。

着地、突撃、着地、突撃、着地、突撃……



幾度も突撃を繰り返し、その度に払われる。  
無情にも速度が足りず、進展はなかった…。

そのままでは。

パリッ…

何かが閃き、迸る音が聞こえた気がした。

ハッとした僕は、口から出るままオールマイトに叫んだ。

「全力防御おおおお!!」

「…SMASH」

次の瞬間にはお茶子さんの姿は掻き消え、刹那の後にはオールマイトの代わりに粉塵と轟音だけが残された。

あまりの勢いで衝突のせい、壁がオールマイト型に空き、隣の部屋が窺える。

「ゲホツ…ゲホツ…ま、マジかよ…。これってまさか」

「さつきまでの突撃が無策の本気だと思ってました？まだ、全部は扱えていませんので、たかが50%ですよ？」

イタズラが成功したかのような満面の笑みで構えを解き、悠々とオールマイトへ近づく。

「改めて自己紹介します。麗日お茶子、ヒーロー名ウラボイ。個性は「ゼログラビティ」そして…」

「ワン・フォー・オール第10代継承者です」

あちやあ…オールマイトの驚愕No. 1、間違いなしだあ…。

「戦力外だなんて、言わせません！」

ニシシ、と歯を見せて笑う。

その笑顔はまるで悪魔で天使、と言ったところだった。

「悔つてすまない…見た目に騙されていたよ…。手合わせ、だったね？そちらの攻撃は

受け取った。今度は……私の番だ!!!」

突風巻き起こる踏み込みから右腕一閃。

余りに早く、僕でさえも見切るのは一苦勞…。

しかし…

「な…っ!?!」

『柔、能く剛を制す』ですよ、オールマイト」

オールマイトの拳を平手で受けたお茶子さん。

右手でその豪腕を押し上げて、突っ込んできた勢いそのままに後ろへ投げ飛ばし、壁の大穴から外へ真っ直ぐ放り捨てた。

物凄い速度で飛んでいくオールマイト。

無重力のために向きを調整出来ず、グルグルと無軌道に回転してしまっているようだ。

「解除、つと」

左右の指先を全て合わせ、ようやくこちらへと向き直った。

「デクくんの仇、取ったよ！」

満面の笑みをこちらへ向けてくる彼女。

彼女の麗らかな微笑みに癒される一方、ブツブツと呟くグラントリノの方が怖くて向けないや…。

「改めてお願いする。2人とも力を貸して欲しい」

ぶっ飛んだ先から戻ってきたオールマイトは土下座スタイルで頭を下げる。

「ええ、私たちは元よりそのつもりです！」

暴れてスツキリしたのか、彼女は微笑みながらお茶を啜っている。

「俊典…コレは本格的に特訓だ…」

目のハイライトが消えたグラントリノ。

視線をオールマイトから離さない。

「見た目子供の二人に良いように遊ばれおって…大体何だあの技は？」

「あの技って…どれのことですか？」

「二人とも俊典の右を受けて投げ飛ばしてたじゃないか。辛うじて合気なのは分かったが…。」

そのオールマイトを睨んだ視線のままこちらを向かないでください。

死んでしまいます…。

「私は受けたのは合気ですけど、投げたのは柔術ですよ?。」

「僕は避けたのが太極拳、受けたのが八卦掌、投げたのが合気です」

…

…

…何で黙るの?

「…き、君らは…一体誰に師事したんだ…?。」

「私は…三年後にデビューする武闘派ヒーローのガンヘッドに基礎を教えてもらいました。」

「僕はオールマイトに師事して、個性の使い方を教わりました。昔の拳法などは二人とも全部動画等で独学、ですな」

グラントリノとオールマイトは二人で顔を見合い、二人して頭に手を当て天を仰いだ。

そのリアクションは何なんですか…?。」

「いやはや参った。二人とも技術的に大成しきっている。今から何かを指導できるか分かったものじゃないな…」

「少なくとも、お前が教わることになるだろうな、俊典」

「そ、そう言われてしまうと恥ずかしい限りです、先生…」

床に正座したオールマイトはグラントリノへと恨めしげな顔を向けた。

そんな折、思い出したかのようにグラントリノが僕に問う。

「ところで、小僧。聞きたいんだが…」

「何で小娘にワン・フォー・オールを渡しているんだ？」

あー…恥ずかしいので出来れば黙秘したいが…まあ、許される話じゃないか…。

「あー…その…個性の譲渡の方法って遺伝子を取り込むことじゃないですか…だから…  
ね？」

「…納得したから皆まで言わんでいい、聞いた俺が間違いだった…」

「恐縮です…」

分かってもらえて助かった…。

何が悲しくて夫婦の営みを事細かに説明しなきゃならないのだろうか…？

否!! 断じて否!!

見よ! お隣のお茶子さん顔を!!

恥ずかしくて顔が赤く燃えそうなのに、嬉しくもあるからニヤケ面が混じっている。

百面相も斯くや、と言ったところだ。

「細かいことは省きますが、お互いに譲渡して、サイクル作ったら互いの中でワン・フォー・オールが定着した形でして…余剰の力が無くなるよう均等になりました。お陰でじゃじゃ馬感が無く、扱いやすくなったのを覚えています…」

「一応、未来で私には超パワーの力はないことになっていたので、5%程で常に運用していました。瞬間的には20%程度が限界だったはずですが、戻って来て以来、何故か更に扱い易くなっているようです」

「僕に至っては100%の力を常時運用することができるようになった次第です」

そこまで言う二人は顔を見合わせて、何かを通じあったのか、互いに頷き合っていた。

「とんでもない、じゃ済まされねえな…力だけで言っても俊典が一人と半分増えたよう

なもんじやないか…」

「敵対するオールフオーワンが少し不憫に感じて来ました…」

グラントリノは腕を組み、唸りながら瞑目し、オールマイトは惚けるように上の空。「裏技的に更に一人ずつ継承者を増やすことも出来るかもしれないので、最大六人で滅多打ちに出来るかもしれないね」

ニコニコしながらそう言うお茶子さん。

「それはもうシャレになってないよね!!」

「ごもつともです、オールマイト…」

「さて、力量も見てもらい、認めていただいたところで、次の問題に移りたいのですが…。現状、僕らは子供です。個性の使用に関して法律上何一つ合法性がありません。故に、その辺りの問題を解決したいと思うのですが、この時代に何か解決策はないのでしょうか?」

「実情としては難しい。最悪自警団ワイザランテとして逮捕されてしまう可能性も否めないな」

それは歓迎できない結末だ…。

将来の活動に支障ズバが出かねない。

「どうにか出来ないかウチの相棒サイドキックにも相談してみるよ。」



「サー・ナイトアイですね。是非お願いします。ただ、会つても居ないのに信用していただけるはずありませんので、僕からも直接お話しさせていたいただきたいです」

グラントリノとオールマイトとの接触、協力の取り付け、個性使用に関する合法化：また一つステツプを踏むことが出来た。

「ところで、お茶子少女：改め、麗日少女。どうして、そんなに私の顔を見ているのかな…？何か付いているかい？」

話がひと段落したところで、オールマイトはお茶子さんに話を振る。

「いやあ、意外と腕が平気だったので、もうちよつとカマしておけば良かったかなあつて…」

「H A H A H A H A !! 君は私に何か恨みでもあるのかな!?!」

画面越しで見るオールマイトのままのオーバーなりアクションで返していた。

16. A little step, Maximu  
m change (小さな一歩、最大の変化)

Side: Katsuki Bakugou

俺はどうやら凄いらしい。

幼稚園の誰より早く個性が出て、しかも自分の意思で爆発させられる汗って言う強い個性だ。

先生も言ってた。

凄い個性だ、強い個性だ、ヒーローに向いてるって。

みんな言ってる。

俺は凄い。

俺以外は凄くない。

…あの二人以外は。

俺は勝己。

負けるのが嫌いだ。

負けを認めたくない。

けれど、アイツらには勝てない。

今はまだ。

いっぱい鍛えて、絶対に勝ってやる。

ヒーローで一番凄いオールマイトにだってそのうち勝つんだ。

だから、あんな奴らに負けちゃダメだ。

「…ちくしよお…いづくのヤツ…なんで急に強くなつたんだ…？」

帰り道、いずくとあの女を空き地に置いて走ってきたけど、息が切れて今は歩いてる。

随分視界が悪いけど、コレは涙じゃない。

汗だ。

汗って言ったら汗なんだ。

ついこの間、いづくにも個性が出たらしい。

どうやら、デタラメに強い個性らしく、何がどうしてそうなるのか分からないくらい

強い。

この俺が吹き飛ばされるくらいの風をデコピンで作れる。

どう言った個性なのかは聞いてない。

きつと風を操る個性なんだ。

風を出される前にいづくを捕まえれば勝てる…と思う。  
それにあの女だ。

アイツも強い。

今すぐには勝てないくらい強い。

なんでも、触った相手を浮かすらしい。

たったそれだけの弱個性。

俺が勝てないわけがない。

…なのに。

「なんで触れないんだ？目の前にいるのに手が届かない…」  
悔しい悔しい悔しい…。

強くなるにはどうしたらいいんだ？

「ちくしょお…」

「どうした、坊主？喧嘩でもしたか？」

不意に知らないおじさんに声を掛けられた。

「なんだよ…見んな…！」

総白髪の背の低い爺さんだ。

足が悪いのか腰が悪いのか杖をついてる。

それなのに、白のボディースーツを着て黄色のマントとグローブ、ブーツを付けている。爺さんのヒーロー？

少なくとも見たことがない。

「ハハハ、元気があるなら結構。何やら悩んでいるように見えたが、どうかしたのか？」

「別に…なんでもねーし…」

強がりなのは分かってる。

そうやって自分を大きく見せるしか、こういう時どうしたらいいか知らない。

「実はな、大分前からお前と友達のことを見てたんだ。随分遊ばれていたな？」

胸の辺りがカツとした。

右手を握る時にパチツと弾ける音がする。

「知ってて聞いてんのか…？」

「さあな」

どっこいしよ、と近くの電柱の脇にあるゴミ捨て場のブロックに腰を下ろす爺さん。

その誤魔化す言い方が気に食わなかった。

「強くなりたいのか？お前さんは、どんな大人になりたい？」

両手で杖の柄頭を押さえ、視線をこちらに向けている。

「俺は…ヒーローになりたい」

口からスルリと答えが出た。

捻くれてるのは自覚している。

そんなすんなり出て来るほど弱っていたのか…？

「ほう、ヒーローか。君の個性は掌の爆破能力、で良いのかな？随分、汎用性に富んだ良い個性だ」

「でも、アイツらには敵わない…どうしたらアイツらに勝てるように強くなれるんだ？」

「なるほど、それが小僧の悩みか」

左手で顎を抑える爺さん。

ヒーロースーツのようなものに身を包んだ爺さんだ。

きつと強くなる方法を知っているかもしれない。

俺は四の五の考えるのを辞めた。

「どうやったら強くなれる…んですか？」

一応目上だから、と敬語にする。

先生にもそうするのが正しいって言われた。

素直に聞いたんだから教えろ、じじい。

「ワシも教鞭を取ったし、弟子も取ったことがある。お前さんも知つとるヒーローを育

てたこともあるんじゃないが…」

「とあるヤツにな、困ったことに負けてしまったの。今鍛え直しとる最中なんじゃ」俺でも知ってるヒーローって誰だろう？

まさかオールマイト…？

いや、そんなバカな。

こんな爺さんに教わってたなんて考え…ありえない。

「お前さんも一緒にやるか？」

そう誘われ、俺は…。

「やる」

間を置かずに即答。

当たり前だ。

俺は誰にも負けない、そんなヒーローになるんだ。

その後、爺さんとウチに帰って、色々母ちゃんにお願いした。

幼稚園は辞めて、修行するって言ったらめちやくちや殴られたけど、最終的に許してもらった。

爺さんのところで色々教わるつもりだ。

小学校は家から通う約束をして、その日のうちに家を出た。

こうして爺さんは親公認の師匠となった。

師匠の名前はグラントリノと言う。

—————

かっちゃんが居なくなった。

行き先は知ってる。

グラントリノのとこだ。

オールマイトは仕事のない夜、かっちゃんは昼、と言った具合に鍛えているらしい。

グラントリノの移動術はかっちゃんの個性にピッタリだ。

将来的には全てセンスで獲得するだろう技術を先んじて習得するのだ。

彼なら当然強くなる、以前より、もっと。

そんなことを考えながら僕はお茶子さんと電車に揺られ、家から一時間ほどのところで降りた。

二度ほどしか来たことのない土地なので、イマイチ土地勘がない。

都内の住宅街を抜け、やや人も疎らだ。



記憶を頼りに歩くとその土地の地主だろうか、大きな日本家屋の並びが見えてきた。道に影を落とす竹笹が秋が深まる中でも青く揺れている。

「はー…空気が澄んできたねえ…」

そう言うお茶子さんは目を閉じて、鼻から深呼吸をしている。

左手で繋ぐ彼女の手は、僕の手をしきりにぎにぎとさせており、少しむず痒い。

「携帯、買ってもらえたから遠出したけど、母さん心配してないかな？」

一般的に見て、幼稚園児の僕らが二人きりで出歩いているのを見掛けられれば、補導されても仕方ないが、一応そう言った場所は狙って通らなかつた。

別にやましい事をしているわけでもないし、逃げなくても良いんだが、対応を考える  
と面倒で…。

「GPSも有るし、大丈夫やと思うけど？最近、パートを休みがちだったから、良い加減  
出ないと言ってたってし、仕方ないんじゃない？」

「二応、一回連絡しておこう」

そう言ってショルダーバッグから取り出したスマートフォン。

小さくなった僕らには少し使いづらい。

『もう少しで目的地、心配しないでね』送信、っと」

打ち終わると画面をロックし、バッグに戻す。

一度離れた手をまた繋ぐ。

その顔を見てみれば、いつもの麗らかな笑みにパツと変わった。

「前のゴツゴツした手も好きだったけど、まだ小さくて、可愛い手も好き」

そう言いながら、僕の手を引いて腕に左手を這わし始める。

「はは…歩きにくいから、それは辞めてほしいな」

「やー、なのー」

今度は僕の手の甲を自分の頬に押し付け始める。

困りはするが、この様子を見るのも好きだ。

しかし、その時間に終わりを告げる。

「ここ、だね」

「私は一度も来た事ないから知らなかったけど、大きなお屋敷だね…」

開かれたその門扉と武家屋敷のような高い漆喰の壁。

日本家屋と言えばこの形、と想像出来る風貌だ。

「あちゃあ…インターフォンは後付けか…。仕方ない。中に入って声を掛けよう」

門の周りを見渡すもそれらしきものが見当たらないため、諦めて侵入する。

ずっと繋いでいた手を離し、身嗜みをお互い再確認。

気付かないうちに彼女の頭に赤い楓の葉が付いたので取ってやる。

「すみません、どなたかいらっしやいませんかー!」

すみませーん!と玄関の前で声を張り上げる。

そうするとどこか遠くから「はーい」と応答があつた。

待つていれば1分もしないうちに、その引き戸が開かれる。

「どちら様ですかー?」

現れたのは小学校高学年くらいのお姉さんだ。

銀色に輝く髪に疎らに赤が混じる彼女。

何度もあつたことがあるから知っている。

「こんにちは。焦凍のお友達かしら?」

記憶の彼女と違い、まだメガネをしていない。

「初めまして、緑谷出久と言います。こっちは麗日お茶子です。」

この世界では初めて会う、轟くんのお姉さんだ。

## 17. Old maid (ババ抜き)

僕らがやって来たのは、No. 2ヒーローエンデヴァー、轟 炎司氏のお宅だ。

そして、僕らの同期の家でもある。

ニコニコ微笑みながら挨拶をし、持たされた、と言って用意していた葛餅の菓子折りを渡す。

そのまま、何かを聞かれる前に上げてもらい、中庭に面した和室へと通された。

「今焦凍を呼んでくるからねー?」

小さな子が二人きりで来ていることに疑問に思わなかったのか、舌足らずな話し方を  
する冬美さん。

潜入作戦の第一段階は成功だ。

「デクくん。エンデヴァーと戦うって本気なの?」

ざっくり言うけど、まさにその通り。

実際僕には、それ以外に解決法が見つからなかった。

「うん。エンデヴァーが家にいるだろう情報は押さえてあるから問題はないはず…それで、轟くんのお母さんと轟くんのケアをお願いしたいんだけど、本当に大丈夫?」

「それは任してーリカバリーガール監修のカウンセリングセミナーの首席だよ？まだ実害が出てなければ、十分にケアできるよ！」

両手を握り、腰溜めに構えているお茶子さん。

ヤル気モードの時、良くやる構え。

それを見て僕は…

「はあああ…かわいいいいい…」

口から本音がまろび出していた。

それを聞いてお茶子さんはキョトンとした目になり、首をそのまま落とすように傾げた。

いちいち仕草が可愛いな、本当に…。

「焦凍連れて来たよー！」

くだらないやり取りをしているうちに冬美さんが戻ってきた。

襖を開け、中に入ってくる轟くん。

ミニマムサイズだが、整った容姿は知ったままだった。

「お前らだ r」「こんにちは！お茶子と遊ぼう！」

誰何する轟くんに被せるように声を上げのお茶子さん。

今は冬美さんに疑われるのはよろしくないなので、良い判断だ。

轟くんの両手を取り、笑顔を見せている。

…少しムツとしたが、顔には出さないよう努める。

「デクくん、何して遊ぼうか！」

「僕トランプ持って来たよ！これで遊ぼう！」

咄嗟にお茶子さんのテンションに合わせ、僕はそう答えた。

少し気恥ずかしいが、子供同士だから問題ない…そう自分に言い聞かせるも顔が熱いや。

「待て…お前ら…」「簡単なババ抜きが良いかな？一緒にやろう！」

会話の主導権を握らせない…こちらの都合を押し付ける形だ。

相手に悪印象を与えかねないので、本来悪手だが、子供の図々しさならそれほど問題じゃない。

「待て…それに俺…ババ抜き？のルール…知らない」

所在無さげに指先を弄り出す轟くん。

そんな姿を見て、込み上げるものがあるが、それを押さえ付けてお茶子さんとアイコ

ンタクト。

「教えるから、一緒にやる！」

出来る限りの笑顔、目線を合わせ、安心感を与える。

幼い轟くんは俯くのをやめ、僕らに視線を合わせてくれた。

「ね？」

駄目押しにお茶子さんが畳み掛ける。

轟くんの顔に朱が射すのを僕は見た。

お茶子さんは上げないぞ……！

「お姉ちゃん、学校の宿題があるから行くね！それじゃあごゆっくりどうぞー」

しばらく様子を見ていた冬美さんが笑みを浮かべたまま襖を閉じて何処かへ行つた。

しばらくは待ちだ。

トランプ遊戯に興じよう。

—————

「やった……揃った！」

そう言つて最後の一枚を場に捨てた轟くん。

僕とお茶子さんはまだまだ手札が残っているのだ。

「焦凍くん、物覚えはつやいね…まだ3回目なのにもう負けちゃった…」

いくら接待の手加減したゲームであっても、子供相手にコテンパンにされる見た目幼  
児、中身大人の僕ら…なんと情けない文面だ…。

「トランプ…！楽しい…！」

最初の警戒は何処へやら。

すっかり心を許してくれているようだ。

キラキラさせた笑顔でこちらを見る轟くん。

その笑顔に釣られて僕らも笑んだ。

…そんな折、少し気温が上がった気がした。

遠くでドストドスと誰かが歩く音が響いている。

音が近づくに連れ、気温も僅かながら上昇しているようだ。

…とおお！

しよ…とおお！…焦凍!!

「焦凍…んんか！」



パンツと派手な音を立てて襖を開け放つ大柄な男が一人。

オフのためか、その顔を覆う炎は無かった。

が、見まごうことはない。

エンデヴァー。

オールマイトに次ぐプロヒーローだ。

オールマイトに対し、怨念に近い執念を抱えており、その影響が将来的に轟くに悪影響を齎す…。

それに…。

「こんにちは、エンデヴァー。お邪魔しています」

精一杯の笑顔を浮かべ、挨拶する僕。

「どちら様かね？悪いが、焦凍は忙しい。お引き取り願おうか」

誰何から一息に帰れとまで。

随分と拗らせているものだ。

「いえ、焦凍くんにも用はありましたが、僕らはあなたに用があつて訪ねさせていただき  
ました。」

手に持っていたまだ揃っていない手札を捨て札の山に投げる。

そうしてから僕はゆっくりと立ち上がり、大男を見上げる。

「初めまして、緑谷出久です。デクとお呼びください、エンデヴァー」  
握手を求めるように手を差し伸べる僕。

その手は瞬時に叩かれた。

「お引き取り願おう、と言ったはずだ。ウチの焦凍は忙しい。友達と遊んでいる暇などないのだ」

叩かれたせいか、轟くんの扱いに対してのせいか。

どちらかは分からないが、いずれかのせいで僕の脳裏が赤く燃えたのが分かった。

「それはオールマイトを超えるヒーローにするため…ですか？」

知っている情報。

誰であろう、轟くんから昔に聞かされた話だ。

交渉術としては下策だが、本題にメスを入れるには最適解だったと言えるだろう。

「ほう。それは焦凍から聞いたのかね？」

「いいえ、僕の推測です。あなたがオールマイトに敵わないならば、自分の子供に超えさせようと言う言わば都合の押し付け、ですよね？」

核心を抉る決定打を乗っけから打ち込む。

苛立ちからか歯軋りが鳴り、コメカミに青筋が立つのが見えた。

「何が言いたい、小僧…？」

「はつきり申し上げます。あなたのやり方は間違っています。焦凍くんに望まない訓練を課するのはただの虐待、それ以外の家族には見向きもせず、奥さんや焦凍くんにキツく当たるのはあなたのエゴです。そんなやり方ではその内、ご家族からヴィランが出てしまいます…よつと!？」

言葉を紡いでいる間に僕の顔面目掛けて掬い上げるような拳が飛んできた。

拳から視線を離さず、スウエーの要領でやり過ごす。

空振った拳はすぐに引き戻され、再装填。

怒りに身を任せて振り回す素人と違い、堂に入った構えは、超常黎明期以前に風靡したプロボクサーを彷彿とさせる。

「…君はヒーロー志望かい？」

「ええ、オールマイイトに憧れて自らを鍛え上げました…簡単には倒されませんよ？」

「随分な自信だな…良かろう。焦凍の前に貴様から揉んでやる」

付いて来いと踵を返し、廊下へと出て行ったエンデヴァー。

その後を追おうとするとシヤツの裾を誰かに握られる。

振り向いて見れば、涙を湛えた轟くんの姿があつた。

「で、デク…父さんはすごく強いんだ。だ、だから戦うなんて…無茶だよ…!」

先ほどまでの笑顔は何処へかいつてしまった様子。

震える右手で僕の裾を握るため、震えが体表面を撫で、少しむず痒い。

更に彼のコントロールを逸した冷気が周囲を覆い、熱された気温が急激に冷え込んできた。

寒さに負けず、震えを抑えながら轟くんの肩に手をやる。

「大丈夫、僕は負けないよ！お茶子さんと一緒に見てて」

ニツと歯を見せる笑い方を敢えてする。

そうすることによってか、彼の手からスルリと僕の服が抜ける。

「お茶子さん、彼のお母さんは後だ。まずはあの頑固頭を小突いてくるよ」

「ちよーっと、私もあの言い方には私もおこだから…私にもやらせて欲しいな…なんて。ダメ？」

満面の笑みに青筋を浮かべる彼女の表情は、アンバランスながらその性根を正しく表す。

僕はその笑みに笑みで返し、平手一発なら、と応じた。

## 18. Slap with your hand (平手打ち)

結果から言おう。

一合で決着が付いた。

訓練場に入った後、互いに構えてすぐにお茶子さんの開始の合図が入る。

数瞬の間、エンデヴァアの呼吸に合わせて、僕が大きく飛ぶと、視点が下がっていたためにその視界から逃れた。

視界のやや上方から回し蹴りをお見舞いすると、過たず彼の顎に掠めるように当たり、そのまま昏倒。

無抵抗に後ろに倒れるエンデヴァア。

その後頭部を掬い上げるように平手打ちをかましたお茶子さんのお陰で、地に沈まず今は空中に浮かんでいる。

「……!!」

先ほど以上に煌めく轟くんの瞳。

轟家の絶対者たる父親を伸したのが、同い年の男の子であるのが、相当以上の衝撃を

与えたようだ。

「ふふん、心配いらんかったやろ？デクくんは強いんだよ！」

宙に浮くエンデヴァアの傍で腕を組み得意げに言うお茶子さん。

「デク……強い……それに、お茶子も速かった……すげー……!!」

目をキラキラさせて言う轟くん。

ああ……なんで彼を見てそんなにだらしのない顔してるの!!

浮気は許さないからね!

「はあ……轟くんかわええなあ……。なんで幼い男の子ってこんな可愛いんやろか……?」

持つて帰って飾りたい……などと申しており……。

絶対に許しませんからね!!

「な……なあ、デク……。俺、父さんに勝ちたい……どうやったら強くなれる……?」

「エンデヴァアが起きたら、色々お話しするよ、エンデヴァアと。そうしたら、きつとお父さんも優しくなるし、二人で一緒に強くなれるよ」

オールマイトの笑顔を元に僕の顔に再現させる。

安心させられる笑み、歯を見せて不敵に笑む。

返される笑みは今日一番の笑顔だった。

「個性無しでも、十分戦えるねー。」

「まあ、侮られてたみたいだし一瞬だったから、何をされたのか分かってないんじゃないかな？」

鍛えた技で足刀一閃。

その技は当代最強に次ぐNo. 2にも通じた。

やはり、鍛えて損はない。

僕は再度決心する。

このやり直しの世界でも刃を研ぐことを。

「ぐ……ぬ……？な、何だこれは!？」

昏倒から覚めたであろうエンデヴァーは宙に浮いて身動き出来ないことに驚いている。

「私の個性です。倒れてしまうと頭を打ち付けるところだったので」

本来叩く必要はないのに、後頭部を引っ叩いたのを言わず、助けた点のみを強調する。全く……シレッツとしてるなあ……。

「僕の勝ちでよろしいですね？」

下から見上げながらエンデヴァーに問う。

真一文字に結んだ口からは何の音も出なかったが、その喉は唸り如実に心内を表していた。

「お話したいことがあるので、二人きりにさせていただけませんか？」

お茶子さんに能力を解除され、足から床に降りる彼にそう告げる。

「焦凍くん、お母さんに会わせてくれる？」

お茶子さんは彼の手を取り、部屋から出て行く。

当初の予定通り、お母さんのメンタルケアをしに行つてくれるようだ。

「二人きりになったが…話とはなんだ？」

「僕とお茶子さんについてとあなた方轟家の未来についてのお話です」

「占いなら結構。そう言ったものに用はない」

話を中断して、立ち上がり退出しようとする彼を次の一言で引き止める。

「轟燈矢さん。あなたの第一子ですね…このままでは確実にヴィランになりますよ」

僕の横を通り過ぎて、部屋を出ようとする彼の足音が止まった。

「どう言う意味かね？」

「あなたは『茶毘』と言う言葉をご存知ですか？」

「ダビ…？語感から仏教用語に聞こえるが…どう言う意味かね？」

「インドに於る四葬の一つ、水葬・火葬・土葬・風葬の四つの内の火葬に当たり、『苦菜』に毘沙門天の『毘』を当てて『茶毘』と読みます。」



「将来的に彼が名乗るヴィラン名です」

「…貴様、何を言っている…?」

「正しく、自己紹介させていただきます。緑谷出久、25歳。ヒーロー名デクと申します。未来より還って来ました」

伸ばしに伸ばした本題に足先を突っ込んだ。

—————

「つまりは、そのオールフォーワンとやらを倒す際にオールマイトがやられてしまうと…その手助けをしろと言うのか…」

一通り話した。

未来の話、オールマイトとの協力体制の件。

最初は半信半疑だったが、僕の電話からオールマイトにかけ、そこから一言二言エントゥアールに対するフォローを入れてくれたので、信用していただけたようだ。

板張りの剣道場のような部屋の中央で楽に座りながら対面する僕ら。

エンデヴァーはやや濃いめの髭を撫でつけながら、考えをまとめているようだ。

「貴様の言うことを全て鵜呑みにするつもりはないが…燈矢のヤツがその茶毘と言うヴィランになって、将来焦凍の同級生を殺してしまうと言うのなら、その前にケアを

する…と言うわけなのだ…今は反抗期で家にも中々帰ってこない馬鹿者だが…話の席を用意するべきか…」

「二度ヴィラン化してしまえば、まともに戻るのに時間がかかります。それは精神的にも社会的にも同様です。なる前であれば、まだどうにでも出来るはず…なので、エンデヴァー。あなたの職務としてでなく、親としての姿勢が大切です。あなたのエゴなく接すれば、いずれ必ず答えてくれるはずです。それで聞くことが無くとも、根気よく続けてください。『言われる相手が誰なのか、何をしてくれた人なのか』これは高校生の時、焦凍くんから聞いた言葉です。今まで何もしてくれなかった親の言葉を聞くはずもないことを心してくださいね…?」

分かつとるわ、と言いながら頬杖を突く。

絵面的には子供に諭される拗ねた大人の図だ。

随分と子供らしい拗ね方をするもんだな…。

轟くんは落ち着いた天然さんだったけど、その性格は母親似だったのかな…?

「奥さんのこと…どう思っているんですか?」

「そ、そりゃあ、結婚しとるんだから、大切だと思ってるに決まっていよう…」

「個性目当ての個性婚ではない…そうですね?」

「当たり前だ、誰がそんなことを言った!」

未来の焦凍くんだよ、と言えれば……。

「……未来の焦凍くんですよ」

あ。

言うつもりなかったのに……口から出てしまった。

顔を顰めるエンデヴァー。

その怒りの矛先はどこに向けられようか……。

「今、奥さんは相当なストレスを溜めてるはずですよ。何せ、衝動とはいえ焦凍くんの左側憎しと煮え湯を浴びせるくらいですからね……。大事ならばもつと大切にしてください」

ぐうの音も出ないだろうと思ったが、辛うじて「ぐぬう……」と言う音は出たようだ。

「確かにこここのところ、怒鳴り付けてばかりだ……。自重するよう省みよう……」

バツが悪く感じてか、幾分か小さくなったように感じる。

「デクよ。この話はオールマイトのほかには何人居る？」

「僕の母とお茶子さんの両親には過去に戻ってきたこと、未来への根回しをすることを伝えてあります。将来的に起こる事象についてはオールマイトとその師のグラントリノ、そしてあなたにだけお話ししています。また、茶毘やあなたの家庭内問題についてはあなたにしかお話ししていません」

「うむ、承知した。拡散する際は出来るだけ相談してもらいたい。こちらでも把握して  
いなければ、もし漏洩した際は対処が遅れる」

「ええ、勿論です。そちらも同様にお願ひします」

そう言つて、差し出す右手。

今度は叩かれず、しつかりと掴まれた。

「未来で起こる問題の大元を叩くと。しかもそれがオールマイトに匹敵する大物だと

…。腕がなるわ…！」

ガツシリと握られた右手に力を込めるエンデヴァー。

顔周りで火の粉がいくらか散る。

じわじわと力が強くなる。

「え、エンデヴァー…？どうしてそんなに強く…？」

「…先程は簡単に伸されてしまったからな…少し意趣返しだ。甘んじて受けろ」

ギリギリと握りが強くなる中、パリツと光が迸る。

「あつ！貴様！それがお前の個性か!!」

「ええ、先程お話ししたオールマイトから継承した個性ですよ！僕を超えれば、オールマ

イト超えですよ！」

「くくく、なるほど面白い！表に出ろ！」

V S エンデヴァー2回戦。

…それは部屋に飛び込んできた女性に止められた。

「他所の子に手を挙げるなんて、何をしてるんですか!？」

S L A A A A A A A P !!!

情け容赦ない強烈な平手打ちがエンデヴァーの左頬に打ち込まれる。

僕はといえば、握ったままだった右手の力が一瞬で抜けたので、おもむろに離す。

姿勢もそのまま、急にエンデヴァーが殴られた事態に心も追いつかない状態で呆然としていた。

19. Adversity Builds Character  
(雨降つて地固まる)

「いつ?!いきなり何をする!!」

「もうあなたの言いなりになるのは辞めです!大切な焦凍や冬美、夏雄、燈矢だつて…あなたのオモチャじゃ無いんですよ?!それなのにあなたとききたら…義務だなんだと自分の都合ばかり…!!子供達にだつて自分の未来を選ぶ権利があるのよ?!親がそこに責任はあれど、義務を押し付ける権利なんて無いわ!!」

早口で捲し立てる白髪の女性。

エンデヴァアの上に跨り、左右交互に平手を打ちかます。

一撃一撃に腰が入っており、それらを受けて辛うじて、ガードが出来ている程度のエンデヴァア。

初撃から凡そ十発は食らっているが、未だに目を白黒させて、ただ漫然と攻撃を受けている。

「…ゴメン、デクくん。ちょっと煽り過ぎてもうた…」

足音を殺してそばまで来ていたお茶子さんが、顔の前を手刀を立てて謝罪している。

ああ、カウンセリングとやらが靦面だったわけだ。

「…何言つたの、お茶子さん？」

「いやあ、このままであなたも子供達も耐え切れず、家庭崩壊を招いてしまう…つて言うのを懇切丁寧に並び立てて説明してたら…思ったよりも冷さん溜めてたみたいで、結果がああに…」

…ああ、すごく納得だよ…。

「子供にも権利があるのを棚上げにして、自分のものの様に扱い、何でも『個性』『個性』『個性』つて!!!いい配分で現れた焦凍以外に見向きもしないで、何が親よ!?!ふざけないでよ!!」

「冷」

「その上、『最高傑作』ですつて!?!子供を望んで産んだのよ!?!せめて『作った』言うのは私よ…産んだどの子も私の『最高傑作』よ!!あなたの作品なんかじゃ無いわ!!」

「冷」

「そんな単純で大切なことも分からない人の言いなりになっていたなんて…思い返しても腹が立つわ。親権なんてあげない。全部私が貰う。実家に帰らせてもらうわ。離婚

よ!!」

「冷!!!」

今まで叫んでいた冷さんに代わりエンデヴァーが更なる大声で呼び止める。

「な…何よ…」

「麗日のお嬢さんに何を言われたか知らんが、俺も同じように緑谷くんの色々聞かされて間違っているのを自覚した…すまない」

落ち着き払った声で、冷さんに組み敷かれながら謝罪の意を述べるエンデヴァー。

それは相当に衝撃だった様で、冷さんはマウントポジションのまま目を見開いて固まっていた。

「冷よ。俺には体温調節という難がある。それを克服出来る焦凍は俺を超え得る逸材だ。期待している。故に行き過ぎ、結果他の子らを軽んじていた。ヒーローとしても人の親としても誤った行動だった…すまなかった…。本来であるならば、等しく、均等に愛を注ぐべきだったのだ…まだ間に合うか分からんが、そうなるべく俺も親として成長しようと思う…。だから、離婚は待ってくれ。俺を見ていてくれ」

そう言つて、冷さんの両手を取る。

そこで耐えきれなくなつたのか、冷さんは声を上げて泣き始め、身体を全てエンデヴァーに預ける。



その冷えた身体を熱く滾るその身で抱きしめ、ようやく動いたそのままに頭を撫でつけ始めた。

「結果オーライ…かな？」

「うん、そうだね…とりあえず、僕らは移動しようか…」

ぐすぐすと鼻をすすする音が響く中、僕らは気配も音も消して、そつと部屋から抜け出した。

「雨降って地固まる、つてヤツかな？」

「それにしてもドラマを見せつけられた気分だよ…」

ジャンルのには相当古いメロドラマの雰囲気だ。

完全に僕らのことを忘れられてたと思う。

まあ、いい方向に転がったし、良しとしようか。

そう結論付けて振り返れば、廊下の角に轟くんが白い髪の毛の側だけを出して覗き込んでいた。

「デク、お茶子…。母さん、大丈夫かな…？」

その目にはありありと心配の気配を浮かばせ、微かに潤んでいた。

僕とお茶子さんは顔を見合わせ、笑い合う。

「もう大丈夫だよ。お父さんと仲直りしたみたい」

「で、でも、母さんのあんなに怒った姿…初めて見た…」

「大丈夫。もしかしたら、焦凍くんの弟か妹が出来るかもしれないよ！」

お茶子さん、何言ってるの？

「弟か妹…？俺の!?!」

ああ…食いついちゃった…。

「それでは、本日は失礼します」

「ああ、またいつでも来なさい。今度は、個性ありで勝負しよう」

ガツシリと握手する僕ら。

サイズ感が違いすぎて、図らずも握り潰されてしまいそうで、やや怖い。

「デク、お茶子！またトランプやろう」

「うん、今度はウノとかも持つてくるから色んな遊びしようね！」

そう言つて手を振り合う轟くんとお茶子さん。

もう、絵面からして可愛らしい」

「デクくん、口に出てるよ？恥ずかしいからあんな大きな声で言わんといて？」

そう言われて自分の口を押さえるも既に遅く、お茶子さんの顔を見れば、分かりやすく朱が射していた。

「君たちは見た目だけ子供だが、そのやり取りを見ると新婚夫婦のままだな……」

苦笑いを浮かべながら、そう言うエンデヴァーに何一つ言い返せない。

「デクとお茶子はもう結婚してるのか……?」

キョトンとした顔のままそう言う轟くん。

まあ、確かに結婚しているけれど、それは未来の話だ。

「ちやうよー? いつか結婚しようね! つて約束してるだけだよ? なんて言うか知ってる?」

「え、と。えと。こん……こんやくしゃ、だっけ?」

「そう! 凄いやん、やっぱ頭いいんやね焦凍くん!」

お茶子さんに褒められて顔を赤くし縮こまる轟くん。

満面の笑みはやはり誰にでも効果のある劇毒だ。

お茶子さんが取られないように僕もしっかりしなきゃ……!

「あ、そうだ。一応来た時に冬美さんに菓子折りをお渡ししたんですが、中身が葛餅なのでお早めにお召し上がりください」

「何?! それを早く言わんか! 冬美! どこにいる!」

パツと踵を返し玄関に戻ろうとするエンデヴァーを冷さんが服を掴んで阻止する。

「あなた。せめてお見送りくらいしつかりしてください」

「こうしてる間に冬美が全部食ってしまう！早く俺たちの分を確保しなくては!!」  
そう弁明するも冷さんはどこ吹く風。

冷さんの個性で足を凍らされてまでいるのに碎いて進もうとしている。

「見送りはここままで結構です。また来る際はご連絡いたしますので。それでは」  
「それでは失礼します」

ペコリと二人合わせて頭を下げる。

その後踵を返して門に向けて歩き出せば、轟家の面々も家へと入っていくようだ。

「母さん、俺に弟か妹が出来るかもって言ってたけど、ホント？」

「なっ!?何を言っている、どっちに言われた!」

「お茶子」

「あらあら、それもいいかも知れないわね」

「…冷」

これ以上はプライベートだし、耳をシャットアウト。

門をくぐり抜けた先で、僕はお茶子さんを抱え、お茶子さんは個性で僕の重さを消した。

「行くよ、お茶子さん」

「うん」

誰もいないことを目視で確認してから僕らは、家へと向かって最短距離を走り出した。

—————

Side :???

今ありえないものを見た。

ここらで有名なNo. 2ヒーローの屋敷から出てきた子供。

見た目的には俺と同一年だ。

男の子が女の子を抱えるとピンク色の薄いモヤみたいなのが男の子を包み、その後緑色の稲妻が男の子の全身を包んだかと思うと、二人の姿が消え去った。

強風が吹き荒れ、2人のいたところへ走り見上げると、物凄いスピードで屋根伝いに飛んでいくのが見えた。

「すげえ…」

見上げたままポカンとしてしまっていた。

彼らの姿が見えなくなるまで見ていたが、それほどの時間は経っていないようだった。

「アイツらもヒーロー目指してるのかな…?」

凄い奴がいるって知った。

俺も頑張らなきや…。

「カモシレナイナ…同ジクライダシ、頑張ラナキヤダナ！」  
後ろに伸びた影にそう言われた。

「そうだな…相棒」

## 20. Red Riot (烈怒頼雄斗)

翌日。

僕らは多古場海浜公園に来ていた。

「こんな汚いんね…」

「僕が掃除した時はこれ以上だったよ…」

見渡す限りのゴミの浜。

砂よりも目に付くのは大小様々な流木やら不法投棄物など。

今より十年後に清掃した時は今は無い軽トラックなども放置されていたほどだ。

現在は大きくともまだ冷蔵庫程度で済んでいる。

それより小さくなると液晶が割れ、横倒しになった45インチのテレビくらいか。

「裸足で走れるくらいを目指して片付けよう」

「そっやね…：こんなんじゃ、マトモなトレーニングすら出来ないね…」

「と言うわけで…：お茶子さん。両手出して？」

うん？と疑問を顔に浮かべるも素直に両手を差し出すお茶子さん。

僕はその両手の中指に少し大きめの絆創膏をして指サックを付けた。

「大丈夫？ 緩くない？」

「キツくも無いし簡単にすつぽ抜けそうにも無いよ？ それでこれは何？」

「五指の肉球に触れたものの重さを無くすお茶子さんの個性を簡易にだけ封じたんだ。筋トレするんだし、負荷を掛けなくちゃ」

ニツコリと笑んで顔を見やると、お茶子さんの顔は分かりやすく青褪めた。

「ま、待つて、デクくん？ コレを個性無しでやるん？」

「そうだよ？ 僕も使わない。基礎筋力を鍛えるためにもゼロにしちやダメでしょう？」

筋トレするのにダンベルの重さをゼロにしちやあ、何のトレーニングにもならないじゃないか。

そう思っている僕の目の前で、青から白に変わった顔色でお茶子さんはその場で固まっていた。

「さあ、少しずつでも始めよう！」

そう言つて僕は手近にあった千切れたゴムタイヤを担ぎ上げた。

「…お、おー…」

数秒のラグがありながら、お茶子さんは片手を握り、天へと突き出した。

両肩にタイヤを抱えて、砂浜を仕切る防波堤の階段の手前まで駆ける。

帰りは軽いので出来るだけ早く。



行きは持てるだけ持って、重心等バランスを考えながら足元に気を付けて駆け足。

そうやって僕らは約二時間ほどで、ゴミの無い縦横5メートルほどの空間を作り上げた。

「はあ！はあ！……はあ……。もう、今日はムリ！……明日絶対筋肉痛や！」

「お疲れ様。僕ももう腕上がらないや」

そう言つて両手に持つてたペットボトルの水の内片方を差し出す。

「ありがと。でも、コレより酷いのを一人で……かつ十ヶ月で片付けろつてオールマイとも酷やなあ……」

両手をその水で洗い流し、残りを一気に？み下すお茶子さん。

傍から見てる僕は口の端から零れる雫に釘付けになり、襟首に消え行く水滴を見送つた。

不意に視線を外して、僕も同じように手を洗い流し、残りを口に含む。

「今、『雫がエロいなあ〜』つて思つたでしょ？」

飲み込む前に吹き出した。

僕は我慢出来ず、凄絶に咳き込んで口内のあらゆる水分を砂浜に撒き散らした。

「な、何を言つてるのかなあ!?そ、そそそそんなこと思つてないよ!」

僕は否定を込めて両手を、口が開いたままのペットボトルをも振り回し、その中身が

四方八方に散っていく。

「うそ。だって私もおんなじこと考えたもん」

はえ？

「デクくんも口の端から溢れてて、それが胸元に伝い落ちてたんだよ？ 気付いてないでしょ？」

そう言われて僕は乱暴に袖口で頬から口周りにかけて拭い取る。

確かに、頬から顎から喉元に向けて少し濡れていたようだ。

「ホント、考えること一緒、だね？」

砂浜に座り込んだままお茶子さんはこちらに笑顔を向けてきた。

「わっ!?!いつものブサイク顔！」

ブツ、と少しはしたない笑い方。

それでも彼女の笑みには力があつた。

「も、もう！休憩は終わり！次の訓練やるよ！」

僕にはそんな照れ隠ししか出来なかつた。

「えー、全然休めてへんよー。もうちよつと休憩しよーよー」

両手を振り上げ、そのまま後ろに倒れ込むことで抗議を示すお茶子さん。  
そんな仕草にクスリと来た。

「もう……もうちよつとだけだよ」

「うん」

少し肌寒くなってきた潮風に火照った体を委ねて、僕らは砂浜に並んで横になった。  
横になって……目を閉じて……しばらく。

危うく寝てしまいそうなほど心地よい空間に雑音が混じる。

ざりつ……ざりつ……と砂を噛む音。

僕は体を起こしてその音源を辿ると

「あれ？君は……？」

「なあ、何でこんなゴミだらけの浜辺で寝てんだ？家出？」

鼻頭に絆創膏を貼った如何にも「ヤンチャ坊主」な男の子が一人立っていた。

髪色は暗めな茶色。

親譲りか開く口にはギザツ歯が見え隠れしていた。

その面影に見覚えがある。

だが、彼のイメージとは大分違う気もする。

「僕、緑谷。」

「私は麗日ー。君はー？」

寝転がったまま顔を向けて、そう問うお茶子さん。

秋も深まり、涼しい気候だがタンクトップにハーフパンツの出で立ちの男の子は特撮のヒーローのように格好付けて自己紹介を始める。

「おれは切島！友達はエイちゃんとかって呼ぶぜ！」

ギザツ歯を噛み合わせて、笑んだその顔はかつての級友の笑顔のままだった。

少し潤みそうになる涙腺を必死に押し殺し、震える声を抑えるだけで精一杯だった。

「それじゃ、私もエイちゃんって呼んでいいー？」

「おー、良いぞうららかー。んでお前らここで何してたんだ？」

円らかな瞳に疑問を浮かべて、再度僕らに問う切島くん。

「僕はデクって呼んで。僕らここを綺麗にして特訓場にしようとしてるんだ」

「特訓場！カツケエー！なあなあ！おれも混ぜてくれよ！」

ものすごい勢いで距離を詰められた。

近い、そして近い！

「う、うん。二人だけの特訓場にするつもりはなかったから大歓迎だよ」

「おお！二人はヒーロー目指してんのか？だから、掃除して綺麗にしようとしてるのか！おれね！ヒーローならクリムゾンライオットが一番好きだ！なんだって後ろに引か

ないカツコいい男だぜ！おれもああい漢になりたいつて前からずつと…」

お、おう…子供のテンションつてこんな感じだったっけ…？

と言うか僕がヒーロー談義してる時つてこんな感じなのかな…改めないとかつちやんがまた怒る…。

捲し立てる切島くんにたじたじな僕。

そんな姿を傍から見て、また吹き出すように笑い出すお茶子さん。

「ぶっふっ！デクくんがたじたじや!!」

お腹を抱えて文字通り転げ回るお茶子さん。

笑われるのは良いけど、流石にそれははしたないよ…？

ほら、切島くんがポカンとしてるからそろそろやめて、ほら立つて。

「麗日とデクは仲が良いんだな！」

「んっふー！フィアンセだからね！」

そう言つて胸を張るお茶子さん。

控えめに言つてクソ可愛い…！

「ふいあんせ…つてなんだ？友達より上の親友みたいなやつか？」

そう言われるや否や文字通りズッコケるお茶子さん。

いや、そんな芸人根性出さなくていいよ？

と言うか、そうか。

地頭がいいかつちやんと轟くんとしか同年代の子たちと会ってないから分かってなかった。

通常の四歳児は知らない：知っている方がマイノリティなんだ。

つくづく思う。

幼い頃からかつちやんって凄かったんだな…。

「婚約者、ならわかる？」

「それなら分かるぜ！将来結婚して父さんと母さんになる、だろ？」

立ち上がって、同じ目線で切島くと話すお茶子さん。

精神年齢を抜きにしてもお姉さんっぽい…。

「…ん？ふいあんせって婚約者の事なのか？ってことはデクと麗日は結婚するのか？」

「そーやよー？大人になったら一緒にならーね！って約束しとるんよ！」

再度、腰に手を当て胸を張る。

切島くんの目の彩度が爆上がりした。

「おおおおおお！：そうなのか！おめでどう！ん？おめでどうでいいのか？いや、嬉しい

ことだもん！：おめでどう！」

脇を締めて拳を握り、そう言う切島くん。

その身体に力を込めて喜びを露わにするその様は小さくなっても変わってなかった。

## 21. Faceless (無貌)

Side: Sir Nighteye

「さて、それでは会議を始める」

総勢20名にも及ぶプロヒーローとそのサイドキックたちだ。

いずれも一線級の技量を持ち合わせ、その力量も折り紙つき。

そんな彼らが一堂に会するはマイトタワー6階多目的会議場。

私はその彼らに向かう形で上座に座している。

「司会進行は私、オールマイトのサイドキックを務めるサー・ナイトアイです。よろしく

お願いします」

起立し一同に頭を下げる。

小さく返礼があり、それが無くとも皆黙礼で返してくれている。

「さて、本日お集まりいただいたのは、事前の連絡の通り、将来的な危険因子の排除が目的です。お手元にお配りしております全30部に渡る資料は将来的にヴィランとなりうる者たちの個性と大まかな犯行場所を記録した資料となります。それらの資料は部外秘となりますので、お取り扱いには十分にお気をつけください」



机に着くなり、大前提の項目を並び立てる。

一斉にその資料を皆めくり、中身を大雑把にだが、確認する。

「一つ質問いいか？」

全身にチエーンを纏った男がジャラリと音を鳴らしながら右手を挙げた。

どうぞ、と意味を込めて片手を差し出すとその場で立ち上がり、続ける。

「ここ二十年近く先のデータが纏められているが、これらの資料は何だ？何故ここまでデータを集めることが出来ている？例えばヴィラン名、血狂いマスキュラー、町尾拳、『個性：筋力増強』殺人9件未遂18件『予定』とはなんだ？何故、まだ起きてもないことが書かれている？」

その通り。

この資料は全て『未来』に起こる事象を纏めたものだ。

その質問は最もなものだ。

「そちらについては私から説明させていたどころ」

そう言つて立ち上がるのは、No. 1ヒーロー。

フォーマルなスーツで会議に臨んだオールマイトは私の隣から声を上げる。

「えー。まずいつもの挨拶としてだが、今回の目的を合わせて【私が協力を求めに来た】と言うことで今回の会議の主目的にあたる本資料の作成に至った概要を大まかに説明

させていただく。まず、隣にいる私のサイドキック、サー・ナイトアイの個性はご存知『予知』だ。しかし、彼は二十四時間につき一人の未来しか見れない。今回彼にお願したのはその人物の追跡、未来予知を通じて大元の資料の検分を行ってもらった。

大元の資料の作成者は彼より確度の高い予知能力を持っているが、本人の意向で匿名とさせていただく。ヒーローでは無い為、個性の無断使用に関しては既にお説教済みなので、今後その作成者を追及するのは控えていただくようお願いする。」

事前に緑谷出久には会っている。

オールマイトに聞いた話だけでは眉唾物だったが、実際に会って、『個性』を見せてもらい、そして『個性』を使った結果、真実だと認めざるを得ない状態であった。

アレが生まれた時からほんの数年の間に完成したとすればそれは事だ。

有り得ない。

故に認めるしかなかった。

”時間遡行”の話。

「さて、本資料について、極めて確度の高い”犯罪予報”の資料となるので、これによって個人を”先制攻撃”するのはヒーローとしての行いではないので、辞めてくれよな。このまま何もしなくてはヴィランになってしまう者たちばかりなので、先回りして救出しようと言うのが、今回の会議の主目的となる。そのためには私の2本の腕と足では足

りないのでね：是非とも皆に協力していただきたい。よろしくお願いする!!」

ヴィランになってしまふ者は簡単に分けて2種類いる。

精神的によるものか、環境的によるものかだ。

環境的なものならば、環境そのものを変えてしまえば良い。

ただし、精神的なものは悪質になりやすく、極めて厄介だ。

そう言ったものにも救いの手を差し伸べると言うのは、余りにも無理な話。

救えるならば救うが、そうでなければ最小被害で抑えるために即座に捕縛する。

そうし得る為の協力体制をこの場で築き上げたいのだ。

「事情は承知した。私はこの資料をもとに全面的に協力しよう」

「俺もだ。将来の不安の芽を摘むことが出来るのであれば、それほど良いことはない」

参加してくれていたN.O. 3のベストジーニストとN.O. 2のエンデヴァーが賛同を示してくれた。

元よりこの二人には緑谷出久から直々に説明をしていると事前に聞いているので驚くことも喜ぶこともない。

トップ中のトップの賛同を得たと思えば、その他のヒーロー達は己のサイドキックと何事かを話している。

「こんな眉唾資料じゃ協力してやれねーよ。実例をくれよ。この資料の中ですぐにでも

現れる都合のいいヴィラン候補はいないのかよ？」

突如声を上げたかと思うと乱雑にその持つていた資料を机の上に投げ捨てる。

後ろでサイドキックが慌てふためいているぞ？

単独行動か？

「気に入らないのならば、おかえりいただいて結構。ちなみにこれは国とも話が付いていることだ。既に保護したヴィラン化予定の女の子もいる。親からのネグレクトもあり、保護施設で問題なく保護・教育が出来ている。」

「へえ。そんな女の子がいるのか。名前は？個性は？予定の事件件数は？」

「未成年なので控えさせていただく。個性は『変身』 予定事件件数は……」

「認知している件数だけで殺人390件超。内プロヒーローの被害が50件以上。組織内部から破壊工作、暗殺行動による疑心暗鬼を誘う超級ヴィランだ。通称“無<sup>フェイスレス</sup>貌”。将来的に組織されるヴィラン連合の初期メンバーで最年少の殺戮者だ。」

Side:Katsuki Bakugou

「こんにちはあ…トガです」

「なんだテメエは」

「トガです。ボロボロですね…大丈夫ですか？」

師匠にボコボコにやられた俺は休憩を言い渡され、倒されたままに空を見ていると逆さまな頭が俺を見下ろしていた。

「見んな、クソが」

その後も怪我した膝が痛そうですね、とか血が出てますよ？とかいちいち話しかけてきやがる。

少しでも体を休めたい俺は、完全に無視を決め込むことにした。

目を瞑り、全身の力を抜く。

ザリザリと靴の裏が土を削る音が聴こえて少しずつ遠退くのを感じた。

やっと諦めたか…と思った次の瞬間。

れろん。

経験のない不快感が膝を襲う。

腹筋を使ってパツと飛び起きるときっきの女が俺の膝を舐めてやがった。

BOOOOOMM!!

「何してやがる!？」

俺は両手から爆炎を吹き出して、その女を吹き飛ばした。

「あいつたあ!?!せつかく人が好意で傷口綺麗にしてあげてたのに何するんですか!?!」

「うるっせえ!!頼んでねーわ、イカレ女!!」

「イカレ女とは言ってくれますね!?!個性が爆発してるせいで頭の中身も爆発してるんじゃないんですか!?!」

「つーか、転がされて土付いてんに汚ねえだろ、舐めんじやねえ!!」

「怪我が悪化するかもしれないでしょう!?!だから、とりあえず舐めて綺麗にですね…」

「だからって、お前は土を食うのか!!やっぱりイカレ女じゃねえか!!」

「トガです!!イカレ女って呼ばないでください!!もしもそう呼ぶなら…爆発…そうあなたなんて爆発さん太郎です!!」

「誰が爆発さん太郎ダアアアアアア!?!」

BOOOOOOMMMBOOOOOOMMM!!

俺の両手は許容限界を物ともせず爆裂し、その言い合いは師匠と師匠が連れてきたデクとあの女が来るまで延々と続いた。

…徐々にエスカレートしながら…。

「このイカレ女があああ!!」

「爆発さん太郎おお!!」

最初はおれが頭や肩を殴ったり引つ叩いたりする一方だったのに、少しづつ避けられ、今や個性を使って移動しながらでなければ、上手く当てられないし、避けられない。

「クソクソクソ…クソがあああ!!」

「辞めんかバカ共!!!」

そうこうしてるうちに師匠の靴の裏を舐めさせられ、そのまま昏倒する羽目になった。

## 22. Peaceful act (平穩な一幕)

Side: Katsuki Bakugou

「……ハッ!？」

目を覚まして、自分の状況をすぐに考えた。

確か師匠に転がされた後…頭のイカれたの金髪女と悪口が原因で喧嘩して…それから…

「そうだ! 確かデクと肉球女が…!？」

「誰が肉球女よ」

いつも使わされてるベッドの脇に座りながら何か難しい本を読んでいる肉球女が居た。

「麗日お茶子やって何万回言わすん? そんなんだから、ひーちゃんに『頭の中身爆発さん太郎』って呼ばれるんよ?…ぶふっ! ダメだ…笑いが堪えきれん…」

口元を押さえながらくつくつと喉の奥で笑う肉球女…もとい、麗日。

寝かされて落ち着いていた気分が台無しだ。



思い返したのも、今言われて再燃したのも合わせて、さつきよりも遥かに怒りが燃え上がる。

「……っんの野郎!!」

Boooooom!!

両手で爆ぜ、体を反動で吹き飛ばし、麗日に飛び掛かる。

が。

「多少速なつたけど、まだ遅いよ? 後直線的だし、いつもの大振り……治ってへんね?」  
起き上がって勢いに任せた右の大振りに左の手刀を合わされる。

そのまま手首を掴まれ、グルリと部屋の中を大きく一周。

頭からベツドに叩き込まれた。

立たすことすら出来なかった。

「つか、本から目を離しすらしねえ……」

「くっそ……重力無くすとか反則だろ……!!」

「それが私の個性やもん。私から言わせれば爆発だつて十分反則やと思うよ?」

ぐぬぬぬ……と唸ることしかできない。

姿勢を逆さまから戻り、いつでも飛び掛かれるように四つ足で構える。

そんな俺を見て、麗日は一瞬目を見開くと、すぐに細めた。

「へえ…さすがグラントリノ…やっぱそう言う構えになるんね…」

よく分からないけど、なんか感心されたらしい。

パタンと厚い本を閉じて立ち上がる麗日。

その後ろ姿に声をかける。

「おい、てめえ！まだ話は…」

「今何時やと思つとるん？もうご飯の時間だよ？」

ぐう…と言葉を聞いたせいとか、腹の虫が悲鳴を上げた。

パツと腹を抑えると意地の悪い笑顔を浮かべた麗日はそのまま出て行く。

扉が一度閉まりかけたところで再び開き顔を覗かせた麗日は一言。

「可愛いお腹の虫やね」

「てめっ!？」

怒りをぶつける前に扉が閉ざされ、そのまま足音が遠ざかっていく。

やり場のない怒りに震える俺は歯軋り。

やっぱりアイツ、嫌いだ!!

—————

「出久ー。そろそろ用意しちゃってー？」

「あ、はい。今行くよ、母さん」

グラントリノの家にお邪魔している僕らは先日保護に成功したと言う渡我被身子と顔合わせのために訪れている。

まだ無垢な彼女をヴィランにしてしまわぬように教育してもらおうつもりだ。

出来れば、一緒に学び僕らの味方であつてもらいたい。

敵であればどれほど厄介かは既に身に染みている。

「トガちゃん、ご飯の準備してくるね？」

まだ幼い彼女に合わせて、二人でトランプを使って七並べをしていたが、一時中断。

えー？と少しごねられたが、お腹が空いているのは彼女も同じなのですぐに素直に応じてくれた。

「爆豪くん起きたよー。あ、インコさん、私も手伝います」

階段を降りてきたお茶子さんがそう告げる。

母さんはそれに応じ、お茶子さんは手を洗いに向かっていった。

「うーん、低い身長が惜しまれる…：どうにか早く成長出来ないものかなあ…？」

食器類一つ取るにしても台が必要。

ここは家ではないのでいつも使っている踏み台がなく、母さんに取ってもらう他なかった。

「はい、お願いね。転ばないですよ？」

「もう母さんったら。確かに見た目は子供だけど、このくらい平気だよ」

6人分の食器を持ち、軽々運ぶ。

手が小さいため、持ちにくいがいい加減慣れてきた。

「おお、奥さん。悪いねえ。誰かの手料理なんざいつぶりか分からんな」

風呂上がりのグラントリノ、いつものドミノマスクすらないスツピンに簡素なジャー  
ジ姿だ。

冷蔵庫に飛び付き、個性を使いながら中からビールを取り出して、蹴りで閉めた。

「工藤さん、それは流石に行儀が悪すぎますよ」

「ワシの家だ。このくらい勝手にさせてくれい」

呵々、と笑うグラントリノ。

未来では知らなかったが、本名は工藤空彦さん。

あの小さかった体躯よりはまだ高く、140cmくらいか？

未来の姿でも、今の僕より大きいけど。

「…身長を早く大きくするにはどうしたらいいかな…？昔に流行ったぶら下がり健康器  
みたいに背骨を伸ばす方向で負荷を掛けるのはどうだろう…？そのついでにチンニン  
グ…所謂、懸垂をして筋力の増強を図るのもいいな…よし、少しずつ回数と時間を増や

していこう。休養日にはぶら下がるだけでもして、少しでも早く大きく…「出久、ブツはやめなさいって何回言えばいいの?」…はい、母さん…!」  
怒られた。

いや、直したいっていったのは僕だから何も反論出来ない。

「デクくんのブツブツは最早癒しだわあ…」

「…ケツ。ウルセエだけだろ…」

「あ、かつちゃん。二ヶ月ぶり」

後ろから声が掛かったので、振り向けば薄手のスウェット姿のかつちゃんと、短パンとロングのTシャツ姿のお茶子さんが並んで部屋に戻ってきた。

その後ろには一緒に手を洗ってきただろうトガちゃんもいる。

「ごっはん!ごっはん!」

八重歯を見せながら、下手なスキップをして食卓に向かうトガちゃん。

幼い姿と挙動だけを見てると未来の姿には到底結び付かない。

「さあ、席について。今日は簡単にカレーにしたからみんな好きなだけ食べてね?」

そう言いながら食卓に鍋を持ってくる。

キッチンがやや離れているので、合理的にそうしたのでろう。

ここは田舎なためか部屋の作りが全体的に大きい。

「カレー！いずくの母ちゃんのカレーはめっちゃうまいから好きだ!!」  
満面の不機嫌面がパツと華やぐ。

昔からかつちゃんやウチのカレーが好きだったっけ？

「工藤さんはキッチンと野菜食べてからにして下さいね」

「野菜なんて、いつも食わんからなんか新鮮じゃな」

家主のグラントリノの分を先に取り分け、全員分のカレーを皿に盛る。

お茶子さんは脇で炊飯器からご飯を盛って母さんに手渡していた。

香辛料が香るカレーがみんなの分行き渡るとグラントリノは持っていた缶ビールを飲み干し、脇に置いた。

「それじゃあ、いただくとしよう」

「「「「いただきます!」」」」

各々箸やらスプーンやらを手に取り、並ぶ料理に舌鼓を打つ。

ガツガツと熱いにも関わらず、掻き込むように食べるかつちゃん。

美味しいねー?とお互いに口に運びながら笑い合うお茶子さんとトガちゃん。

真つ先に野菜を食べ終え、福神漬けを充てに新たに取ってきた缶ビールを飲むグラントリノ。

全員を笑いながら見渡す母さん。

ふと、同じくみんなを見ていた僕と母さんの目が合った。

「どう? 美味しい?」

「うん。いつも通り美味しいよ」

やり直す以前は友人と家族で食卓を囲む機会は幼い頃にかつちやんとしか無かったため、凄く新鮮に感じた。

未来では敵同士だった彼女らが笑い合っているのも、いつからかギクシヤクしていた彼とも以前と違う形で付き合えているのも、柱の中の柱となれと言葉を遺した師匠とまた食事出来ているのも。

その全ては奇跡やり直しがあつたからだ。

これらを守るために：僕は：僕らは出来る限りの全力を尽くそう。

そう考えていたら、正面に座っているお茶子さんと目が合った。

何を考えているのか、全てお見通しのように、そのまま薄く微笑んでくれた。

僕もその笑みに笑みで返す。

そうやって食事を続けていると、バンツと観音開きの扉が開け放たれる。

「HHHHHHH!!! 爆豪少年!! 渡我少女!! 遅ればせながら私が来た!!! つて、アレ? 緑谷少年に麗日少女まで?」

「オールマイト! スーツ姿もカッコエ!!」

食卓の椅子の上に立ち上がるかっちゃん。  
トガちゃんはスプーンを取り落とし、扉を見たまま固まっていた。



## 23. Limited license (限定免許)

「お、お、お…オールマイト!? え、本物!? ですか!？」

数秒前のフリーズから解消され、かつちゃんと同じく椅子の上に立ち上がるトガちゃん。

「ヒーちゃんあかんよー? どつかの爆発さん太郎みたいなお行儀の悪い子にはサンタさん来ないよー?」

そんなトガちゃんの隣に座るお茶子さんがさかさず戒めに入る。

立ち上がった勢いと同じように、すぐにお尻から座面に着地した。

「爆発さん太郎って誰のことだ!？」

「そうやって反応するつちゅーことは、自分でそうだと認めてるようなもんやと思うけどなー?」

そう言いながら、意地悪い笑みを浮かべかつちゃんに目配せするお茶子さん。

あんまり見せないその姿に少しドキリとするが、ゆつくりと呼吸することで事なきを得る。

高校時代もヒーロー時も朗らかな笑みばかりが印象に残っているので、そんな表情も

出来たのかと改めて驚いた。

そう言う言い方をする事で子供自らに考えて学ばせるのは合理的だ。それなら今後誰かを教育する際はこう言う方法も一種の手段として：「出久、口に出てる」：ハッ!?」

口の前で止まっていたカレーをそのまま収める事で、言葉ごと飲み込んだ。  
癖というものは中々に難儀なものだ。

「H A H A H A H A!!そう！：本物のオールマイトさ、渡我少女!!何を隠そう、この私の第二の師匠の家だからね！仕事明けにトレーニングにも来るのさ！」

H A H A H A H A!とアメリカな笑いを上げるオールマイト。

その姿を見ながら、固まっているトガちゃんはお茶子さんに新しく用意してもらったスプーンを握らされながら、食事そっちのけで見ている。

僕も同じ立場なら同じ行動を取っていただろう。

いや、もっと酷い対応をしていたに違いない。

食事を投げ出して、サインを求め、溢れる行動力のままに行動し、全霊を持って突撃していただろう。

そう考えると僕も大人になったものだ：とそこまで考えた。

トガちゃんに何事かを耳打ちし、意識をカレーに再度向かわせたお茶子さんがこちらを見る。

「デクくん、楽しそうやね？」

そう僕に問いかけてきた。

「そりやあもう。仲のいい人たちとご飯が食べれるんだもの。楽しいよ」

そう答えれば、一層笑みを深めて返してくれた。

「よおし、いづく!! ご飯食べ終わったら勝負だ!! あの頃とは違うから覚悟しとけ!!」

先程お茶子さんに押揃われてから黙々とカレーを掻き込んでいたかつちゃんのスプーンをこちらに向けて宣戦布告してくる。

「それは行儀が悪いよかつちゃん？」

ニツコリと笑んで返してやれば、喉に詰まったなような音を出した後、再度食事にガツつき始めた。

「おっと、申し訳ないが爆豪少年。食事の後は緑谷少年と麗日少女への用事を優先させてくれないかな？ 私はトレーニングをしに来たからね。早めに済ませておきたい」

そうオールマイイトがお願いすれば、二つ返事で了承するかつちゃん。

僕らへの用事って何かな？

…まさか、アジト襲撃の予定とか？

「以前、打診のあった件、結果が出たからそれを伝えるよ。それに後でサーも来るから」  
打診…？

ああ、《アレ》のことか。

「分かりました。二階の応接室で良いですかね？」

「勿論だ。なあに、数分で済む。悪いが辛抱してくれ、爆豪少年」

何も乗っていないスプーンを噛んでいるかっちゃんに両手を合わせ、軽く頭を下げるオールマイト。

相変わらず見た目にそぐわず、可愛い仕草の人だなあ。

「オールマイト！後で私にサインください！大ファンなんです！」

速攻で食事を片付けたトガちゃんがテーブルをそのままに立ち上がり、オールマイトへ駆け寄る。

突撃されるオールマイトはその脇に手を差し込み、持ち上げ、自らの肩に担ぎ上げた。

「元気なのは良いことだ！H H H H H A！サインは勿論さ！まだ緑谷少年も麗日少女も食事中的ようだから、少しお相手しようじゃないか、レディ！」

わーわー、きゃーきゃーと子供ながらの甲高い声で喚きながら、オールマイトに遊んでもらっている。

昔の自分が見たらものすごく羨ましい状況だなあ、と微笑みながら最後の一口を口に  
する。

—————

「お待たせしました、何分高速道路が渋滞してあります」

「気にするな、サー。細やかな連絡をしてくれていたし問題ないさ」

三人掛けのソファに座る僕とお茶子さん。

奥のデスクにグラントリノ。

一人掛けには各々オールマイトとサーが腰を掛けた。

「緑谷出久。麗日お茶子。以前話していた”ヒーロー活動認可資格免許”の件だが、いくら能力があろうと認めることはできない、と国から回答があった」

膝の上で結んだ拳に力が入る。

ふと、横を覗き込めばお茶子さんは唇を噛み締めていた。

「従来、年一度の資格試験にて仮免許を交付されるものだが、その試験は早くとも高校生で受けるのが一般的であった。それすらもないのに、どうやって認可資格を渡せば良い、と言うのが国からの見解だな」

分かっていった。

簡単にそんなものが手に入るはずもない。

ならば、無許可のまま、ただの一度だけを見逃してくれ、と言うのも問題になってしまおうであろう。

どうするべきか、と僕の脳内に幾重にも考えが広がっていく。

「とこまでが表向きの筋書きだな」

え、と力が入っていた全身が弛緩した。

「あくまでも法律に則った形式的なもので考えればそうする他ないが、今回法律を動かすと言う荒技でその括りを捻じ曲げると言う判断をしていたたく運びとなった」

バツとお茶子さんと顔を合わせる。

それってつまり…。

「一度きりの特例とも行かないだろうからな。手順さえ踏めばどのようにも使うことが出来る制度を作ることとした。”限定的ヒーロー活動認可資格”と言う新制度。コレは現職プロヒーローの五人に認証されて初めて国より認可が下りる、謂わば”ヒーローの推薦制度”のようなものだ。敢えてコレに年齢の制限を付けないことで君らの活動が可能となるようにしていただく方針だ。その認証した五人の下でのみヒーロー活動を可能とする仮免よりも縛りは厳しいが、非合法よりは問題が少ない。既に根回しは済んでいるので、可決を得られればすぐにでも発行してもらおう手筈となっている。コレで合法的にオールマイトの手助けを可能とする」

「と言うわけだ。少年少女。話の都合上、驚かせたみたいだが悪いね。サーも人が悪い。

先に結論から述べてやればよかったじゃないか！」

「あくまで順序立てて説明したに過ぎません。結果は問題ないでしょう？」

カチャリとメガネのツルを押し上げるサー。

その鉄面皮にわずかに笑みの色が滲んでいるような気がした。

「わざわざ対応していただきありがとうございます！」

「僕からも、ありがとうございます。……ちなみにつかぬことをお聞きしますが、その五人と言うのは誰でしょうか？ オールマイトとサー、エンデヴァーとベストジーニストなのは分かりますが……」

「おいおい、俺を勘定に入れてねーじゃねえか！」

そう奥の席から声が掛かる。

「グラントリノ!? え、それじゃあこの話は元々ご存知だったんですか!？」

「当たり前よお？ 結論が出るまで黙っとけって言うから黙っておっただけじゃ」

呵々、と沈めたデスクチェアで腹を抱える。

参った、ドツキリにハメられた気分だ！

「そう言うわけで緑谷少年、麗日少女。改めて協力お願いするよ！」

「はい！」

僕とお茶子さんは声を合わせて、返答を返した。

コレで奴を合法的に叩くことが出来る。

未来に於いても一度として拳を交えることはなかったが、悪の大將を叩くチャンス：未来で殺された幾人もの人々の敵討ちのチャンスであると、先ほどとは違う意味を込めて両の拳を握り締めた。



24. VS Childhood Friend (V  
S幼馴染)

翌日。

本来ならば麗日家へ向けて出発する予定であった今日。

昨日、僕らが話し合いをしているうちに疲れていたのかりピングで爆睡していたかつちやんとトガちゃんの要望によりもう一日お世話になることとした。

オールマイトと遊んでもらうなり、サインを貰うなりするつもりだったトガちゃんは明るくなった外を見て絶望した顔をしていたが、貰っておいたサインで一応大泣きするところを免れた。

が、沈んだ表情で床を眺める姿はやはりオールマイトに遊んでもらいたかつたのだらう。

その様子を写真に収め、オールマイトへ送ると今夜も何事も無ければ来れるとのことなのでそれを伝えれば陽を浴びた向日葵の如く明るい笑顔が咲いた。

…この笑顔のために必ず来てください、オールマイト…。

「…デクくん…浮気せんよね…?」

「しないよ……お茶子さんに呆れられないように頑張らなきゃいけないんだからそんな暇ないよっ。」

そう振り返りながら話し掛ければ、顔を背けられ、ブツブツと何事かを呟いていた。辛うじて拾えた単語は『惚れた弱み』とかなんとか。

「いづく！もう準備出来たか!?!昨日出来なかつたから、これからやるぞ！師匠にも許してもらつてるから裏行くぞ！」

バンツと勢いを付けて開かれた扉から顔だけ覗かせたかつちゃんはそれだけを捲し立てると足音を消した走りそのまま階下へと駆けて行く。

「はは……本当に元氣やね、爆豪くん……。昨日あんなにボロボロだったのに、一晩寝たらケロっとしちやつてさ」

「まあ……子供だし回復力もあるんだよ、きつと。筋肉痛とかまだ無縁そうだし」

ダイニングの椅子から飛び降りると扉の方へと向かう僕。

「でく、あたしも行っていいーい？」

その後ろから声を掛けてきたのは、今の今までお茶子さんとお人形遊びに興じていたトガちゃんだ。

今まで持っていたウサギさんの耳を片手にぶら下げ、引き摺ったままこちらへ掛けてくる。

「え？別に良いけど、模擬戦闘だから見ても面白くないんじゃない？」

「爆発さん太郎がボコボコにやられるところが見たいです！」

そう言つてキラキラしたお目々をこちらに向けてくる。

何かのビームが発せられているような気がするが、気のせいだろう。

「私も見たいし、一緒に行くよ！何かあれば私が助けられるしね！」

そう言つてクマさんを抱き抱えたお茶子さんはトガちゃんの隣に並び立つ。

二人セットで並ぶと天使度が増す気がして、心臓が跳ねたが顔に出さないよう尽力した。

…お茶子さんの顔が微妙に笑んだからバレバレかも知れない…。

「そ、それじゃあ、一緒に行こうか！」

「うん（はい）！」

言及されなかったし、これで誤魔化せたと思つておく。

—————

「やつと来たな、いづく！今日と言う今日は絶対一本取つてやるからな!!」

ビシッと音の出そうなほど勢いを付けて指を差すかつちゃん。

そうしてから、構えるそのポーズは以前の両手を見せ付けるような構えでなく、拳を握らないボクシングスタイルのようだ。

相対する僕は、手技への牽制のために、右を前に出すような半身を取り、右手を平手で構える。

「両者準備良いか。勝己は出久の体勢を崩せば勝ち。出久は5分耐え切れれば勝ちとする。なお、出久は守りのみ、且つ個性の使用を禁ずる。それでは、始め!!」

グラントリノの号令を皮切りにかつちゃんも個性を使わずに真っ直ぐ駆けてきた。

立ち合いの距離は凡そ3 m程だったが、それを数秒で食い潰した。

思いの外早い。

僕は個性を警戒して、振りかざされた右をケアするために直角方向へサイドステップ。

元の位置へと飛び込んできたかつちゃんとすれ違いざまに右足を軸に180度反転。

かつちゃんの真後ろを取ったところで右を振ったがために後ろへ回った左手を極めながら回転した勢いのまま足を払う。

走ってきた勢いがそのまま載っており、急に軸が無くなったため、空中へと回転しながら飛び出していくかつちゃん。

いつもなら、これで一本。

立ち上がるまで残心を保つ僕だが…。

二ヶ月の修行は伊達ではなかったらしい。

空中での制御を諦め、かっちゃん片手で地面に接触。

その手を爆ぜた勢いを載せて高く跳躍。

空中で上下を反転させ、綺麗に足から着地した。

僕は思わずほお、と声が漏れ、目を大きく見開いていた。

最初の立ち合いよりやや開いた距離で相對するも刹那の後には直ぐにまた詰めてくる。

両手を使つて身体を押し出す、高校時代に名付けられた、曰く『爆速ターボ』で先程より速度の載つた攻撃をするようだ。

コレは選択肢が狭まる、ある種の悪手ではあるが、速度を生かすヒットアンドアウェイの戦法であれば十分に効果的である。

爆速ターボを続けながら、急加速した飛び蹴りを顔面目掛けて行ってくる。

顔面狙いなのはバレバレ過ぎて、避けるのも受けるのも思いのままだ。

右手の届く範囲に入った瞬間に手の甲を使つて彼の身体を接触する範囲から弾き出した。

「チイツ!!これもダメか!?!なら、これならどうだ!!」

直ぐ様反転し、片手だけの爆速ターボ。

回転を使つて後ろ回し蹴りの様相になるものの、スウエーの要領で回避。

その後、回転の勢いのまま左手が顔面を襲うも、それを右手で捕まえ回すように上げる。

空いた左手で吊り上げた彼の腕の付け根を押しやれば、ストーンと座り込むように身体が下へと崩れる。

「ほら、これで一本。でも、勝利条件は違うからね。まだ、時間はあるよ、かつちゃん」  
そう言うのと奥歯を噛み締め、その奥から唸り声が漏れ出す。

「クソ!! まだまだあ!!」

闇雲に発せられた爆破を読んで、飛び退くとかつちゃんは、すぐに立ち上がる。

と思ったらしやがみ込んだ?

「まだ完成してねえが関係ねえ!! 全力で行くぞ!!」

そう言うのと両足とも靴を脱ぎ捨て、履いていた靴下までも脱ぎ捨てた。

一体何を…?

そうしてから、かつちゃんはクラウチングスタート…いや、どちらかと言えば肉食獣の…虎やライオンを想起させる構えを取る。

…まさか!?

「…ふふ…やっぱリグラントリノに預けて正解だ…!!」

「行くぞ、いづく!!」

そう言うや否や、盛大な爆音を奏で僕へ向かってくるかつちゃん。

ミサイルの如く、真つ直ぐ向かってくるも、直前に左を爆発させ、飛び込む速度に切り揉み回転を付属させる。

そのまま、大振りの右を放つ彼の技は高校一年生の体育祭でお目見えしたかの必殺技を思い出させる。

「…もう(っ)まで来たか…!!」

しかし、僕もタダではやられない。

飛び込みに合わせ、僕も間合いを詰める。

詰める勢いに任せて、かつちゃんに背を向け、右腕を脇の下を通すように上げる。

「ぐっ?!…ぬおおお!!」

いきなり距離を詰められたからか、背を向けられたからかは解りかねるが、かつちゃんが呻く。

肩から伸びた彼の腕が大爆発を起こすが、左腕でそれを押さえつけ、反動で逃げられないように確保。

そのまま腰で打ち上げるようにして、爆炎の中へと彼を放り投げた。

黒煙で姿が見えないものの、警戒して二回バックステップ。

その煙の中で数度爆発が起きると上の方から黒煙が尾を引いたままかつちゃんが飛び出してきた。

両の手のひらを重ねて前に出し、開いた隙間で更に爆破。

コレも見たことがある。

スタングレネード  
閃光弾。

所謂目潰しだ。

反射的に片目を閉じるも対応が遅れ、少しばかり目を焼かれた。

ぼんやりと視界の真ん中が暗く沈み、周囲のみしか確認出来ない。

音を頼るも目の前で爆風が閃き、身体が少し流される。

たたらを踏んで、数歩後ろに下がったところ、殺していた足音が砂を踏む音で聞こえた。

「うおおおお!!」

叫ぶことで彼の位置が丸分かりになった。

勿体無い。

正中線を大きく動かすように避けたところで、かつちゃんが突撃。

空を殴ったその腕を絡め取り、身体を回すように遠心力を加えて、地面へ引き倒す。



しかし、別のところからの爆発により、その状況が崩された。

倒される寸前に爆破の勢いを載せた脚が僕の横っ腹へと刺さる。

「そこまで!!」

そうグラントリノが宣言したところで模擬戦は終了。

やり直してからは初めてかつちゃんに白星が着いた。

25. " Together" increases  
(『一緒』が増える)

「一泡吹かせてやったぞ、いづく!!」

ビシツと指差し勝ち誇るかつちゃん。

確かに条件の通り、体勢を崩されたので僕の負けだ。

ハーツハツハツハ！とオールマイトリスペクトな笑いを高らかに上げ、喜色を満面に映し出す。

しかし…

「調子に乗るな、と何度言えば分かるんじや勝己い!!」

ジェットの噴射で飛び上がり、落ちる勢いにまでジェットを載せたグラントリノの無慈悲なストンピングがかつちゃんの無防備な顔面を襲う。

勢いそのままに叩き付けられたかつちゃんは、抗う間も無く意識を飛ばした。

「ああ!?!かつちゃん!?!」

「ふん、調子に乗られちゃ今後の修行に悪影響だ」

慌てて抱き上げるが、コブなどは出来ていないようなので、意識を刈るだけの技だっ

たようだ。

ホツとするのも束の間。

外野にいた二人は口々に…

「チツ…不意打ちが上手くいったからって調子付きおつて…」

「…さん太郎…ボロボロじゃないです…」

怖いよ…特にお茶子さん…。

「…起きたら次は私が行ってこようかな…」

全力で止めにかかった。

「んあ…?」

ノートにいつものように書き物をしていると隣で大の字で寝ていたかつちゃんが目  
を覚ましたようだ。

「…あれ?…俺…いつのまに寝て…? あっ!?! いづく!! さっきの勝負俺の勝ちだよな!! 夢  
じゃないよな!!」

目覚めて数秒で状況把握。

しかし、夢との境界が分かってないようだ。

「うん。今回は負けたよ。凄いね、かつちゃん。脹脛ふくろはぎを爆破するなんて思いもしなかったから、思わず食らっちゃったよ」

「へへん！どうよ！師匠が足の裏から吹き出すのなら俺はどうなのか、って試して出来たんだよ！」

「かつちゃんの個性はニトログリセリンみたいな汗だから、手のイメージが強かったけど、実際は全身の汗で出来るんだね…盲点だったなあ…」

「まだ、手と違って他の場所だと皮膚が耐えきれないみたいでさ、三回もやると血だらけになっちゃうんだよなあ」

「そこは修行、だね！何度も使ってればその内皮膚も硬く、厚くなるよ!!」  
未来のかつちゃんが辿り着けなかった一つの分岐点。

掌だけでも十分に強かった彼が、その他に選択肢を得たらどうなるのか。  
想像も付かない。

「あと、師匠みたいに足の裏を爆破させて俺も跳ぼうと思うんだけど、どうもバランスが取れなくてさ…」

「そこは回数を重ねてけばきつと出来るよ。何たってかつちゃんだもん」

「そ、そうか？ いずくにそう言われると何か出来そうな気がしてきた！」

「うん。次はそれ込みで対策立てるから今日みたいな勝ちは無いと思ってね？」

「ぐっ…いずくのくせに…」

「いつも僕が勝ってるからね！」

数秒、洗面で互いに睨み合っているとどちらともなく笑い出す。

コレで良い。

コレが良い。

かつては迫れなかった、無個性だからヒーローに憧れててもなれるわけがない、と諦めていた自分では有り得なかったこの時間。

互いに切磋琢磨し合えるのは、本当に貴重で大切なことだったんだ。

暫くそうして笑い合っているとビルの方からお茶子さんに呼ばれる。

そろそろ麗日家へ出発する時間だ。

「いづく。次も負けねーぞ！」

「次も楽しみにしてるよ、かつちゃん」

そう言つて、互いに拳を差し出すグータッチ。

教えたらかッコいいって理由でいつからかやるようになったそれ。

奇跡<sup>やり直す</sup>前は、最期に送り出した時にやったのが最初で最後だった。

「じゃあね、かつちゃん」

Side: Katsuki Bakugou

手を振って送り出す俺。

ビルの影からいざくと肉球女が見えなくなったところで手を下ろす。

下ろしたその手をじつと見て、今日の手応えを再確認した。

「…よし。よし、よしよしよおおおし!!」

そう言つて座つた体勢から後ろにゴロリ。

腕をそのまま投げ出した。

「はー…。ようやく一歩。手加減してもらつて、不意打ちしてようやく一勝。…幼馴染

なのに…遠いなあ…」

「喜んだり、落ち込んだり忙しい人ですね？」

「どわああああ!!」

突如掛かる声に驚きの余り飛び上がってしまった。

「て、てめえイカレ女!?!いつからそこにいたんだ!?!」

「あなたが起きる前は出久くんとお話ししてましたよ?それとトガです」

木の影から顔だけ出してコチラを見てるイカレ女。

「爆発さん太郎：昨日の喧嘩で大体の強さが分かったと思つてましたけど、見直しました。凄かったですね、出久くんとの模擬戦」

「そう呼ぶな、つて言つてんだろ」

「あたしもイカレ女つて呼ばないで欲しいです」

「名前」

女と話したのは母ちゃんといずくの母ちゃん、幼稚園の先生、肉球女に次いで五人目かも知れない。

男と違つて接し方が分からなかった。

「名前ですか？トガです」

「フルネームを聞いてんだよ。」

「人に名前を聞くなら自分から名乗るべきだつてテレビで言つてたですよ？」

「ケツ：爆豪勝己。てめえはよ？」

「渡我被身子、です。ひーちゃんつて呼んでも良いですよ、かつちゃん」

「絶対呼ばない」

そう言つて、建物に戻る。

そろそろ昼飯だ。

振り返れば、頬を膨らませたイカレ女。

今日はあのいづくに勝ったし気分もいい。  
だから、気紛れにこう呼んだ。

「オラ、飯だから行くぞ、ヒイコ」

そのまま気にせず歩き出せば、幾らかの間を置いてから、慌てて駆け寄ってくる。

「かつちゃん!?今なんて言いました!?聴き間違えじゃなければ、ヒイコって呼びませんでした!?ねえ、かつちゃん!?無視しないでかつちゃん!?かつちゃん!!」

「カツチャカツチャうっせえなあ!」

そこから、また殴り合いの喧嘩に発展したため、師匠に落とされる羽目になった。

イカレ女はイカレ女でいいや、二度と呼ばない。

—————

「お茶子おとお!!遅かったやないか、お茶子おとお!!」

「ちよっ!?!父ちゃん、うっさ!?!どうしたん!?!」

「お前、今日の朝帰ってくるって言ってたのに、もう日が暮れてるじゃないか!!」

「そんなん、昨日の内に母ちゃんに連絡したやん!!インコさんも一緒やし、危険は無いって言っとなやろ!!」

「仕事も手に付かへんから今日は休んだ!!」

「仕事増えて来てんのに何してんねん!!母ちゃんもなんか言っただってよ!!」



「いやあ、父ちゃんな？なんも聞いてくれへんし、もう母ちゃん諦めててん」

「父ちゃん？いい加減にせんと、私もう帰らんよ？」

「父ちゃん！仕事行つてきます！！」

麗日家は今日も慌ただしい。

玄関口でのやり取りは、既に五度目の帰省にして、馴染みの物となつている。

毎回、予定日より遅れてしまつているので心配も一入ひとしほなのは分かるけど、毎度予定日を丸々休んでしまう形になっているので、申し訳ないのだが呆れてしまう。

母さんと顔を合わせれば、同じような表情で乾いた笑いを吐いていた。

オールマイトに相談して、ヴィランによる破壊などで壊れた市街地の復旧や復興に協力する形で三重県界限での仕事に顔を出せるようになった今、以前の苦慮も大きく改善された。

その上、仕事の早さや丁寧さの口コミが呼水になり、リピーターも着々と増えている。

昔、貧乏だつて言つてた窮状は少しは良くなつてきているようだ。

「全く…父ちゃんと来たら…」

「まあ、娘さんを心配するのは当然だし、遅れたのは僕らなんだからしょうがないよ」

「そうは言つても毎度毎度仕事ほつぽつてるんは許されんでしょ…」

「まあ、それはアカンとは思うけど…」

そう言うとお茶子さんが一瞬目を丸くして固まった。

次いで、ニンマリと意地悪い笑みを浮かべると…。

「うつつたね？」

「うつつた…？」

「デクくんが『アカン』やって！」

そう言われてようやく気付いた。

僕も気付かないうちに訛ってしまふのだろうか…？

でも…

「まあ、一緒が増えるのは良いこと…かな？」

そうぼそりと呟くも隣の彼女には聞こえていたようで、静かに顔色を赤らめていた。

## 26. Dance &amp; Chase!! (ダンス&amp;チェイス!!)

Side;"A" girl

先週、変な二人組がウチの教室に入ってきた。

緑のモサモサした髪の毛の子と茶色の髪の毛のふわふわした女の子。

初めて来た日、綺麗なお姉さんに連れて来られた。

多分似てるし、緑くんのお母さんだ。

「基礎コースの体験に来ました。よろしくお願いします」

そう二人して頭を下げてお辞儀する。

多分同じ年だと思うんだけど、喋り方とか動き方が何となくお兄さん・お姉さんっぽく思えた。

初日は体の動かし方、何度もやった簡単なステップ、身振りの心構えなんかを先生が付きつきりになって教えていた。

茶色ちゃんは何となく出来ていたけれど、緑くんがでんでダメ。

初歩のボックスステップを繰り返しているうちに頭がこんがらかったのか、足まで纏

れて転びそうになっていた。

その度に茶色ちゃんの手を差し伸べて、緑くんを宙に浮かして助けてたり。

それを見て先生が注意するんだけど、

「いやあ……つい手が出てしまいましてー!」

と頭を掻きながら言っていた。

なんだか、二人のやり取りが大人の……それこそ夫婦の様なやり取りで少し羨ましく思えたのだけど何でだろう？

それから一通り教わって基礎コースはお終い。

むりようたいけんコースだから、これで終わりなんだって。

その後は、私たちの練習の見学をして教室の雰囲気を感じてもらって、入るかを決めてもらうんだって。

さつきまでの退屈なメトロームの音から解放されて、課題にされてる曲が何度も掛かる。

そうやって練習を続けてたんだけど、茶色ちゃんは手拍子打って見てたのに、緑くんは何かをノートにガリガリ書いていた。

休憩と言われてコッソリ近づいて覗き見たけど、まだ習ってない字がたくさん、小さく並んでてあたしは読むことを諦めた。

何となく読めたのはカタカナばかりで『ダンス』と『ステップ』と『カウント』くらい。

もしかして習ったことを書いて覚えてるのかな？

そうだとしたら字がたくさん書ける緑くんは頭が良いのかもしれない。

天才、って言うのかな？

そのまま練習を続けていると鏡越しに見える二人が気になった。

何やら書いていることを二人で相談してるみたい。

ひと段落付いたのか、ノートと鉛筆を鞆にしまって、そこから代わりに携帯電話を取り出した。

ズルい、いいな、羨ましい。

あたしも欲しいってお願いしたけど、小学校に上がってからって約束をして諦めた。

それで後ろから写真？を撮っていたみたい。

良いな良いな、羨ましい。

その次の練習の日。

今日。

また二人が来ている。

そうしたら、驚いた。

前の練習の時はダメダメだった緑くんがステップをバッチリ覚えてきたのだ。

まだぎこちない所もあるし、リズムがズレる所もあるけど、それでも二度目にしては凄すぎる。

茶色ちゃんにおいてはほぼ完璧。

きつと凄い練習をしてきたんだなって、そう思った。

でも、驚くのはそれだけじゃなかった。

その後の曲を掛けた練習にも参加したいと二人が言うので一番前の先生がよく見える所に呼ばれた。

真ん中があたし。

左右に二人の並び順。

イントロが流れ始めて、カウントを始める先生。

先生のカウントがないとまだあたしも入りがズレてしまうステップ。

中級コースに上がって初めての課題で何度も練習してるけど、それでも出来ない。

なのに二人はピッタリ合わせてきた。

他のみんなも驚いたみたいで先生と少しずつズレていた。

あたしは先生の背中を睨んで、必死に着いていく。

ふと、その先の鏡に映る二人が見えた。

緑くんはまだ余裕がなさそうだったけど、先生が言っていた『身体を大きく見せる様に』ってダンスの心構えをすごく意識しているのが分かった。

手の振りが指先まで伸ばし切ってて、すごくカッコよく見えた。

反対の茶色ちゃんも余裕がありそう。

目が合うと振りとは関係なしに小さく手を振ってくれていた。

ニッコリと可愛い笑顔で笑いながら、楽しそうに踊ってる。

そうだ、ダンスは楽しいんだ。

だから、勝手に笑っちゃうよね？

さっきまで先生の背中を睨んでてしかめ面になっていたけど、茶色ちゃんに笑い返してからあたしも楽しく踊ることにした。

ダンスは大きく、鋭く、そして楽しく。

振り付けがズレたのは知ってた。

左右のステップも踏み間違えた。

いつもならやらない。

そんな失敗。

でも、楽しかった。

「ねえ！」

練習が終わった後、お母さんが迎えにくる前。

あたしは二人に話しかけた。

「ダンス！凄かったね！びつくりしちゃった！」

そう言うと二人は同じ仕草をしながら照れていた。

—————

Side：“I” boy

僕は兄さんを尊敬している。

まだ高校生ながらヒーローの心構えが出来ていて、父と母にも恥じないヒーローになるであろう。

自身の鍛錬に一部の隙も無い。

それでいて周囲への気配りも完璧だ。

近所の皆さんの評判も凄くいい。

将来はお兄さんのようなヒーローになってね、とスーパーのおばさんにも言われてしまっほぼだ。

無論、僕もそうならんと努力している。

まだ4歳だが、ねだって買ってもらった辞書を使いながら難しい本も読んでいる。

兄さんに教えてもらった本を片端から読み、既に20冊は読んだだろうか？



段々と辞書を使わずに読めるのが楽しくなってきた、つい兄さんに図書館に行つて見たいとねだったこともある。

その時、印象的な二人の男女を見た。

兄さんと一緒に走り込みをし、一緒にお風呂に入ってから出かけたその日はありきたりな冬の晴れた日だった。

風もなく、歩くに合わせて体が温まり、過ごしやすい日だった。

初めて行く図書館に浮かれていた僕は、やや先行して兄さんの前に行く。

兄さんが来ているか確かめるのに振り返つたその時、いきなり突風が吹いて、思わず目を閉じた。

それは一瞬で過ぎ去つたので、その風の行く末に目を送ると、遙か遠くへ行く同じくらしい子供が目映る。

「あの子ら個性使つてるなあ…一応、止めておいた方がいいか。悪いがここで待つてくれ。すぐに戻るから」

そう言つて僕が了解の意を返すや否や、兄さんが駆け出す。

速さを史上とする我が家で現最速の兄さんだ。

きつとすぐにあの二人を捕まえて、個性の無断使用はいけないと注意してくれるだろう。

だから、僕は待つ。

兄さんからきつとすぐだ。

だから待つ。

昨年誕生日に買って貰った腕時計で20分が過ぎた頃、兄さんが戻ってきた。

「お待たせ。待たせて悪かったな」

「大丈夫だ兄さん。あの二人にちゃんと注意できたのかい？」

当たり前前にそうだろうと思っていた。

しかし、兄さんの表情は芳しくかんばない

指先で頬を搔く仕草は、気不味いと思う時だと兄さんから借りた本に書いてあった。

「すまない。追い付けなかったよ」

とても驚いた。

誰より早いと信じて止まなかった兄さんが「速さ」と言う種別で負けるとは思ってもしなかった。

「大通りに差し掛かったところで大きく飛び越えられて、そのままビルの上を行かれてしまったよ。足には自信があったんだがなあ……」

女の子を抱えた男の子の速さはそれほどの物だったのか。

確かに先ほど通り過ぎた突風を考えればあり得なく無い話だ。

「兄さん。彼らはきつと僕の同世代だ。いつか兄さんの仇を取るために今からもつと鍛えるよ」

どちらかと言えば身体を動かすよりも本を読んでいる方が肌に合っているが、それは置いておく。

「我が家が速さにおいて劣らないことを僕が証明するよ」

「エンジンが足についているお前ならきつと俺よりも早くなるはずさ」

兄さんに手を引かれ、図書館へ向かう道すがら。

僕は決意を新たにした。

かの印象的な暴走二人組に勝たんと。

27. Training / Dark cloud  
s (トレーニング／暗雲)

「えいちゃん、個性の制御はどうなん？」

「おう。大体思い通りにオンオフは出来るようになったぜ！」

練習場として作った砂浜の上。

僕とお茶子さんは自分の鍛錬に追加して一緒に鍛えるようになった切島くんの指導を始めて既に三ヶ月が過ぎた。

あと数日でやり直してから半年が過ぎようとしていた。

目標としていたオールフオーワン対策、ヴィランの先回り対策は概ね順調だ。

USJを襲撃した際に居た脳無の素体にされた男の保護ができ、仕事の斡旋が出来たので推定ヴィランより除外することと相成った。

これで少なくとも『ショック吸収』の個性は持たないし、対オールマイト用脳無の根幹を絶った為、あのUSJ襲撃事件は起こらない。

その他にも犠牲になる”予定”の人々は多々いるが、オールマイトやサー・ナイトアイ他全国に散る協力者のおかげで『脳無素体犠牲者』や”犯罪予報”に列挙された『推

定ヴァイラン』をも保護・監視下に置くよう着々と進んでいる。

その上、ヴァイラン 連合の中核を成したトウワイスこと分倍河原仁とMr. コンプレスこと迫圧紘の確保に成功したとナイトアイより連絡があった。

どちらもまだまだ軽犯罪程度しか犯しておらず、十分に社会復帰可能だとか。

それならば、敵に回さず味方に引き入れてしまえ、とばかりに現在グラントリノの下で共同生活をしている。

…かつちゃんに悪影響が無いよう祈るばかりだ。

他にも大きな犯罪を犯す前に捕らえることに成功してる推定ヴァイランは他にもいる。

傷害事件で逮捕されたヴァイラン名『ムーンフィッシュ』や乱波肩動など、未来で僕らが脅かされた脅威は徐々には言え、減らすことに成功している。

僕らが動いたことによって本来の時間軸では落とすはずだった命を救うことが出来ている。

その結果は僕もお茶子さんも満足している。

そう、満足はしている。

しかし…

「…でく…おい、デク！」

肩を掴まれ、現実呼び戻された。

「ど、どうしたの、えいちゃん？」

「いや、この後のトレーニングはどうするのか聞いてんだよ？なんか考え事でもしてたのか？」

キュツと口を引き結ぶ。

何か呟いてやしないか、心配になる。

一応、口に出す癖は矯正しつつあるのだが、気を抜くと度々やらかしている為自信がない。

視線をお茶子さんに向けると笑顔のまま首を縦に振ってくれたので、大丈夫そうだった。

「何でもないよ。ちよつと考え事」

「そうか？お前は何でも出来るかもしれないけど、悩み事なら相談くらいには乗るからな？」

彼の心根は以前と変わらず…と言うと変な感じだ。

この年頃からヒーローになってからも変わっていないってことだ。

段々自分でも何を考えているか分からなくなってきた、頭を左右に振る。

「デクくん、何考えてたん？」

「ああ、お茶子さん」

飲み物を切島くんに渡してから、僕にも差し出してくれるお茶子さん。

その顔はありありと心配を映していた。

「最近、ヴィランの動向が読めなくなってきたって話があつたじゃない?」

つい先日、ナイトアイとオールマイト、エンデヴァー、ベストジーニストの錚々たる

面々で話し合いをした際にそんな話題が上がっていた。

「マグネもマスキュラーも見つかからない。監視を振り切つたらしいし、袋小路に入ったと思つたら消えたとかそんな報告ばかりじゃない?何か悪い予感がして気持ち悪くて……」

「そうやね……それにオールフォーワンの動向も何一つ掴めていないのも不気味やね……」

「未だに黒霧の尻尾すら掴めていないしね……」

僕らは既に知り得る情報は吐いた。

しかし、これ以上の結果が得られないのか、と考えに暗雲が立ち込める。

「あとは……そうだ、ステイン。彼もまだ行動に移していないはずだ……確か調書や記事では10代末頃は街頭演説みたいなことをやってたって書いてあつたはず……。どうかこちら側に引き込めないものか……」

「ええ!?いや、確かに戦闘力やカリスマ性はあると思うけど、素直にヒーローになつてく

れるかな…?」

ガチガチに固まった理想を追い求める思想犯。

そりゃあ、固まり切ってしまえば変わらないだろうが、そうなる前であれば…

「…どうとでも出来る…」

ギュツと拳を握り締める。

次第にギチギチと音が鳴るも構わない。

「デクくん…それはヒーローっぽくないわ」

「え」

握り込んだ拳を両手で包むお茶子さん。

思わず、込めた力が霧散した。

「その言い方じゃ、悪くも出来るみたいじゃない。私たちは最善より最高を選ぶ…で

しょ?」

そう言われてハツとする。

前提がすり替わっていた。

「そうだね…僕らの思想に染めるんじゃないやなくて、快く協力者になって欲しいんだもんね

…。僕が間違っていたよ…」

「分かればよろしい!!」



両手を腰に当て胸を張るお茶子さん。

むふー！と鼻息を荒く吐き、口角が吊り上がっていった。

「おーい、そろそろ休憩終わりにしよーぜ！」

少し離れたところにいた切島くんから声が掛かる。

いつまでも休憩にしてはトレーニングも意味がない。

「今度は私が指導してくるよ。なんかあつたらよろしくねー？」

「あ、うん」

そう言つて立ち上がるお茶子さんを見送る僕。

切島くんに駆け寄ると打ち込み稽古を始めた。

まだ始めたばかりなので、ギクシャクしている部分もあるが始めた当初よりも大分速くなった。

基本技、一つ一つを確認するためにあえて緩やかに行う組み打ち。

受けの練習なので、使う型や順序を事前に取り決め、スローモーションの様にゆっくりと動く。

傍から見れば遊んでいる様に見えるかもしれないが、歴とした訓練だ。

特に切島くんの個性に於いては重要な訓練と言える。

「焦らんでいいよ。丁寧に受けることを考えて」

「押忍っ!!」

相手の攻撃をバカ正直に受ければ、それだけ消耗する。

常に気を張って全身を硬化させるよりも、必要な時、必要な箇所に、必要なだけ硬化できる様にする訓練だ。

全身常時硬化状態の『安無嶺過武瑠』アンブレレイカブルは全盛期でも持って3分だった。

早い内からこの訓練をしておけば、彼の継戦能力は飛躍的に上がるだろう。

「っ!?…ぐう…!」

「ほら、打点をズラす!遅れるとゆっくりやっているとはいえ痛いよ!!」

「…お、押忍!」

「無理な姿勢では受けない!下がるか、姿勢を整えつつ前に!今はまだ手技の型しか使っていないんだよ!もつと視野を広く持つて!足技や投げ技が増えるともつと周り見ないと対応できないよ!」

「押忍っ!!」

ゆっくりやり始めたはずなのに、結構な速さになってきた。

熱が入り過ぎてるなあ…。

「お茶子さん、ペース落として!それじゃあ、普通の打ち込み稽古になっちゃうよ!!」

あ!と一言。

そうして距離を取って仕切り直し。  
また速くなったら声を掛けよう。

ピリリリリリリ

とオーソドックスな着信音が鳴る。

特に設定していない番号からだろう。

近くに転がしたカバンから電話を取り出し、ディスプレイを見るとそこには『サー・ナイトアイ』の文字。

「はい、デクです」

『緑谷出久。2分ほど時間をもらおう』

大丈夫です、と返せば長いため息が受話口から聞こえた。

『お前の協力の下、現在遂行中の作戦の件だが、先日話した通り進捗率で言えば概ね六割を超えた。未だ見つかっていないヴィランないし推定ヴィランも目下搜索中だ。直に結果が出るはずだ』

「はい、その件は一昨日のお電話でお伺いしました。…もしかして何か問題が…?」

『ああ。監視もしくは保護をしている推定ヴィランたちなのだが…監視担当者、保護監

督者数名から突如行方不明になったと報告を受けた』

「ツ!？」

思わず息を飲み込んだ。

それは上手く行っていたがために恐れていた事態だ。

『いずれも本日、先程。脱走や失踪ではなく、つい数秒から数分前まで目の前に居たはずなのに急に姿を消したと言う…。その報告の中に2件『黒い霧の様なものが見えた気がした』と言っていた』

間違いない。

「それは…：ヴィラン名『黒霧』で間違いないでしょう…：」

『ああ。そして今、私はお前と同じことを考えているだろう』

「ええ」

「オールフォーワンが動き出した」

## 28. Darkness / Growth (暗闇 / 成長)

Side: Dark

「お呼びでしょうか」

デイスプレイの画面の明滅のみが照らす部屋の内に滲み出る霧が人の姿を成す。

元々部屋にいたのは二人。

メガネの老翁と灰色髪 of 壮年、と言った風貌の男。

各所の監視カメラをハッキングしており、数多ある画面があちらこちらの風景を映し出していた。

それは街中だけに限らず、山や海、林をも映していた。

それらに共通していたのは、いずれも一般的に人相が悪いとされる男女が映っていることだ。

「ご苦労。急に来てもらって悪かったね」

「いえ、私の個性に掛ければ時間も場所も関係ありませんので」

「そうは言ってもご足労頂いたんだ。素直にねがわられてくれ」

「もったいないお言葉です」

やれやれ、と言葉を溢す灰色髪の男。

身を包む漆黒のスーツはややゆつたりとしながらもカッチリと着こなしており、体格もあつて少し窮屈に見える。

「ドクター、画面に出してくれ」

そう言われた老翁は応答を返さず行動で示す。

シワが刻まれた小さな手を動かし、数秒の内に幾枚かの顔写真が表示された。

「この方々は？」

「まだ“こちら側”に来ていない同志達だ。彼らはどうやらヒーローに監視されている様でね。僕としては窮屈な思いをしているだろうから、こちら側に招待したいと考えていてね。こちら側に来ないとしても彼らの“個性”は有用だ。ドクターが今進めている研究に活用させていただくつもりなんだ」

「つまり、彼らの勧誘あるいは誘拐をして来いと言うことでしょうか？」

「誘拐とは乱暴だね。”招待”してきて欲しいのさ」

結局は誘拐ではないか。

口から出掛かる言葉を飲み込み、了承の意を返す霧を纏う男。

「“こちら側”に来るべきなのに牙を折られた者たちもいる様だが、それは捨て置こう。

幾らか惜しい”個性”の者も居るがね。この資料を持って行きたまえ」

分厚い紙束を差し出す灰色髪の男。

恭しく両手で受け取り、それが幾度も捲られ読み込まれた物だと理解した。

「この資料は…?」

「カラス」から届いた情報だ。こちらで精査し、場所も抑えてある。今画面に映っている彼らを例の施設へ招待してくれ。僕の教え子の為に幾らかの戦力があつた方がいいからそれには赤い印を。個性が欲しいものには青い印をつけておいた。監視が付いているからね。出来るだけ素早く招待してくれ」

「畏まりました」

恭しく、執事のような所作で一礼すると踵を返す。

突如として現れた黒い霧の穴に一步踏み出し、音もなく姿を消した。

「ホッホ、コレでワシの研究がまた一步進むわい。先生も届いた暁にはお手伝い願いますぞ」

「こちらこそ、ドクター。出来れば裏切らない様な”作品”を頼むよ」

そうして二人は声を出して笑い合う。

暗闇に溶け込む姿は言葉にして表すならば、魔王とマッドサイエンティストという言葉が当て嵌まるだろう。

「しかし、未来を見通す”個性”か…。コレが何者か分ければ、先生の安全がより一層高

まると言うのに……」

「それを探らせるのは、カラスにとつても危険過ぎる。彼と言う情報源が無くなるのは痛手なのだよ」

そう言いながら灰色髪の男は山と海を映し出したディスプレイに目を向けて、ニヤリと笑む。

「子供というのは、なかなかどうして可愛いものだ」

その映像には数人の子供が映し出されていた。

—————

『消えた推定ヴィランは以上12名だ』

電話口から聞こえる声には疲れが滲み出していた。

居なくなつたのは、いずれも監視していた凶悪な犯罪を犯す犯罪者予備軍たちだつた。

もしかしたら、未だに見つかっていない者たちもこちらが見つかる前に連れ去られてしまうかもしれない。

「以前、資料作成の際にあえて作ったダミーが紛れていますね……」

分厚い資料に紛れ込ませた誤情報。

凶悪犯罪者になると嘘を書いたメディアに殆ど露出していないヒーローを十人ほど



選抜し、彼らにヒーロー活動を自粛してもらっていたのだ。

『作戦のためには言え、約四ヶ月もの時間を掛けてヴィラン側に馴染んでもらった彼らには悪いが、やはり内通者がいたようだな』

「ええ、まだ他にも内通者がいる恐れがありますので、この情報は数人の内に留めてください。四堂腕しどうかいな：フォースカインドさんのGPS情報は取れましたか？」

『ああ、問題はない。出来るだけ早く対処しなくては新人ニュービの彼が心配だ。内通者の洗い出しは彼が引つかかった事から…』

「ええ。ベストジーニスト：彼のサイドキックって事になりますね」

『ベストジーニストが連れてきた彼が一番怪しいな。本日中に接触し、出来れば捕らえたいところだ』

「彼の処分に関してはことが済み次第が良いでしょうね…。ともかく、ベストジーニストに連絡して捕縛していただきましょう」

『そのつもりだ。また連絡する』

そういうや否や通話が切れた。

しばし、下ろした画面を覗いていたが、かぶりを振ってからカバンへと戻す。

そうしてから二人に目を向けければ、注意した甲斐があったか、緩やかに打ち込み稽古を行っていた。

お茶子さんは涼しげな顔で行っているが、相対する切島くんは汗を全身から吹き出していた。

慣れない動きと緊張、頼りない足元が相まってこちらが思うよりも疲労しているようだ。

時間にして言えば、まだ3分ほど。

全力で動いていればインターバルを挟むところだが、この打ち込み稽古では凡そ5分と決めている。

今が辛くともその分スタミナが付くと考えれば、心を鬼にして接する他ない。

「ほら！腕が下がって来てるよ！顔面殴られたいの!？」

「お、押忍!!」

「受ける瞬間に個性を使うって言っただけよね!?ガードを上げながら個性を使うの!!上げ終わってから使っちゃ、硬化する前に撃ち抜かれるよ!？」

「押忍!!」

「片腕の力だけで受けない!!必ず、両腕で受けるか、三点防御!!」

「押お忍ツツ!!」

彼女の教えは的確ではあるが、どうしてかいつもの温厚な性格から変わってしまったている。

前はこんなことなかったはずなのだが、いつからだろうか…？

「ああ…かっちゃんたちに挑まれ出してからか…」

今世の僕ら二人の幼馴染であるかっちゃんは良くも悪くも僕らに影響を及ぼしているようだ。

お茶子さんへの影響は『お姉さん化』と『鬼軍曹化』かなあ…きつと、自覚はないだろうけど…。

「よし、5分！終了！」

「ありあとしたー!!」

そう言いながら砂浜に背中から倒れ込む切島くん。

大して息は上がっていないが、全身が乳酸を分解したくて酸素を求めるはずだ。

「えいちゃん、訓練の後はずぐ横になっちゃダメだつて！ほら、ダッシュ一本!!」

そうだった！と心は逸っているようだが、体が付いて行かずヨロヨロと立ち上がる。

そのまま、疲れた体を圧して壁としている冷蔵庫まで走り、今寝転がっていたところまで戻って来た。

「ああー!!疲れたあー!!」

「お疲れ、えいちゃん。今日はお終いな」

「おお、デクも麗日もありがとな。自分が強くなってるかまだ実感無いけど、少しずつ体

力が付いてるのは分かるわ」

「初日は最後のダツシユ出来なかったもんね」

ニヤリと笑うお茶子さん。

『意地悪な面』もかつちゃんの悪影響なのかなあ？

「そいつを言わないでくれよ……」

元氣印の切島くんが目に見えて萎れる。

幼い頃は高校時代ほど心も頑強ってわけじゃなかったんだね。

「でも、個性の部分オンオフも出来るようになったし、最後のダツシユも頑張れた。確かに強くなってるよ、えいちゃん！」

「せやね。昨日の自分に勝てたらそれだけ強くなってるってことだよ！」

そう言うのと一瞬ポカンとするものの、直後にニカツと笑い、ありがとな！と返してくれた。

人好きする笑みだ。

彼の人気的一端であつたその笑みは、記憶のものと変わらず一致した。

29. Blood Madness Muscular  
(血狂いマスキュラー)

Side: Force Kind

何も見えない。

先程まで、作戦のために路地裏を歩いていたはずだ。

見た目が厳ついということもあって、抜擢された潜入任務だが、相手が転移系個性持ちによる半誘拐が一番あり得るとのことでヴィランらしい見た目を心掛けて作成してもらった任侠風ヒーロースーツに身を包み、チンピラ同然に振る舞う日々を送っていた。

路地裏の喧嘩に介入し、ヒーローが来るまでやって逃げる、とほぼヴィランみたいな活動はヒーローになったと言うののどうしてこうなったと釈然としない。

そんな風に過ごしていたところ…どこからか声が出た。

『何やら不満が溜まっている様子。その不満、我々の元で振る舞っては如何ですか？』  
偉く紳士的な物言い。

誰だ？と誰何するも答えは貰えず、低い笑い声だけが響く。

『ふふふ、(心配には及びません。これからご招待いたします』

そう言つて黒い霧に全身を包まれた。

(マジかよ…事前の情報通りじゃねえか…!!)

そう考えるや否や、手首に取り付けられたボタンの横を押し込む。

GPSとエマージェンシーコールが内蔵されたサポートアイテムで、現在位置とリアルタイム通信、録音が一気に為せる小さいながらもハイテクなアイテムだ。

特殊な電波を使用しているので、障害されることはほとんどないが…こちらからは送られてもあちらからは届かないのがむず痒い…。

(頼む…ボロが出る前に救出してくれ…)

そう考えたのが1分前。

気付いた時には、昼下がりの路地裏ではなく真つ暗な部屋にいた。

ここがどこだか見当も付かないが、少なくとも両手を伸ばすくらいのは広さはありそう  
だ。

慎重に手を伸ばすも、壁や天井に触れそうな感じはしない。

自分以外の息遣いや衣擦れなどは無く、多少の心細さを感じる。

下の右手でズボンのポケットを探るも、移動する際に抜き取られたのか入っていたはずの携帯がなかった。

その他に明かりをつけるに相応しいアイテムと言えば…。

「チツ…ライターくらいしかねえが…燃えたりしねえよな…う…」

カチャン、と音を鳴らして蓋を開き、やや有つて慎重に火を灯す。

何かに引火する事もなく、点いた火で辺りを照らすも見える範囲に何も無い。

足元の安全が確保出来たので、辺りに伸ばしていた手を戻す。

出来るだけヴィランらしく…そう思い、下の両手をポケットに。

上の両手で辺りを照らしながら歩く。

(風はねえ…密室なのか…？だとしたら酸欠になる可能性もあり得る…。天井すら照らせないとか相当広い部屋らしいな…)

そうやって歩いていると漸く壁に突き当たる。

(白い防音壁。屋内なのは確定か。こんな高さで広さがある部屋は都内には用意できないか…となると…ここはどこなんだ？)

そう考えた直後、バンツと大きな音を伴って全ての照明が点く。

暗闇に目が慣れ始めていたので、その照度に目を焼かれた。

突然のことに全ての腕を使って目を庇うも、視界が明るさに慣れるにはしばらく掛かった。

『四堂腕くん…だね？』

先程、路地裏で掛けられた声とは違う、低くそれでいて響く声がある。

「おう、コラ。人を勝手に連れてきやがって何様だ。出て来いよ」

ヴィランらしく心を掛けて、声を出す。

出来るだけ悪ぶって、短気的で、自尊心あり気に。

『ここに連れてきた彼には招待するように言っただが、お気に召さなかったかな？ 君の活躍は画面越しだが観ていたよ。ここ数ヶ月で路地裏の支配者になつていたようだが、君の力を誇示するには足りないようだ。どうかね？ 私の元で働いてみないか？』

人の心の内にスルリと入ってくるようなその声に違和感を抱かないことに逆に身震いする。

恐怖を抱けないことが一番怖い、とはこのことなのだろう。

「ハッ、誰かの下に付くなんて考えたことねえよ。それとも何か？ 俺を納得させられるような報酬でも貰えるのか？」

『報酬に相応しいか分かりかねるが、君の力を存分に振るえることは約束するよ？ 金品が欲しいのであれば、仕事の都度渡すことを約束しようじゃないか』

もしも、捕まってしまった場合出来るだけ協力的でいろうとお達しがあつたが、どうにも納得できない。

「招待してもらって悪いんだが、予定があつてな？ 出来れば今日のところは帰りたいん



だが、帰してもらえないか？」

『答えを聞いてからじゃダメかい？仲間になると約束してもらえれば帰すことを約束するよ？』

ならないと言えはどうか？気になるところだが、博打を打つのは嫌いじゃない。  
い。

「ならない、と言つたら俺をどうするつもりだ？」

『なに、嫌でもなつてもらうさ。君の四本の腕：使い道はいくらでもある』

敵は個性を奪い取る個性を持つてしていると聞いた。

ならば、本当にやりかねない。

負けるのが分かっているならばコレは博打ではない。

「オーケー、分かった。アンタの下に付くよ」

『ふふふ、素晴らしい。それでは次の話に移るよ？』

ゴゴゴ、と床に響く音がする。

視線の先の壁が迫り上がっていくとそこには一人の男がいた。

『四堂くん、街尾くん。申し訳ないのだがね、二人にはコレから戦ってもらいたいのだよ。入学試験だと思ってもらいたい。勿論、どちらかを不合格にするつもりはないが、全力でやつてもらいたい。まあ、どちらかは死んでしまうかもしれないけれど、頑張っ

てくれたまえ』

そう言うのとブツリと音が途切れる。

ああ、参った。

こんなのは想定外だ。

見たところ、高校生くらいの筋骨隆々の男。

どんな個性を持っているか分からない：いや、待て。

この潜入捜査の仕事を受ける際に見た資料に居たぞ：？

「あー：兄さんは仲間になるかも知れねえんだよな？ だけど、本気でやれって？ 俺は個性を自由に使えるって言うからここに来たんだが：」

そう、確か街尾拳。

その個性は：。

ビュルツと音がしたと思うと皮膚を突き破って赤い筋繊維が肩口から現れる。

腕に纏わり、手首までをガツチリと覆っている。

「最近気付いたんだ。俺って、こんな個性だからか、昔から物を壊しやすくてなあ？ 喧嘩の時には相手を壊し過ぎちまって加減が出来ねえんだよ。んで、その壊れ方がよ、相手を血だらけにしちまうんだけどな？ どうやら、好きらしいんだ。：相手の血がよ？」

そうだ、『筋力増強』

溢れる筋繊維で力を強化する個性。

「兄さんはその腕が個性だよな？なら、力はそこまで強くねえよな？なら、俺の力には敵わねえだろ…何って？自慢だよ！俺の力は！俺の個性は凄えんだってな!!」

ま、不味い！

「本気でつて言うし…兄さん。本気で遊ぼう!!」

足にまで巻きついた筋繊維、距離にして10mほどだが、その強化された筋力ですぐに食い潰されてしまうだろう。

後ろは先ほどたどり着いた壁。

左右の壁までおよそ5mほど。

逃げ場はない。

「はあ…異形型と発動型のミックスか…参った、増強系は苦手なんだ…」  
垂れる冷や汗。

それを悟られないよう努めるが…相手の笑みは深まるばかりだ。

「とりあえず…血い見せろツツ!!」

踏み込みの一步で肉薄され、筋繊維で覆われた巨大な拳を振り下ろされた。

—————

「どのような展開になっているか不明だが、既に彼が拉致されてから二時間が経過して

いる。可及的速やかに救助せねばなるまい」

連絡をもらってからすぐさまオールマイトの事務所集合した僕ら。

この場には現職のヒーローのオールマイト、サー・ナイトアイ、エンデヴァーと選りすぐりのヒーローがいる。

しかし、僕らを含めてたった五人。

悪の親玉を叩くには些か戦力が不足しているようにも思える。

「個性を抜き取られているか、あるいは既に脳無の素体にされているか……」

「いずれにせよ、あやつのが命が損なわれる恐れがあるならば、是が非でも救いに行かねばならんだろう?」

「ええ、ちようど精鋭が集まっています。ヤツと対峙するとしてもこれ以上ない布陣と言えましょう」

「だけど、私達が直接戦闘するのは本命が出張ってきた場合のみ……で良いんですよね、サー?」

「ああ、君たち二人は最悪の事態でのバックアップだ。出来れば隠れたままやり過ごせるのがベストだ……。しかし、奴が出てきた場合はその限りではない。出来るだけ不意を打って一撃で収めて欲しい」

「はい」



## 30. Rescue operation (救出作戦)

「……だな」

「ええ、彼が持っていたGPSの反応はこの建物からです」

時刻は深夜。

草木も眠る丑三つ時。

僕らは県境にある山奥にいた。

「ここから見た限り、人の気配は無いな。見張りすら見当たらない」

暗視機能付き双眼鏡を覗いていたエンデヴァーが投げて寄越す。

「監視カメラの類も見当たりませんね。廃墟に見立てているなら恐ろしいくらい周到ですね」

「でも、見て？ 室外機が回つとるよ」

「電気が生きてて人がいるのは確定だな。とりあえず、オールマイトの戻りを待ちましよう」

ここ数分建物周りを見ているが、人影はおろか動くものさえない。

赤外線センサーも疑ったのだが、それに類するものは無かった。

ガサツと木々の音が擦れる音に全員が振り返る。

そこにはいつものヒーロースーツと異なる黒を基調とし、闇に紛れる色合いのスーツを纏う見慣れた金髪の偉丈夫が居た。

「やあ。戻ったよ」

「オールマイト。気配を消しすぎですよ…」

「ふん」

サーとエンデヴァーが各々リアクションを返す。

一瞬だけ後ろを確認して、すぐに双眼鏡に戻したお茶子さんは見習うべき点だな、流石だ。

僕も気付かず衰えていたのか…習うように目を戻す。

後ろで現役ヒーロー達が情報交換を始めた。

「一周グルリと見て回ってきたが、正面口以外に侵入経路は無さそうだ」

「どこかに人が立っていたりしませんでしたか？」

「いや、人っ子一人見なかったね…」

「となると、正面突破しかないか…」

「お前らが潜入しろ。俺はお前らが入った後に正面口を焼く」

一分も漏らされていないなかったエンデヴァーの炎。

やる気に乗じてか幾ばくかの火の粉が散った。

「本命は君達だ、緑谷少年、麗日少女」

「彼奴がどれほどの戦力を有しているか分からない以上、戦闘による陽動の危険性は天井知らずだ。出来る限りの戦闘を避け、フォースカインドに接触するよう行動しろ。ツーマンセルは絶対だ。逃げるにしろ戦うにしろ必ず二人で行動するように。渡してあるSOS発信装置の起動に躊躇いを持つな。目標との接触前に接触した場合は戦闘も構わんが、遅滞戦闘に努め私が行くまで時間を稼ぐ事。」

「正面口の陽動の効果が少なくなつたならば、俺も突入する。無理はせず、必ず新人を助けてやってくれ」

大人組3人の熱い視線が僕らに注がれる。

僕とお茶子さんは一度目を合わせると出来る限りの力強さを持って首を一度縦に振った。

「現在時刻は23時55分」

「陽動開始は5分後とする」

「それでは…」

「突入…開始!!」



エンデヴァーを残して僕らは茂みから飛び出した。

—————

正面口は全てがガラス張り。

柱の影から覗きみれば内部までうつすら見渡せる。

いくつかの袖なしのソファが乱雑に並んでいる。

どうやら、古い病院のようでその待合室のような様相だ。

目を凝らせば、埃が薄絹のように全てに纏い仄かに月光を反射していた。

両開きのガラス張りのスライドドア。

勿論、電源が切れており軽く動かそうにもデッドボルトが効いているようだ。

それを後ろにいる3人にジェスチャーで知らせるとお茶子さんが拳大の石を括り付けた紐を持ってこちらに来る。

それを大きく振り回して、勢いを付けると僕が離れる前に貼り付けたガムテープへと叩き付ける。

カシャン、と頼りない破碎音が小さく鳴るも数秒待っても変化がない。

その変化を待つて、再び近寄るといい具合に割れていた。

慎重にガムテープを剥がし、手を差し込んでシリンダーを回す。

後ろに控えたオールマイトとナイトアイにアイコンタクトをとった後に僕とお茶子さんとで静かに突入を始める。

お茶子さんは受信機に記された発信源を確認しているが、どうやらここより下の階にいるようだ。

リノリウムが立てる音を最小限に壁沿いを走り、角から顔を覗かせる。

ナイトアイから渡された暗視装置で周囲を確認しながら、下への階段を探した。

幾度目かの角でハンドサイン。

付いてくるお茶子さんに停止を指示する。

人がいた。

二人組だ。

「こども暗くちや何もしようがないよなあ」

「まあ、これだけで金が貰えるんだし、普通に働くよりはマシだろう?」

「それはそうだが…」

いずれも爬虫類型の顔立ちをした異形型だ。

最悪、素の個性に付随して熱探知や暗視能力があるかもしれない。

(…デクくん、どうするん…?)

(…もうすぐ時間だ…少し戻って小部屋でやり過ごそう…)

僕はその場で監視し、その間に部屋が開くかの確認をお茶子さんに頼む。

数秒後、戻ってきたお茶子さんに裾を引かれ僕はその場を後にした。

「多分、あの先やね」

「監視を立ててるんだから、その必要があるって事だよね」

「エンデヴァーが動き出したら、きつと外へ向かうから、入れ違いになるよう行けば」

「うん、そうすればやり過ごせる」

左腕に付けたオールマイトモチーフの腕時計。

盤面を確認すれば23時59分。

5

4

3

2

1

0時00分。

轟音と共に建物が大きく揺れた。

Side: Endeavor

0時丁度。

打ち合わせた通りに派手にかます。

両の手より産み出した赫赫と燃える炎。

真正面に陣取り、建物のガラス張り目掛けて放つ。

ガラスの融点を超え、凹凸の目立つ犬走りのタイルさえも赤い泥へと変えた。

突入時の小細工は燃えて散った。

割れた破片も溶けて混じり合う。

「ヒーローエンデヴァーだ!!ここにヴィランが集まっている情報は得ている!!速やかに出頭せよ!!」

小脇に用意していた拡声器を用いて声を張る。

赤々と燃えていた炎は弱火になり、多少の明かり代わりになった。

「チツ。目が焼けて、暗闇が見通せん」

顔を覆う炎も出しているせいか、闇夜が一段と暗く見える。

こういう場面では不都合だな。

ヒュッ

顔を掠めるように何かが飛んできた。

それは白い円錐状の何かのようだった。

「どこから打つてきている…?」

身体を覆うように炎を纏うと次弾は体に当たる前に灰になった。

「それずつこくねー!?俺の爪弾ネイルガンが効かねーじゃん!!」

ゾロゾロと建物の中から出て来る。

いずれも侵入者対策として置かれていた人員のようだ。

「ハハ、お前は討ち取れねーからボーナス無しだなー!」

「て言うか、エンデヴァーが来るとか聞いてねーよ。なんだよ、好き勝手して遊んで暮ら

せるって聞いてたのに、これじゃあ話が違くねえか!!」

「何にせよ、勝てば良いのよ!好き勝手生きるのはよお!!」

俺を円心に扇状に広がるヴィラン共。

その横幅を徐々に広げ、俺を左右に挟む形で対峙したいらしい。

「時間は稼ぐが、こんな雑魚共だ。倒してしまっても構わんだらうな…」

今一度両手に炎を纏わせ、ヴィラン共に対峙する。

右に20、左に20、正面に10。

よく集めたものだ。

「来い、道を踏み外したバカ共。拳と炎で説教してやる」

—————

Side : All might

「始まったようだな」

「ですね」

「入ったすぐ側の小部屋に潜んでいた私たちは外の状況を確認した後に、扉の鍵を掛ける。」

「どうやら下のようだし、大穴開けて突入してやろう」

「ここは四方が壁ですし、構造上、他の部屋への影響は無いでしょう。私は天井に退避していますので、思う存分お願いします」

「任された!!」

張り詰めた二の腕に更に力を込めて、拳とヒーロースーツを軋ませる。

「DETORIT SMAAAAAASH!!!」

振り下ろした拳はそのまま床を突き抜け、小部屋の床全てを階下へと叩き落とした。

「ぐえ……っ!？」

瓦礫となった元床達が降り注ぎ、階下にいた何者かの声上がる。

グチャリ、と肝が冷える滑りの有る水のような音に最悪を想像した。

「ま、不味い!?!例えヴィランでも殺してしまっただけだぞ!?!」

私は慌てて飛び降りるとそこは白一色の広い部屋だった。

病院の一室にしては広すぎるのでこの場を使い始めてから手を入れたのだろう。

それよりも声の主は大丈夫だろうか!

私は瓦礫を払い除け、傷病者の有無を確認する。

しかし、想像していた赤い赤い血の池はそこにはなく、鼻に付く濁り腐った泥水のよ  
うな何かがあるだけだった。

「オールマイト!怪我人はこちらで治療します!」

すぐさま私の後を追ってきたサーも同じく慌てている。

事情を説明しようとする振り返ろうとした瞬間。

視界の端で何かが動いたのを感じた。

視線を戻すとそこには私に覆い被さろうとする泥水が…。